
ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

【Nコード】

N2837Q

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

僕とちっさい幼なじみと召喚獣のifストーリーです。本篇ではつぐみと深紅が登場して、他の作者さんの小説からオリキャラを貸してもらって進めて行きたいと思っています。なにとぞ、宜しく願います（土下座）

登場作品介绍（前書き）

追加です！

登場作品紹介

この小説は『僕とちっさい幼なじみと召喚獣』のifストーリーです。

いろんな作品のオリキャラを登場させます！

登場予定作品

作者の方では、『僕とちっさい幼なじみと召喚獣』から、雨宮つぐみと神埼深紅。

『僕とみい姉とFクラス』から姫路亮君をだします。

リザクさんの作品

『バカとテストと召喚獣』気まぐれ猫のスケッチブック』から、遠月優羽と雨咲蒼夜。

レインさんの作品

『バカと歌姫と召喚獣』から、桜木恋と七咲雫。

秋雨さんの作品

『バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめ』から、久遠光一。

闇介さんの作品

『バカとテストとヤミ』から薄刃闇太。

LAN武さんの作品

『バカとテストと年上の同級生』から、榊龍星。瀬川芹香。榊白姫。

カトラスさんの作品

『バカと少年の異世界道中記』から、神薙綾人

つぐみの取り合い？みたいなことも起きるかもしれません。

そして、つぐみはよく振り回されることが多いです。

つぐみも少しは積極的になっていたり。

深紅と久遠はライバル設定です。

オリキャラが登場します！

他にもよそのクラスでいいので参加させて欲しい方は言うてください
いね？

優羽から友達の証としての物を大切に持って持っている。

・明久はFFF団に入ってません。

登場作品介绍（後書き）

キャラ追加！！

登場キャラ紹介コーナー追加編(前書き)

LAN武様のキャラを紹介します！

登場キャラ紹介コーナー追加編

『榊龍星』

- ・身長：二メートルjust
- ・体重：97キロ

病氣療養の為に文月から離れていてそれも完治して復学出来るようになったから視察がてらに清涼祭を見に来た。

遅刻常習犯で遅刻魔神と呼ばれたりするが、もっぱら『兄貴』と呼ばれる。

日本史特化型の筋肉紳士。

趣味は鉄人と同じく身体を鍛える事とトリアスロン。後ゲームと漫画。

姫路瑞希とは幼なじみで互いに『瑞希』『龍兄』と呼び合う。

姫路亮とも幼なじみで互いに『亮』『龍星兄さん』と呼び合っています

姫路料理の一番の犠牲者。これにより彼の胃袋はオリハルコン並みに鍛えられた。

髪は黒で首の後ろで結んでいる。

彼女持ちの為、FFF団からはS級異端者認定されている。

召喚獣

装備は日本刀に青い着物と白い袴。

腕輪の能力は『爆炎』そのまま放射と刀身に収束させる事が出来る。因みに収束した場合、刀身が炎で熱され真っ赤に染まる。

作者：LAN武様』

『瀬川芹香』

Aクラス所属の龍星の恋人。

身長：背は凡そ158センチ位い

髪色：黒というより濡れ羽色

髪型：腰より下まで伸びており、それをポニーテールに纏めている。
スタイル抜群で胸は瑞希以上のスイカップ（笑）

学園長藤堂カヲルは母方の祖母、つまり学園長の孫。

学園長と似ても似つかないので大抵の人に信じて貰えない。

学園長曰わく「あたしの若い頃にそっくり」だそうな。

龍星との出会いは中学の頃。

告白は意外にも芹香の方から。

龍星入院中は三年間毎日お見舞いに行っていた。

性格は大人しく恥ずかしがり屋。

故に告白したのが芹香の方と知って明久と瑞希はびっくりしていた。
つぐみや亮は後から明久と瑞希の情報で知る。

霧島翔子・木下優子・工藤愛子は友達の間柄。

召喚獣

装備はネコミミ&尻尾に巫女さんスタイルに弓装備。

腕輪は『疾風』。

弓に纏わせて敵を斬る事と矢に纏わせて高速で打ち抜く事が出来る。

作者：LAN武様』

『さかきしりひめ
神白姫

龍星の従姉妹で見た目クールな甘えん坊。

口調はお嬢様言葉で話す。

芹香がにゃん娘なら白姫はワン娘。

すらりとした長身で胸は翔子より少し小さい位。髪は薄い青で肩までのショートカット。

嬉しい事があると犬耳と犬尻尾が生える。

尚、この状態（ワン娘モード）になると前後不覚となり、平気でパッツ丸見せ状態になったりする。

人間大好きというよりも、龍星の周りの人大好き。

明久、瑞希、芹香、つぐみ、亮、恋は言わずもがな、ムッツリーニ、美波、雄二、秀吉、光一、深紅にも抱き付く。

因みに幽霊や妖怪と言った所謂おばけの類がまるで駄目。

幼い頃に散々父親に脅されて以来、その手の話を聞くとトラウマで幼児化するようになった。

因みに幽霊や妖怪と言った所謂おばけの類がまるで駄目。

幼い頃に散々父親に脅されて以来、その手の話を聞くとトラウマで幼児化する。

身長：165cm

体重：42kg

3サイズ・上から81・60・78

召喚獣の装備

赤い武者鎧に白い袴。二本の十文字槍。バサラの幸村装備。

腕輪の能力

氷結・武器に氷を纏わせて切ると相手が凍り付く。

細かい氷をショットガンのように打ち出すことが出来る。

作者：LAN武様』

康太の幼なじみ

名前)

あいざわあやな

相沢綾菜

性別)

女

身長)

186cm

クラス)

2年C組

一人称)

わたし

容姿)

文月最強のバストサイズ。

髪はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。

少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。

性格)

純真無垢で、赤ちゃんはキャベツから産まれてくると本気で信じている。

備考)

小さい頃は小柄で体が弱かったが、どんどん成長して頑丈な体と誰にも負けない健康体を手に入れた。

なぜか、とんでもない怪力の持ち主で、鉄筋をアメ細工のようにグニャグニャに曲げたり出来る。

性知識は完全にゼロで説明されても理解できない。

将来の夢は、『こーちゃん(ムツツリー二のこと)のお嫁さん』と笑顔で言い切る。

ムツツリー二を抱きしめるのが大好きで、スキあらば抱きつこうとするが、生命の危機に直結するため、よく避けられている。

あまりやられると、子供のように泣き出して、手が着けられなくなる。

学力はCクラスレベルだが、保健体育だけは低い。

文月では珍しい零点をとることもあるレベル。

召喚獣は笑顔を浮かべた天使だが、なぜか武器は釘バット。

オリキャラ

名前)

かみなぎあやひと
神薙綾人

クラス)

A

年齢)

明久達と同じ

外見)

スパロボのレナンジエス・スターロードそっくり。

容姿)

黒髪のきりつとした瞳

カッコイイ

性格)

性格は普段は冷静沈着だが心には熱く燃える闘志を秘めている

備考)

自衛の手段として様々な武術を学んでおり腕っ節は結構強い。

趣味は漫画やゲームといった所謂オタク趣味で、その中でも仮面ライダーとウルトラマン、ガンダムを愛している。

小さくて可愛い生き物を見ると愛ですにはいられないという特殊な性癖を持っているが本人はきにしていない。

親の都合で引越してきて転入生として文月学園にきた。

ミニコンみたいな部分があるかも？

名前)

もみやかすみ

元宮霞

身長)

146cm?

性別)

女

クラス)

A

容姿)

銀色のサイドポニーで緑色の瞳。

かなり可愛い

たまにポニーテールかストレートになる。

性格)

明るく無邪気で甘えん坊かな？

好きな事)

綾人といること

嫌いな事)

綾人を怪我させる人

得意なこと)

料理、でも綾人にはおよばないと思っているらしい

得意科目)

化学と数学

苦手科目)

英語

備考)

実は超能力者？

綾人の幼なじみ。

綾人に想いを寄せている

名前)

かごやま

狩谷晃希

性別)

男

クラス)

A

身長)

186cm

特技)

剣道

一人称)

僕

容姿)

赤色のショートヘアで紫色の瞳でイケメン。

備考)

成績はAクラス並。

龍星と芹香と白姫とは知り合い。

剣道部主席でエース的存在。

暇な時は剣道部に行き鍛練している。

色恋事に疎くて鈍感。

どこからともなく竹刀を出してFFF団の攻撃をしりぞく。

得意科目)

全て

苦手科目)

特になし

召喚獣)

顔はデフォルメされた晃希で服装は着物で獲物は刀。

腕輪の力は麻痺と毒。

登場キャラ紹介コーナー！改編

『雨宮つぐみ』

- ・容姿：黒髪のツインテールで鈴付きつさ耳みたいなりボンをつけており、童顔で目が少しだけ垂れ目。
- ・性格：優しく仲間想いで健気に頑張るところもあり、親しみやすい。友達と明久を大事に思っている。
- ・身長にコンプレックスがあり、綺麗な人を見ると憧れをいだく。
- ・超能力があるけど、普段は使わないようにしてる。（詳しい詳細は僕とちっさいを参照）

- ・一人称はあたし。
- ・明久の幼なじみでお隣に住んでいる。
- ・趣味：料理と絵
- ・身長：138cm
- ・得意科目：数学と英語以外は普通
- ・苦手科目：数学と英語

『神埼深紅』

- ・容姿：水色のロングヘアで花の髪飾りをしていて、少し目がつり目がち。
- ・性格：おとぼけでミステリアスで、仲間想いな所がある。
- ・男の声と通常の声を使い分けることができる。
- ・一人称はわっち。
- ・身体能力が高くて情報とかも逐一ゲットしてる。
- ・素性が謎に近い。
- ・コードネームはクリームゾン
- ・身長：155cm

- ・得意科目：物理以外は普通
- ・苦手科目：物理？』

『姫路亮』

- ・容姿：黒髪のショートで前髪に赤色のメッシュがはいってる。けっこうカッコイイ。
- ・性格：基本真面目で苦勞性な所があるが、敵には冷酷。
- ・姫路瑞希の双子の弟。
- ・桜木恋に恋心を抱いている。
- ・桜木恋の幼なじみ。
- ・知り合いが多い。
- ・身長：177cm
- ・得意科目：保健体育以外
- ・苦手科目：保健体育』

『遠月優羽』

- ・容姿：翔子と同じような髪の長さだがポニーテール、顔は可愛いと言っより綺麗。
- ・黙っていれば男が寄って来るほどの美人。
- ・性格：極度のきまぐれ気分屋な性格、本能の赴くままに行動し自分がやりたいように行動する。
- ・趣味：スケッチ、昼寝、翔子との会話、雄二いじり、などなど
- ・特技：変装、料理、スケッチ、勉強。
- ・得意教科：保健体育以外全般
- ・苦手教科：保健体育
- ・作者：リザク様』

『雨咲蒼夜』

- ・容姿：短髪の黒髪の青年、中肉中背
- 特徴が無いのが特徴というぐらいの普通の顔立ち
- ・性格：基本的に落ち着いており静かな性格である。しかし騒がしいのは苦手な訳ではなく、むしろ好きな部類に入る。基本的に騒ぎには被害者側である。所謂そこら辺の落ち着いた今時の青年的な性格。
- ・得意教科：世界史、日本史、基本的に暗記科目を得意とする。
- ・苦手科目：数学、物理や化学など理系教科。
- ・作者：リザク様

『桜木恋』

- ・容姿：黒くて長い髪、星形の髪飾りをしている。目は普通な感じ
で色は赤。胸は普通ぐらいだがプロポーションは良い方。なぜか食
べても太らないらしい。
- ・性格：冷静、おとなしい、つつこみ担当、友達思い、明久思い、
少しS、黒面あり、弱ツンデレ
- (特殊条件で) 甘えん坊、ドS
- ・得意教科：ほとんど、中でも現代社会は瑞希より上。
- ・苦手教科：特になし。
- ・作者：レイン様

『七咲雫』

- ・容姿：黒髪のショートカット 少しでもだけつり目、胸は美波より少
しあるくらい。
- ・性格：クール、S、真面目、冷静、責任感が強い
- ・得意教科：英語以外
- ・苦手教科：英語

・作者：レイン様

『久遠光一』

・容姿：黒髪のショートヘア。

・貧弱な体で体力が格段に劣る。

・性格：激派の名に恥じない程好戦的で、敵対する者に対してはとことん容赦しないが、基本的に自分に対して好意的な人間にはとことん優しい。

・身長は176cmで体重は41kg

・ライバル認定：深紅、蒼夜、闇太となっています。

・得意科目：物理、数学、英語。

・苦手科目：日本史、世界史、化学、古典。

・作者：秋雨様

『薄刃闇太』

・容姿：黒髪の短髪で黒色の瞳で標準的な体型。

・性格：クールに見えて実は初な所がある。工藤と土屋の自主規制な話には赤面すること多し。

・身長&体重：身長168cmと体重54kg

・得意科目：文系

・苦手科目：保健体育

・作者：今宵闇介様

登場キャラ紹介コーナー！改編（後書き）

こちらのオリキャラは増えます。

妄想大好きですので！

優羽と蒼夜のお相手！

間太は後で考えるかな。

プロローグ

ジリリンという音が鳴ると目を覚まして目覚まし時計を止める。

「朝…」

目をこすりながら小柄な体を起こしてベッドから起きると、制服に着替えて洗面所に行き、

鏡をみながら髪を櫛で綺麗にしてから鈴付きリボンをつけて顔を洗い、タオルで顔を拭く。

次に洗濯物を干して、二人分の朝食の準備をする。

「さて、アキ君を起こしに行かないと！」

咳いて学生鞆を持って玄関に向かうとなぜか喧嘩してる声が聞こえる。

いや、喧嘩といえるかは不明だ。

「ま、またなの？」

今日はないと思っていたのにと深く落ち込んでいるつぐみ。

意と決して、玄関を開けると・・・

黒くて長い髪で星型の髪飾りをしている女性と黒髪で霧島と同じ長さでポニーテールで綺麗系な女性が居た。

「恋ちゃんと優羽ちゃん。近所迷惑になるから、静かにしよつよ！」

「あ、つぐみちゃん！」

「あ、つぐみん」

つぐみが声をかけると二人はいつせいに振り向いてつぐみは抱きしめられた。

「ちょっと、恋ちゃん。つぐみんは私が抱きしめるんだよ？だから、離れてよ」

「そんなことさせません。私が抱きしめるんです！そっちが離れてください」

「ちょ、ちょっと苦しいよー！！」

朝から振り回されるつぐみに、全然気にしていない優羽と恋が目撃されことはもう日常茶飯事なくらいにあったとか。

だから、近所の人はもう慣れていたりする。

この後つぐみがぐったりとなるまで続くかと思っただが、明久が慌てて来て優羽と恋をなんとか止めた。

つぐみが正気に戻ると朝食を急いで食べて、学校に向かった。

「あ、早く学校に行かないと！！」

「そうですね、急ぎましようー！」

「ゆっくりでいいじゃん〜」

「ダメだよ、急がないと！」

明久が時計を見て焦りながら言うと恋は頷いて言うが優羽はしれっ

と言い、つぐみが慌てて言い、背中を押す。

「つぐみん可愛い〜」

「わぷっ!?!」

「ちょっと！遠月さん、なんて羨まし……じゃなくて。今は急がないとダメですよ!」

「今、本音でかかってなかった!?!」

再びつぐみを優羽は抱きしめていたら、恋ちゃんが優羽から離そうと近寄って言い、明久は思わずツッコミをいれていた。

しばらくして学園の校門についた。

その校門には西村先生が立っていた。あだ名は鉄人と生徒から呼ばれている。

「遅刻だぞ。桜木に吉井に雨宮に遠月」

「す、すいません!西村先生」

「に、西村先生、遅刻してすみません。後、おはようございます」

「鉄……じゃなくて、西村先生。遅刻してすみません」

「西村先生、おはよ〜」

西村先生につぐみ、恋、明久、優羽という順番に挨拶する。同情めいた表情をしてつぐみに言う西村先生。

「雨宮：毎日大変だな」

「あ、あはは（汗）」

つぐみは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まあ、いい。ほら、お前等の新しいクラスがこれに書かれている」

西村先生がそういうと箱から4つの封筒を取り出して渡してきた。

「まったく、お前だけだぞ。テスト中にデッサンなぞしていたのは、絵の出来は素晴らしかったがな」

「いいじゃん、Fクラス。ガリ勉Aクラスより楽しそうだし」

優羽ちゃんがそう言うのと西村先生はため息をついていた。

優羽の紙には『遠月優羽：Fクラス』と書かれていた。

「桜木は試験を途中で退席しなければ、Aクラスにいけたのに」

「あはは、仕方ないですよ。体調の管理をちゃんとしてなかったのが悪いんですから」

「そうか、雨宮。お前がしたことは教師としては認めることはできませんが、個人としてはいいことをしたと思うぞ」

「ありがとうございます！」

恋は苦笑いしてつぐみは笑顔でお辞儀して言う。
この学園の振り分け試験で途中退席すると例外なく0点になるのだ。
恋とつぐみは紙を見ると『桜木恋……Fクラス』と『兩宮つぐみ……
Fクラス』書かれてあった。

「え！？ つぐみもなの！？」

「うん、恋ちゃんの体調が悪そうだったから」

「恋ちゃん、ずるい〜！！私もつぐみんに付き添ってほしかった！」

「試験場所が違うんですから、仕方ないですよ」

明久が驚くとつぐみは詳細を語る。

優羽は羨ましそうに言う。恋は笑顔で答えていた。

西村先生はその様子を見てFクラスの先行きが不安になっていたら
しい。

「それより、アキ君はどここのクラスなの？」

「え、あーうん。ごめんね、つぐみ……」

「…もしかして」

「あはは、僕も途中退席しちゃって」

「えー！！！！？」

つぐみは明久が持つてる紙を見ると

『吉井明久……Fクラス』

となっていた。

こうして、つぐみ達の最低クラスでの生活が幕をあけた。

プロローグ（後書き）

つ、次はあのキャラを登場させます!!

感想と評価をお待ちしております

バカテスト 第一問

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希と桜木恋の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

『正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんと桜木さんは引っかけかりませんでしたね。』

28

久遠光一の答え

『問題点……ガスコンロの火力が低すぎる事、火炎放射機でも使用するべき』

合金の例……ジェラルミン』

教師のコメント

『そんな事したらこの問題以前の問題です。
そして合金の例の方は“ジェラルミン”ではなく“ジュラルミン”です。』

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

『そこは問題じゃありません』

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強い』

教師のコメント

『すごく強いと言われても』

雨宮つぐみの答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点』

合金の例……鉄』

教師のコメント

『鉄は間違いです、問題点は合っていたのに残念です』

遠月　優羽の答え

『問題点……調理するのが面倒だったから』

合金の例……ガンダリウム合金』

教師のコメント

『問題を全否定しないでください。あとあっている問題をわざと消して間違えないでください』

バカテスト 第一問（後書き）

バカテストを書いてみました！

その他作者の人に怒られないか不安です（汗）

第1問Fクラスの教室で

靴箱に到着すると知り合いがそこにいた。

「あ、久遠君。おはよう！」

「久遠君、おはよう〜」

「久遠君、おはようございます」

「ん？ 明久につぐみに遠月と桜木か。よう」

「おはよう、光一。どうだった？」

明久の悪友でつぐみとは明久を大切にしている同盟の一人となっている。

お互いが明久を大切にしているからでもある。

西村先生に目をつけられてはいるが、明久と同様な扱いとなっていたりする。

明久の質問に苦笑いしてジェスチャーして答える。

「Fだった」

「じゃあ、僕達と同じだね」

「ははっ、まあ仲良くやろうや」

「久遠君と一緒にか。また、アキ君を支えようね？」

「そうだな……ただ、聞いていいか？」

「何かな？」

「どうして、遠月に抱きしめられてんだ？」

「……これには深い事情があって」

苦笑いしながらつぐみは光一の質問に答える。

「あ、またですか！つぐみちゃんが困ってるじゃないですか！」

「だって、つぐみん可愛いんだもん」

「いつもの事なんだな、明久」

「うん、もう日常茶飯事ってくらいに」

明久はため息をはいてどう止めようかと悩んでいた。

「そ、それより。教室に行こう？」

「あ、忘れてたよ」

「そうですね！」

「まさに鶴の一言だな」

「確かに」

つぐみの一言で正気に戻ると優羽と恋を見て光一は言うつと明久は頷いた。

そんなこんなでAクラスの教室前にきたらつぐみ達は驚愕した。

「うわ〜……大きい教室」

「こんなに大きい教室あつたんだね」

「凄い教室」

「広いね〜」

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあるつかという広さを持つ教室だった。

その教壇に立つにはクールで知的な大人の女性の高橋洋子先生が居た。

黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイには高橋先生の名前が表示されていた。

「学年主任の高橋先生か、知的で大人の雰囲気か素敵だな〜。」

低い身長に童顔な自分がコンプレックスなので知的美人には憧れを抱く。

その一方で明久はAクラスの設備に目移りをしていた。

「うわっ！席広っ！エアコンにパソコンに、あ！冷蔵庫まであんの！?」

「システムデスクにリクライニングシート…あれじゃ、教室というよりホテルだな」

この設備には光一も苦笑いを浮かべるしかない。

「では、はじめにクラスを代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような白い肌を持つ少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

「……霧島翔子です。よろしくお願いします」

先ほどと同じようにプラズマディスプレイに大きく名前が表示された。

「綺麗な人……」

「つぐみ？」

「つぐみん……」

「……つぐみちゃん」

つぐみの呟きに明久と光一と恋と優羽は聞こえていたのかつぐみを見る、するとつぐみは笑顔で振り向いて

「さて、そろそろ行くっ？」

「あ、うん」

「行くか」

「そうですね」

「つぐみんは可愛いから、霧ちゃんにだって負けてないのに」

明久の手をひっぱって旧校舎にあるFクラスに向かう。
その後を光一と恋と優羽が続く。

「な、なんというか」

「うん…… Aクラスとは別の意味で凄いね」

「予想どつりの教室だね」

「予想していたんですか？」

「この教室を見ただけで、もう嫌気がさしてきた」

場面変わってFクラス前で明久もつぐみも呆然と佇んでいた。
同じ旧校舎にあるEクラスと比べてもこちらは酷い。

2年F組と書かれたプレートがボロボロの木の板であることから推測すると部屋の中はさぞ酷いだろう。

「設備格差にしては酷い気がするよ」

そう呟きながら、つぐみは教室の戸を開ける。

「遅いぞ、ウジ虫やる…」

教壇に立つ野性味たつぷりの顔の少年はつぐみに気づいて固まった。

ドサツ、つぐみは学生鞆を落としてしまう。

「ふえっ…ウジ虫…じゃ、ないもん」

みるみるうちに目に涙が溜まり、涙目になるとポロポロと頬とつたつてこぼれおちる。

「す、すまん！明久だと思って勘違いを『総員ねらえ〜！！』うおっ！？」

「坂本君、オハナシしましょうか」

「雄ちゃん、つぐみんを傷つけるなんて酷いよ〜？」

光一の号令で雄二に向けてFクラスに大半が上履きを構える。そして、恋と優羽がゆらりと雄二に近寄っていた。

「お、お前ら！！落ち着けて…ぎゃあああ！！！！」

「黙れ！こんな可愛い子を怒鳴りつけるなど」

「言語道断だ！」

「幼女最高!!」

「ロリっ娘最高!!」

「ロリっ娘は人類の宝だ!!」

「成敗です!!」

「つぐみんの敵!!」

清々しいほどの連携ぶりだ。

つぐみは死んでませんよ、優羽さん（苦笑）

「あれ、つぐみ。どうしたの？」

「う、ウジ虫って……言われて」

「あ、明久か！助ける！」

「雄二、くたばれええ!!」

「お前もかああ!!」

数分後、雄二が謝るということで、みんなは矛を収めた。

「雨宮、悪かった。さっきのは雨宮の後ろにいるバカに言おうとしていたんだ。」

だから、雨宮に対して言ったわけじゃない」

優羽の幼なじみで明久と光一を介して知り合った雄二が謝っていた。

「まったく、雄二ももう少し考えてからいいなよ」

「そうだな。だから、お山の大将きどりのゴリラ野郎と言われるんだ」

「バカとモヤシに言われたくないな。ウジ虫野郎」

「なんだと!」

「んだと!」

明久が怒り、光一が懐からエアガンを取り出そうとすると

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

そんな3人の後ろから覇気のない声が聞こえる。

振り向くとそこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえないおっさんがいた。

「それと、席についてももらえますか? H Rをはじめますので」

どうやら担任教師が到着したようだ。

明久も雄二もつぐみと優羽と恋と光一と男子生徒もそれぞれの席に座る。

「大丈夫、つぐみ?」

「ぐすつ……うん、大丈夫だよ、アキ君。」

ニコツと笑って言うつつぐみは改めて周りを見る。

「良かった。それにしても凄い教室だね」

「凄いというより、酷い教室だよね」

ホッと安心した明久も周りを見て言うつつぐみは周りを見ながら答える。

「畳敷きに卓袱台に座布団。畳はカビ臭いし……あ、蜘蛛の巣だ。

明日から、カビキラーとファブリーズでも持ってこようかな」

そつつぐみが言うてるうちに先生は教壇に立ち、自己紹介をする。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生はお世辞にも綺麗とは言えない黒板に名前を書こうとして、やめた

「あれ、なんで黒板に書かないのかな？」

「ああ、それか。俺が教壇に立った時にみたら、チョークのくずしかなかった」

つつぐみが不思議そうにしていると雄二が答えた。
その状態に苦笑いをこぼす、明久とつつぐみ。

「つぐみんかわーいーいー！」

「ちょっと、独り占めはダメです！」

「たーすーけーてー！」

「飽きないな、こいつ等」

「うん、てか。つぐみがまた挟まれてるよ」

「優羽は可愛い物に目がないからな」

つぐみを抱きしめると優羽とそれを止める恋に助けて欲しそうながみんぐみの様子を光一と明久と雄二は眺めていた。

第1問Fクラスの教室で（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

つぐみは光一の影響で少しは積極的になっているかと思えます。

バカテスト 第二問

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

『正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。』

久遠光一の答え

- 『(1) 雄二を木から撃ち落とす
- (2) 泣きつ面にマシンガン』

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面に雄二』

教師のコメント

『君たちは坂本君になにか恨みでもあるのですか』

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

『シユールな光景ですね』

桜木恋の答え

『(1) 猿も木から落ちる』

『(2) 弱り目に祟り目』

教師のコメント

『正解です。』

遠月優羽の答え

『(1) 雄ちゃんの川流れ』

教師のコメント

『貴女もですか』

雨宮つぐみ

『(1) 河童の川流れ』

『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

『正解です』

第2問Fクラスで自己紹介(前書き)

ヒヨウガ様、レイン様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！

第2問Fクラスで自己紹介

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば、申し出てください」

不備という言葉に、全員がありまくりと言わんばかりに名乗り出た。と言うより、どこが完備されてるのかむしろ聞きたいと言わんばかりに。

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

一つ一つの不備の声に福原先生は答えて行くが、完全な解決策とはなっていない。

これが最低クラスなんだね。

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂う。

きつと床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生から指名を受け、廊下側の生徒の一人が立ちあがり名前を告げる。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年1年、よろしく頼むぞい」

彼は木下君。久遠君経由で知り合ったんだけど、女の人を間違えてしまうほど、似てるんだよね。

「……土屋康太」

次の人も知り合いでアキ君経由で知り合った忍者みたいな人。異名はムツツリー二というらしい。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手です」

また、綺麗な女性だと思いながら、つぐみは見ていたが次の言葉にムカツときた。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

チリンッ

つぐみが動くとき鈴が鳴り、立ちあがって美波を睨んだ。

「な、何？」

「そういう趣味はよくないと思うの。」

「なんで、そんなこと言われなさいといけないのよ」

「いいから、訂正してよ！アキ君に失礼でしょ！？」

「喧嘩はそこまで。島田さん、席についてください」

もの凄く不機嫌な彼女にそう言われた美波はムツとなるが、福原先生が止める

「…はい」

「…すみませんでした」

つぐみも座りなおすと美波も座った。

どこかギスギスした空気になったが、明久には分からない為つぐみに聞いた。

「つぐみ、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

明久に聞かれたつぐみは微笑んで言う。

過保護だけと同じように明久を大切にしている光一にとっては気持ちかわかるような気がした。

「私は桜木恋といます。趣味は歌を歌うことと読書をする事です。よろしくお願いします。」

「はいっ！質問です！」

一人の男子生徒が手を上げて恋ちゃんを見てる。理由は分かるけど。

「なんででしょうか？」

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによつては失礼な質問ですが無理もないよ。みいちゃんと同様に成績いいから、Aクラスだろうと思ったのに、ここにいるからね。

「熱で倒れそうになってしまいましたので……」

恋ちゃんは普通に答える。

その言葉を聴き、クラスの人々は『ああ、なるほど』と頷いていた。

「遠月優羽です。つぐみんに手を出す人は蹴散らすからそのもつもりで」

「遠月さんなら、いいんですか!？」

「禁則事項だよ」

優羽ちゃんはクラスメイトの質問にのらりくらりとかわしてるよ。

この後なんも質問もなく終わると優羽ちゃんは座ってあたしを抱っこしてきた。

「……です。よろしく」

ぼんやりと考え事していると、あたしの前でいる人が終わっていた。次はあたしの番だね。

「雨宮つぐみです。部活は美術部です。趣味は料理で特技は声マネです」

優羽ちゃんから離れて立ち上がって自己紹介する。

あたしがペコリとお辞儀するが勢いあまって卓袱台に顔をぶつけてしまった。

あうっ、痛いよ。

あれ？教室内が鎮まってる。優羽ちゃんと恋ちゃんの反応もなんか変だね？

「っ、つぐみ？」

「ら、らいらりよつぐみ」

『ぐはあっ！！』

涙目でなんとか痛みに耐えながらみんなを明久を見るとFクラスの男子数名が鼻血の海に沈んだ。

「…明久」

「うん。あれは慣れててもキツイよ」

雄二と明久もクリーンヒットしたみたいだが、なんとか耐えてる。前かがみになつてる人が多いのはなんでかな？

その後、つぐみが座ると久遠君が立ちあがる。

「久遠光一。サバイバルゲーム愛好会の一員で、その木下秀吉とは幼馴染」

「まあそれなりに仲良くさせてもらっておるぞい。姉上共々な」

『木下優子とだとお！！？』

木下優子と言えば、秀吉と瓜二つの双子であり、現在Aクラスに所属する優等生。

ほぼ全員が久遠君に対してカッターを構えるが、久遠君がポストンバグからマシンガン（エアガン）を取り出したよ。

「ちなみに銃が好きで、常日頃から持ち歩いていないと気が……調子が狂うほど。」

当然腕にも少々自信あります」

「とんでもない事をサラリと言うでない」

「ちなみに秀吉とは親友ではありませんが、こいつの姉木下優子とは他人以上知り合い未満程度ですので、誤解のない様お願いします」

エアガンだとわかっていた物の、流石に銃を見て構えた全員が萎縮してるよ

久遠君ならやりかねないと思ってるのかな？失礼すぎるよ

「まさかと思うけど、それ本物じゃないよね？」

「エアガンにきまつてるだろ、ここ日本だぞ？ それより明久、次はお前の番だぞ？」

「あ、そうだった。」

次はアキ君の番となり、軽く咳ばらいをした。
何をするのかな？

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアーリーーン!!』

野太い声の大合唱が響く。

これはキツイ。なにがって？色んな意味で。

当然アキ君はめちやくちや笑顔をひきつらせ、混ざらなかつた木下君と久遠君も苦笑いしてる。

「……………失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

「なんつー不快な大合唱だ」

「確かに、当事者でないワシも鳥肌が立ったぞい」

気分悪そうに明久は座るとあたしはアキ君を見た。

久遠君と木下君が何か話していたけど、今はアキ君を心配しないと！

「なにやってるの」

「いや、これくらいのノリがないと盛り上がらないかと思って」

「いらなと思うよ。そういうのも」

明久の言葉に苦笑いしながらつぐみは言う。
次の人が立ちあがる。

「神埼深紅や。趣味は罨とか暗躍や機械いじりや。特技はなんでもできるで」

ニカツと笑顔で神埼さんは笑って言う。

水色のロングヘアーで花の髪飾りが可愛いな！。
スタイルもいいし、身長だって……羨ましいよ。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

「あの、遅れてすみません」

『えっ?』

誰からともなく、教室全体が豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。クラス内が騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度良いですね。」

みなさんに自己紹介して貰っているところなので、姫路さん、永久さん。あなた達もお願ひします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願ひします……」

「はい、永久渚です。趣味は料理です。よろしくお願ひします
そこにいる久遠光一と木下秀吉とは幼なじみです」

つぐみほど小柄ではないがその体をちぢこませて声を上げる瑞希ち
ゃん。

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかかそうな髪は保護役をか
きたてるようだ。

もう一人は瑞希ちゃんとあんまり変わらない感じの子で髪の色は黒
髪のサイドポニーで茶色の瞳で美人さんでした。

ふと、ぼんやりしていると久遠君と木下君が驚いていました。

「おま、いつ」

「そうじゃ！ 連絡などなかったぞ！」

「おとといかな。色々準備で忙しくて連絡できなかつたんだよ」

ニツコリと微笑んで永久さんは笑って答えている。

幼なじみにあえて嬉しいんだろうね。

「はい！ 質問です！」

「あ、は、はい！ なんですか？」

「何かな？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。

その小動物的な仕草が可愛かったりするらしい。
というか恋ちゃんと同じように質問してるよ。

「なんでここにいるんですか？」

これまた聞きようによつては失礼決まわりない質問が浴びせられる。
でも、これはクラス全員が思っている疑問だ。
ここも恋ちゃんと同じだね

可憐な彼女の容姿は一目を引くし、なにより彼女の学力は入学して
最初のテストで学年2位を記録し、その上位一桁以内に常に名前を
残しているほどだった。

だから、誰もが彼女はAクラスにいるに違いないと思っていた。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながら瑞希ちゃんは答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

「実はこっちも熱を出して」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。
試験途中での体積は0点扱いとなる。
結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあつた弟が心配で集中できなくて』

『ああ、お前には妄想の弟がいたんだつたな』

『つぐみちゃんが寝かせてくれなくて』

「あたし行ってないよ!!?」

『異端者だ!』

『嘘です! すんません!』

これは想像以上にバカだらけだ。

「で、では、一年間よろしく願いますっ!」

「一年間よろしく願います」

そんな中逃げるようにして瑞希ちゃんはアキ君と坂本君の隣に空いてる卓袱台に着く。

永久さんは久遠君の隣に座ってるよ。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す瑞希。

「よう姫路、体調は大丈夫か?」

「あつ、久遠君に……よ、吉井君につぐみちゃんに恋ちゃん!?」

よほど緊張して周りが見えていなかったのだろう。今気付いた様子で言う

「姫路。明久が不細工ですまん」

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そうだよ！アキくんはカツコイイんだからね！..」

姫路のセリフに便乗するようにキツパリと言う。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔しているかもしれないな。

俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え？ それは誰……」

『『それって誰ですかっ!?!』』

「確か、久保……」

二人が明久のセリフをさえぎって聞くと坂本が話だす。

「……………利光だったかな」

久保利光 (性別ノオス)

「……………」

明久は黙ってしまふ。

「明久……うつつうしいからさめざめと声を殺して泣くな。」

「もう僕、お嫁にいけない!!!」

「冗談だ……半分はな」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

坂本は明久の質問を無視して姫路に問いかける。

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「良かった。アキくんに聞いて心配したんだよ？」

「心配かけてすみません」

「でも、誰が連れて行ってくれたの？」

二人で悩んでいると、明久が声を張り上げる。

「ねえっ!!! のこりの半分はっ!!!?」

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

さすがに福原教諭に注意されてしまった。四人が居住まいを正して謝ろうとした瞬間。

バキィツ バラバラバラ……

教卓が音を立てて崩れ落ちた。寿命だったのかもしれない。

「……えーと、替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭は気まずそうにそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

苦笑いする、瑞希を見てから、明久は坂本に声をかける。

「……雄二、ちょっといい？」

「ん？ なんだ？」

「……じゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

立ちあがって廊下に明久と坂本は出る。その時一瞬だけ、瑞希ちゃんと目があつた気がする。

それにしても、あたしはいつまで優羽ちゃんに抱きしめられてたらいいのかな？

とりあえずは……。

「……どうしたの？」

「あ、つぐみちゃん。吉井君が坂本君と廊下に出たので気になって」
教卓の残骸を片付けながら廊下を見る瑞希に話かける。秀吉と須川君も手伝って来ています。

「アキくんと坂本君が？なんだろう」

明久が真剣な時は大抵だれかが絡んでいることが多い。予想を立てるとしたら、瑞希の為だろう。

お人好しな彼らしいことだ。

しばらくするとアキ君と坂本君と久遠君が戻ってきたのと同時に福原先生が戻ってきた。

「えー、須川亮です。趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原教諭が雄二に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。

その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

そこで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いとやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問

題意識を抱いている」

雄二は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声が
あがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要
求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が
大きすぎる！』

『そつだそつだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは俺の代表としての提
案なんだが」

自信たっぷり、野生味溢れる笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

彼、坂本雄二は戦争の引き金を引いたのであった。

第2問Fクラスで自己紹介（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

新キャラ 改

名前)

とわなぎさ

永久渚

年齢)

光一と同じ

性別)

女

容姿)

黒髪のサイドポニーで茶色の瞳で美人。

少しだけ幼い感じ。

性格)

世話焼きで明るくて元気。

得意科目)

数学と英語。

不得意科目)

保健体育

成績)

Cクラス。

備考)

つぐみとは気が合う仲で光一と秀吉と優子の世話を焼く。

光一達とは幼なじみで小学生の頃引越してから、高校生になって戻ってきた。

銃やエアガンやモデルガンに関しては結構知識があり、サバイバル同好会に入ろうかともくろんでいたりもする。

素直じゃない優子に対してヤキモキしてる反面安心している。

光一と秀吉を大切に思っており、手を出す輩には黒いオーラーを放つとか。

バカテスト 第三問

【第三問】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
」

姫路瑞希 & 桜木恋 & 久遠光一 & 永久渚の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

「正解です。4人共きちんと勉強していますね。」

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

「訳せたのはThisだけですか。」

吉井明久の答え

「 * x 」

教師のコメント

「できれば地球上の言語で。」

遠月優羽の答え

『これは私の祖母の本棚です』

教師のコメント

『わざと書いてませんか？』

雨宮つぐみ&神埼深紅の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

『正解です』

第3問 使者と屋上でミーティング（前書き）

レイン様、ヒョウガ様、エミ様、秋雨様

感想ありがとうございます

第3問 使者と屋上でミーティング

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんと桜木さんと遠月さんと神埼の姉御と永久さんがいれば何もいらぬ』

『雨宮を抱きしめたい』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。

一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないでおう。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことができるのだ。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦つことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。
その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違う。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からない。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。
だが、雄二はそれを否定してみせる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、坂本君はそう宣言した。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『そんなことより、雨宮を愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきた。

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

雄二が自信満々に笑って言う。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす坂本君。
優羽は楽しそうに笑い、恋と雫は黙っている。

「おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定する。

瑞希が慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがあのある有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

『ムツリーニ……………だ……………と？』

『ヤツがそつだというのか？バカな……………』

『だが見る。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そつとしてい
るぞ……………』

『ああ……まっただくだな。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「?????」

ただひとり、瑞希だけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「えっ！ わ、私がですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希。それを見て頷く雄二。

確かに彼女ほど頼りになる人材はいないだろう。

「それに、姫路に次ぐ実力の持ち主で、あの『歌姫』とも呼ばれている桜木だっている」

「ふえっ？ 私もですか？」

瑞希ちゃんに続いて恋ちゃんの実力も半端ないんだよ。恋ちゃんもかなり頼りになるし。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんとあの『歌姫』の桜木さんがいるんだっ』

『たしかに彼女達ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女達がいれば、ほかに何もいらぬいな』

『雨宮たん、かわゆす!!』

さきほどから、瑞希ちゃん達やあたしにラブコールを送る輩が増えているのはなんでかな。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが3人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室で満ちている。

「違う、4人だ。紹介しよう、遠月優羽だ。皆、知っての通り気まぐれ猫の呼び名だ」

雄二の発言に場がどんどん盛り上がっているのがわかる。

『気まぐれ猫ってたしか授業を3回しか受けてないのに進級できたって言う』

『確か、観察処分者になりかかっていたこともあるとか!』

ざわざわと優羽ちゃんのことでも盛り上がってる。

『このメンツならできるんじゃないか!?!』

テンションが上がり上がりしている所で坂本が一気に下がるようなことを

「それに、久遠光一と吉井明久、このコンビが居るんだ」

なんでここで悲鳴があがるのかな?

久遠君に失礼だよ。

『久遠って……あの学園の過激派筆頭って話の!?!』

『ああ。マフィアからスカウトが来てるって話だろ?』

『けど、吉井明久って誰だ? 久遠とコンビってことは、相当な悪人ってことじゃないか?』

むむっ！それってどういう意味なのかな？

「ちよつと雄二！　どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？」

しかもなんか、変な設定までつけられてるよ！！？」

「久遠の事は知っているみたいだから良いとして、明久を知らないなら教えてやる。」

こいつは“観察処分者”だ」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違っよっ！ちよつと、おちゃめな16歳につけられる愛称で」

「そうだよ！アキくんはおちゃめでおっちょこちょいだけど、実は優しいし頼もしいんだから！」

あたしも慌ててフォローするんだけど、意味不明になってきたよ。

「そうだ。バカの代名詞であり、久遠の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちよつどいい」

「肯定するな、バカ雄二！！」

「酷いよ！坂本くん！自分からふっっておいてその言い方はどうかと思っよー！」

「まあ、落ち着け、つぐみに明久。これから挽回していけばいいだろっ？」

久遠君に宥められてあたしとアキ君は一先ず席に座る。

「明久以外にもこの《観察処分者》がいる」

「わっちのことやね？」

「ああ、宜しく頼むぞ。神崎深紅^{かんざきみく}」

にんまりと笑った女性に雄二は答える。

「まあ、教師立ち会い下でしか召喚できないし、フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が被るんだがな」

『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しむってことか』

『おいおい、それじゃあ、おいそれと召喚できないヤツが二人いるってことじゃないか』

「あ、ちなみに神崎に課された 観察処分者 の肩書きは、バカの代名詞という意味ではない」

雄二はみんなに説明しているが、肝心の深紅ちゃんはどうでもよさそうにしている。

深紅ちゃんにはあらゆる面で観察しないとイケないと思われてアキ君と同じ称号を持つてるの。

「あ、明久はザコだから、いてもいなくても関係ないがな」

「どこまで追い打ちかけるのっ?!」

「やっぱり、酷いよ。坂本君！」

「とにかく。まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「人の話を聞け！！」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ！！』

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

『おおーっ！！』

「お、おー……」

周りに流されながら瑞希は腕を上げる。
なんか不安な気分になってきたよ。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「ゴリラやる」

「ああ、ゴリラだ」

「神崎にモヤシ……てめー」

「ま、まあまあ」

怒る坂本君を恋ちゃんが宥めていた。

「と、とにかく。大丈夫だ、俺を信じる。俺は友人を騙すようなマネはしない」

「じゃあ、あたしが行くね！」

「ちょっと、待て！！お前は行ったらダメだ！」

「どうして？安全なら、あたしが行っても問題ないよね？」

「そ、それは」

「もしかして、雄二。僕を騙してるな！！」

明久はそう言っていると雄二に掴みかかり大騒動になったのはいうまでもない。

「なら、わっちが行くわ」

「な！？神埼が行ったら制圧しそうなんだが」

「そんなことせーひんよ。世の中面白い方がええやろ」

「大丈夫か？荒事だったら得意分野の俺も行ってやってもいいぞ？面白そうだし」

「大丈夫やて、でも…一緒に行こうかえ。楽しそうやし」

ニツコリと笑って深紅が言うと光一と一緒にさっさとDクラスに向かった。

隣の教室にて断末魔が聞こえたのは気のせいだと思いたいFクラスのメンバーだった。

「雨宮、あの時はごめんね」

「島田さん。あたしもごめんね」

「ううん、ウチも悪いしね。これからはウチ、素直になってみる」

「うん！頑張つてね」

いつのまにか来ていた美波につぐみはお互いの非を認めて笑顔で会話を話した。

これにて一件落着かな？

数分後

「ただいま、戻りましたえ」

「無傷かよ」

「なんや、わっち見たら。姉御言われてしもつて、宣戦布告もしてたんやけど。なんもされんかったえ」

『さすが、姉御！』

これでも皆のテンションあがるんだね。

「ほら、お前等作戦会議するから、屋上に行くぞ」

「あ、うん！行こう、アキ君、久遠君、優羽ちゃんに恋ちゃん」

「そうだな」

「そうだね」

「うん」

「そうですね」

「わっちらも行くえ」

皆でぞろぞろと屋上に向かった。

あ、お弁当も持参しているよ！

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。

雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希のスカートに注視するムッツリー

二以外のメンバーは目を細める。

「神埼、いつ頃にしたんだ？」

「今日の午後の開戦予定やで」

「なら、先にご飯だね」

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久」

「わかってるよ」

「アキくんのお弁当はちゃんとあるよ」

ニッコリ笑って笑顔で言うとムツツリー二が明久を妬ましそうに見る。

「妬ましい……」

「なるほど。今までの弁当は、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部じゃないよ。僕も作ってるし」

「ほう、ということは明久もお弁当は作れるということじゃな」

秀吉は明久を見て言う。明久にゲームはあまり買わせないようにしている為、二人で日程を決めて弁当と食事当番を決めているのだ。

「優羽はサンドイッチなんやね」

「うん」

「俺はカロリーメイトだな」

「カロリーは取れるようやけど、わっちの分食べるえ？」

「わたしもお弁当を作りたいのですが、許可をもらってないので作れないんです」

「え？そうなの？」

「当然だよ。料理に薬品をいれるんだよ？」

「マジ？」

「うん、一度だけ、姫路さんのお弁当食べたら、病院に入院していたんだ」

「それから、瑞希ちゃんにはちゃんとしたお弁当が作れるまでは禁止にしたんだよ」

あたしはため息を吐きながら言うと雄二と秀吉とムツツリー二と美波は青ざめていた。

恋ちゃんもその被害に合ってるから、なんとかしてるみたいだね。

優羽ちゃんはスケッチ中かな？

「という事はまた練習するんだよね」

「うん、まだまだ、だからね。」

「ウチも参加していい？」

「どうぞです」

「じゃあ、私も」

「私も作る〜」

「じゃあ、私も」

「わっちも〜」

美波ちゃんと瑞希ちゃんと優羽ちゃんと恋ちゃんとあたしと永久さんと神崎さんも参加して料理教室になった。

「明日が楽しみだね」

「うむ、そうじゃのう」

「明日はごちそうだな」

男性陣も嬉しそうに笑っている。

「それじゃ雑談はそこまでにして、そろそろ本題に入らないか雄二」

「ん？ ああ、そうだな」

「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

まず真つ先に、秀吉が疑念をぶつけた。
それもそのはず、段階を踏んでいくならEクラスが妥当であり、目的はA。

「簡単だ。姫路と桜木と優羽に問題がない今、Eなら正攻法でも勝てるが、Dクラスは難しい。」

それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

「成程。つまりこれは、最初のステップってなのかな？」

「ああ、ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「まあ、ぼちぼち行くで」

「……………(グッ)」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

「うーん、雄ちゃん、モデル件をしてくれるなら。参加するよ」

そう皆がいい、士気が上がる。

「それじゃやるか、明久」

「うん！ 僕達コンビの力、見せてやるう！」

「代表として、頼りにさせてもらうぞ。光一だけ！」

「ひどい！！」

「坂本君酷すぎる！」

Fクラス VS Dクラスの戦いが幕を開けた。

バカテスト 第四問

問・以下の問いに答えなさい。

(1) $4 \sin \theta + 3 \cos \theta = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する θ の値を1つ答えなさい

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 θ の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B - \cos A \sin B$

姫路瑞希と神埼深紅と遠月優羽の答え

『(1) $\theta = \frac{\pi}{6}$ 』

『(2) ？』

教師のコメント」

『そうですね。角度を θ °』ではなく』
『で書いてありますし、完璧です』

遠月さんはいつもこうやって真面目に書いてくれれば良かったのに』

土屋康太の答え

『(1) $\theta = \frac{\pi}{3}$ 』

教師のコメント

『およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません』

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

『先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです』

久遠光一の答え

『(1) $X \parallel 30^\circ$ 』

教師のコメント

『惜しいですが、ニアミスです。』

象限における角度は『 $^\circ$ 』ではなく『 $^\circ$ 』で書いてください。』

桜木恋の答え

『(1) $X \parallel$ たぶん3』

教師のコメント

『およそやたぶんをつければいいということではありません。』

雨宮つぐみの答え

『(1) \parallel / 6』

『(2) $^\circ$?』

教師のコメント

『正解です。結構なやんだようですね』

第4問Dクラス戦、終結！（前書き）

レイン様、秋雨様！

感想ありがとうございます！

第4問Dクラス戦、終結！

明久達が紛争するなか、つぐみは回復試験を瑞希と一緒に受けていた。

「次をお願いします」

「こつちもです」

「こつちもだよ」

「お、同じく！」

シュババッ

次々と問題を解いて行く、瑞希とつぐみにそれを素早い動作で取り、点数をつける、高橋先生がいた。

ある程度とけると、つぐみは立ち上がる。

「？もう、行くんですか？」

「早いね。つぐみん」

「あまり、無理してはダメですよ？」

「うん、大丈夫だよ。それに、アキくん達が心配だし」

ニコッと笑って言うとレポートを使い回復試験の教室から出て行

く。

「邪魔者は！ 殺します！！！」

戦線にテレポートすると叫びとともに、明久の召喚獣に襲いかかる女子生徒がいた。

「アキくん！ 危ない！ 試獣^{サモン}召喚！」

魔法陣が展開され、姿を現したのはうさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみをデフォルメした感じで武器はキャロットバトンでそれで相手を叩いて倒した。

『Fクラス 雨宮つぐみ 化学 134点 VS Dクラス 清水美春 化学 41点』

頭上には点数が表示されていた。

「そ、そんな！……」

「戦死者は補習だー！！！」

呆然としている美春に西村先生が現れて言つと肩に担ぎあげて歩き出す。

逃げようとする暇も与えられなかった。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんかからね！ このまま無事に卒業できると思わないでください」

最後まで言えずに補習室に連行される、美春だった。

だが、思い人にそういう言い方はいかなものか。

「アキくんは久遠君、大丈夫？」

「う、うん。平気だよ、つぐみ。それより、島田さんが」

「俺も平気だが」

つぐみが明久と光一に聞くと微笑んで返事し、美波を見ると深紅に宥められていた。

「よしよし、えろっ怖かったやろっ」

「うう、本当に怖かったわよう！！」

「深紅と居ると姉妹みたいだな」

「そっやろっか？」

「ああ」

「……神崎さん、いつのまに（汗）」

「……あたしにもわからないよ（汗）」

本当に謎な人物である。

やっと落ち着いて美波を見て深紅は言う。

「とりあえず、島田は回復試験を受けた方がええよ」

「気をつけて戻れよ」

「そうね。雨宮、助けてくれてありがとうね」

「あ、ううん」

美波はつぐみの頭を撫でて言うと言って行った。

「素直だね。」

「そうだね。さて、あたし達もこの後を頑張ろうね！」

「新鮮やね」

「そうだな」

『おー！！』

つぐみが笑顔で言うと士気が上がった。

戦線に戻り、今の渡り廊下はつぐみと深紅と光一のおかげでなんとか持っていた。

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り2人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかない！ 援軍を頼む」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！」

想像以上に劣勢かも。

五十嵐先生側はどうしようかな

「行きます！」

「行こうかな」

回復試験を終えた優羽と恋が召喚獣を召喚して五十嵐先生側の援軍に来た

「布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！」

五十嵐先生側の人は総合科目の人と桜木さんと遠月さんと交代しながら効率良く勝負をするように！

藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！」

『了解！』

皆が明久の指示に従って陣形を組んでる、これは明久を隊長として扱ってくれているのだろう

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「なにを待っているんだ！？それにAクラス成績の遠月と桜木もいるなんて、どうなってんだ！」

戦い方と恋ちゃんと優羽ちゃんの登場でどうやら気づかれつつあるようだよ。

「大変だ！ 斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって

報告が！」

「せ、世界史の田中だと!？」

「Fクラスのやつら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

Dクラスの偵察部隊に、テストの採点でやってきた田中先生が見つかったようだ。

世界史の田中教諭はおっとりした初老の男性で、その採点の甘さに定評がある。

その代わり採点には少々時間がかかるけど、長期戦の場合は田中先生の方が都合がいいんだよ。

「吉井、Dクラスは数学の木内を連れ出したみたいよ」

美波ちゃんは一度点数補充に戻って情報を入手してきたみたいだね。

数学の木内先生は厳しいけど、採点の早さは群を抜いています。

どうやら、Dクラスはこちらとは対照的に、一気にケリをつける気みたいだね。

でも、アキ君達の作戦のためにはそうそう簡単に突破されるわけにはいかない。

とにかく前線を長く保つことがあたし達の役割の一つなんだから。

「須川君！」

「なんだ？」

どうやら、アキ君はなにか思いついたのか須川君に話かけてるけど、

何かな？。

「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐ為に」

「偽情報？ それは構わないけど。スグにバレるんじゃないか？ Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声大きいから上手くいつてもあつと言う間に混乱を収められてしまっぞ」

須川君の言うとおり、Dクラスの塚本君は声大きいんだけど。

さっきから指示が聞こえるのはありがたいけど、その分混乱を招きにくいのが現状。

「大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

「と、言うこと？」

「先生達に流すんだよ。他の場所に向かってくれるように」

「……………なるほど。それは確かに効果的だ」

「で、でしょっ？」

「ああ。流す偽情報の内容は任せてくれ。確実に騙してみせよ」

「うん。よろしく」

「あ、ちょっと待ってくれひん？」

「どうしたんだ、深紅」

「ちよつと、ええこと思いついたんや」

イキイキした表情で動こうとした須川君を神崎さんが引きとめた。
久遠君は不思議そうだけど

「なんだ？」

「ちよつと耳かして」

「わ、わかった」

須川君は深紅ちゃんと会話してる。

「し、しかし」

「お願い聞いてくれへんの？」

「須川にしかできないことだぜ」

「了解しました！」

須川君は敬礼してさっさと走って行ったけど、何したのかな？
久遠君や優羽ちゃんが若干楽しそうに見えるのはなぜだろうか、恋
ちゃんは苦笑い浮かべてた

「さて、明久。指示を頼むぜ」

「あ、うん。皆、僕らは1対1じゃ勝てないからね！ コンビネー
ションを重視して！」

爽やか笑顔の久遠君を見てアキ君は苦笑いを浮かべてたけど、ちゃんと指示をだしていたよ。

数分後……

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待っている！ 今、数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらく拮抗した状態を続けていたら、僕達Fクラスにとっては好ましくない会話が聞こえてた。

数学の船越先生（45歳・女・独身）を呼んだのは採点目的じゃなくて立会人になってもらう為なのかな。

これ以上戦線を拡大されると実力差がよりはつきりと出てしまうことになるよ。

ピンポンパンポン！

《連絡致します》

聞き覚えのある声が校内放送から流れだした。

この声は須川君？ 職員室より放送室を選んだのは捕まえやすくなる為だろうね。

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出し相手は丁度今話題に上がった船越先生のようにだけ。

《坂本雄二君が体育館裏で待っています》

え、ええー!!!?さ、坂本君を使った!

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》
船越先生は婚期を逃してついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった人だよね。

「坂本代表……アンタあ男だよ!」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて!」

前衛部隊の仲間達が感動してるよ。

「おい、聞いたか今の放送!」

「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ!」

「あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか……?」

Dクラスはいい具合に混乱しているようだけど、いいのかな。

「皆、坂本代表の死を無駄にするな!」

「絶対に勝つぞーっ!」

「隊長、行けますよ! この勢いで押し返しましょう!」

「ああ!! 雄二の為に皆、いくぞー!」

『おおーっ！』

これで戦意も上がるってどんだけ、なんだろう。

『須川ああああっ！！』

あ、どこかで坂本君が叫んでるよ。

須川君は放送室からでられなくなってないかな。

『……雄二…浮気は許さない』

おや？どこからか怨念のような声が聞こえてきたのはなんで？
あ、疑問に思ったことを聞かないと！

「ところで、どうして。あんなの事になってたの？」

「ああ、それはね……」

つぐみが疑問に思ったことを聞くと明久はあの時起こった出来事を
教える。

「そ、それはやっかいだね」

「相手が嫌がってるのに、分かっているひんのやな」

「まったく、傍迷惑なヤツだな」

「そうかもね。おっと、神崎さんに光」

「あらほら、さっさ 久遠君、任せたえ〜」

「おう、つぐみ」

「うん、よっ!」

4人は会話しながら、敵を即席コンビネーションで倒していく。即席な子もいるのにこの4人には抜群のコンビネーションで敵をさばく。

「あ、アキくん。危ない!えい!」

「おっと、足払い!」

「くらいな!」

「ほい、とどめやで」

「そ、即席なのに、なんでこんなに強いんだ!?!」

そんなの作者が聞きたいものだ。

この様子を見ていたDクラスの前線部隊を指揮している塚本は啞然となる。

召喚獣の操作は難しいが、明久と深紅がいるおかげで楽にさばけるし、つぐみのフォローも二人で補っているし、つぐみと明久は長年の仲なので相手がどうするかなど、造作もないのだ。

それに光一の射撃と深紅のフォローでなんなく撃退していく。

『明久、雨宮に光一に神埼！ 無事か?!』

良く通る声が響くのでそちらを向くと雄二が走って来ていた。どうやら、雄二の声のようだ。

「雄二！」

「本隊が動いたみたいだね」

「そうみたいやね」

「くっ、援軍か。残存兵力は俺とともに後退だ！」

Dクラスの塚本がそう言うのと彼らは後退していく。

自分達もこの後は後退して、戦力を増やすことになった。

両軍とも一時的に後退し、戦力の補強ということになったのだった。

「明久、よくやったな」

「それじゃあ」

「ああ、補給組はだいぶ回復できたぞ」

「良かった」

「安心だな」

「そつやね」

雄二はニヤリと笑って言う。つぐみが安心すると光一と深紅も安堵していた。

「ところで、須川を知らないか？」

「え？……まだ、放送室じゃないの？」

「そうか」

今の雄二を見てつぐみは怖いなと考えていた。

即席のブラックジャックに包丁を使って何をする気なんだろう。

「そんなことより、Dクラスとの決着をつけひん？」

「そんなことじゃねー!!」

「よし、お前等！そろそろDクラス代表の首級を穫りに行くぞ！

雄二も出るから安心しろ！ みんな続けえっ！」

『おおー!!!!』

「俺の意思はないのか!!!？」

「坂本君……どんまい」

「雄ちゃん、強く生きてね」

「」愁傷様です」

雄二を置いてつぎつぎと教室を出て行く、つぐみ達だった。出る前に深紅は雄二に何か言っていたけど、気にしない方がいいかな。

いよいよ、最終局面に来た。今なら、帰宅する生徒もいるし、上手く倒せるだろう。

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

不機嫌だけど雄二の指令が戦場に響く。

「そつちから、周り込め！ 俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！」

Dクラスの連中を囲んで、Fクラスのメンバーは倒していく。そんな中に声があがった。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはDクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！」

「正念場だね」

「頑張ろうね！」

「さ、行きまひよ」

「行くか」

「つぐみんの為に捧げるよ」

「これも作戦ですので」

そう言うのと明久とつぐみと深紅と優羽と恋と光一は飛び出した。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え！ 残りは包囲されている者を救出だ！」

平賀の号令の下、あつというまに雄二を中心にたFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラス、撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

Dクラス代表の声に従い追撃する……が、Dクラス本体に隙ができた。

「Fクラス 神埼深紅が」

「同じく久遠光一が」

「近衛隊の13人に総合科目で勝負だ(や)」

『え!?!』

明久に目配せした深紅と光一がしたり顔で言う。
どこまで気が合うのだろうか。

Dクラスの生徒は光一と深紅に怯えているようだ。

「^{サモン}試獣召喚!」

『し、^{サモン}試獣召喚!!!』

【Fクラス 神埼深紅 総合科目 1456点 & Fクラス 久遠光一 総合科目890点 VS Dクラス 近衛隊X13 1230点】

お互い頭上に点数が表示される。

『え!?!』

「バイバイや」

「俺の弾は必ず当たる」

一方では一瞬で召喚獣が切り裂かれ、もう一方ではライフルの弾のみだれうちをくらい倒れて行く。

ちなみに深紅の魔方陣が展開されて、召喚獣が出現する。

容姿は同じで姿はデフォルメされており、姿は某ゲームの青い騎士

と同じ姿となる。

毛皮のジャケットに、黒いスラックスに編み上げブーツ、そして右手にはライフル、左手に自動拳銃を持ったデフォルメ光一。

「頼んだよ、姫路さん」

「お願いするね」

「頼みましたよ、瑞希」

「頑張つてね」

平賀君の後ろにいるみいちゃんに笑顔でつぐみ達は言つと。

「は、はい」

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下通らなかつたと思うけど」

現状が理解できない様子の平賀君、それはそうですよね。更にみいちゃんがFクラスだとは思わないでしょう。

「Fクラスの姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「Dクラスの平賀君に現代国語を申し込みます」

「はあ……つぐみ」

「えっと…試獣^{サモシ}召喚です」

《Fクラス 姫路瑞希 現代国語 339点 VS Dクラス 平賀源二 現代国語 129点》

「え？ あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対しています。

けど、相手にならなそうですね。みいちゃんの召喚獣は強そうですし。

あの剣は背丈をこえていますね。

「う、ごめんなさい！」

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄するみいちゃんの分身。相手の反撃の許さずに、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの決着となりました。

第4問Dクラス戦、終結！（後書き）

恋ちゃんと優羽ちゃんと光一の出番が（泣）

もっと精進しないと！！

バカテスト 第五問

【第五問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『粒子』

教師のコメント

『よくできました。』

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

『先生もRPGは好きです。』

桜木恋の答え

『闇と対なる』

教師のコメント

『ファンタジーな問題ではありません。
というよりわざと珍回答をしていませんか？』

坂本雄二の答え

『眩しいもの』

教師のコメント

『違います。』

久遠光一の答え

『ビーム』

教師のコメント

『先生も昔は憧れていました。』

遠月優羽の答え

『殺人ビーム』

教師のコメント

『真面目にやってください』

神埼深紅の答え

『心である』

教師のコメント

『周りに合わせて珍回答は止めてください』

第5問Bクラス対策と楽しい弁当の時間(前書き)

F O O L様、レイン様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！

第5問Bクラス対策と楽しい弁当の時間

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさばらだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「雨宮を抱きしめたい!」

代表である雄二を褒め称える声がいきたるところから聞こえてきた。

「お疲れさま、アキくん」

「つぐみもね」

「わっちには？」

「神崎さんもお疲れ！」

「おおきに」

「光一もお疲れ。」

「明久もな」

つぐみは明久を見て笑顔で言うと明久も笑顔で言い、深紅はそれに割り込んで聞いてくるとつぐみは苦笑いしながら言う。
明久は光一に近寄って言うと光一は笑って言う。

「つぐみん〜」

「わ!?!」

「またですか! つぐみちゃんが困っていると何度いったらわかってくれるのですか!」

「おい、お前等。帰るぞ」

「ん? もう話は終わったのか?」

「ああ、条件もDクラス代表に言ったしな」

「そっか。なら、帰ろう」

「あ、あたしは瑞希ちゃん達と一緒に弁当の買い物してくるよ」

「わかった、じゃあ……また、後でね」

「明久、行くぞ」

「あ、待つてよ。光一」

「俺を置いていくな」

明久は光一を追いかけて教室を出て行くと雄二も追いかける。

「皆。行こうか」

「そうですね」

「はい」

「なんだか、楽しみね」

「ワクワクするで〜」

「つぐみんは抱っこしてあげるね」

「そこまでちっこくないよ!?!」

「背が届かなかっただら言ってくださいね?」

「恋ちゃんまで!?!?」

つぐみ達は鞆を持って店に行き、弁当の材料を買つとその足でつぐ

みの家に向かった。

「到着！ここが、あたしの家だよ」

「へへ、いいマンションやね」

「いつも迎えにきてるから、わかるよ」

「そうですね」

「つぐみちゃん…大変そうですね」

「それに関しては同感ね」

「美波と同意見だわ」

つぐみは苦笑いしながら、鍵を取り出してドアを開ける。
ちらつと明久の部屋を美波と瑞希は見ていた。

「置いてくよ？」

「あ、すみません！」

「ま、待って！」

「やれやれやね」

「恋する乙女ほど厄介だよな」

「そうですね？」

「そつやて」

「あの二人の恋のキューピッドでもしようかな」

「ちよい待ち、どこからそんな衣装を取り出したんや」

「禁則事項だよ」

優羽は天使の衣装を取り出してウインクした。
その間に瑞希と美波はつぐみの家に入る。
渚と恋は先に入って部屋を眺めていた。

「さよか」

「反応がつまりらないよ」

「わっちに何を期待してるんよ」

「深紅ちゃんに優羽ちゃんも早く〜」

呼ばれた深紅と優羽はつぐみの家に入った。

「食材は冷蔵庫でキッチンはこっちでリビングはあっちね」

「つぐみん、冷蔵庫に入れたよ〜」

「優羽ちゃん、いつの間に入れたの!!!?」

「今日もつぐみちゃんのツッコミがさえますね」

「あ、私を送った巨大ピコハンを使ってるんですね」

「確か、あれはオハナシでも使えるんやっただけ」

「そうですよ」

優羽を巨大ピコハンで叩いて言うとその様子を恋と深紅は眺めて会話をしていた。

「よし、食材は全部入れたね。あ、そうだ」

つぐみは飲み物を持ってきて皆をリビングに案内するとテーブルに飲み物を置く。

「これを飲んで待っててね。あたし着替えるから」

「つぐみん、つぐみん、着替えの手伝いしようか？」

「いや、遠慮するよ(汗)」

「もう、遠月さん。つぐみちゃんのお着替えは私がしますから、いいんですよ？」

「いやいや、恋ちゃんもしなくていいからね!!?」

つぐみは優羽と恋にツッコミをいれていた。

「本当に賑やかだね」

「賑やかな方がええと思うで」

「ねえ、止めなくていいの？」

「わっちは被害にあいとうない」

「あつたことあるんですか？」

「いんや？」

しれつと答える深紅に瑞希と美波と渚は思った。単にめんどいから止めないのではと。

そんなこんなでつぐみは着替えに戻った。優羽と恋はなぜかついて行ってる。

「ひゃあああ!!!？」

「つぐみんにはゴスロリだよ」

「いいえ、普通に可愛い服ですよ!」

という声がつぐみの部屋らしき方向から聞こえてきていた。

「何があつたんやろ」

「気にしないでいいんじゃない？」

「そつでしょうか？」

若干心配そうな瑞希がオロオロしていた。

しばらくして私服に着替えたつぐみが恋と優羽と一緒に戻ってきた。

「なんや、また遠月に抱っこされとんか？」

「好きで抱きあげられたわけじゃないんだけど」

「あー、ご愁傷様や」

優羽は幸せそうにつぐみを抱きしめており、反対につぐみはどこか疲れている様子だった。

そんな様子に苦笑いしながら深紅はつぐみに言う。

「両親はいないんか？」

「今日は仕事が長引くから遅いんだって」

「そうなんや」

「それより、料理をしようよ」

「……雨宮。なんで、あなたの胸は大きいのよ！！？」

「え、なんでって言われても（汗）」

美波の圧倒するオーラにつぐみは困っていた。

「あ、あの。美波ちゃん！女は胸じゃないと思っんです！」

「瑞希が言っても意味ないんじゃないかな」

「同感や」

「あはは（苦笑）」

瑞希がフォローするよつに言つが渚がしれつと言い、深紅は頷いて恋は苦笑いしていた。

「でも、この身長で胸だけが大きいんだよ？変じゃない？」

「そんなことないと思つて」

「そうですよ」

「つぐみんは可愛いよ」

「私も可愛いと思いますよ」

「つぐみちゃんは可愛いんだから、自信を持つて」

「ウチも同意見よ」

俯いてるつぐみに深紅と恋と優羽と瑞希と渚と美波は笑顔で言つ。

「でも、あたしは深紅ちゃんと美波ちゃんや恋ちゃんや優羽ちゃんの方が羨ましいよ」

「へ、ウチ？」

「わっち？」

「わたし?」

「そうでしょうか?」

つぐみは二人を見上げて言つと美波と深紅と優羽と恋は不思議そうに言つ。

「でも、ウチ、可愛くないし、おっぱいだって……ちっちゃいし……」

「わっちより、島田や桜木や遠月の方がええと思うんやけど」

「いえいえ、私よりは美波ちゃんですよ」

「わたしも島田さんの方がいいとは思つよ」

「そんなことないよ!」

つぐみは美波と深紅と優羽と恋を見上げてきつぱりと断言する。

「みんな素敵だよ、背高いしスタイル良さそうだし」

「……そ、そう?」

「……わっちはそんなことあると思うんやけど」

「なんだか照れますね」

「そうだね、でも、つぐみんが一番可愛いよ」

照れる者や苦笑いを浮かべたりする物が続出した。
それから7人は、明日のお弁当の相談をし、一部の仕込みをしてから、翌朝また雨宮宅に集まることになった。
すでに死屍累々の状態だったので、瑞希にはつぐみの許可がでるまで料理は禁止にされた。

「じゃあ、みんな、また明日」

「うん、また明日ー」

「明日はがんばりましょう」

「また、明日ー」

「また、迎えに行くからね」

「では、また明日です」

「ほな、さいなら」

そう言うつつぐみ以外の者は歩いて帰って行った。

みんなで登校して席につくとどつと疲れたのか卓袱台にうつぶせにつぐみはなった。

「何があつたんだ？」

「あー、殺人料理の直し方に苦労しただけや」

「僕、つぐみが心配になって部屋に入ったんだけど。あれは阿鼻叫喚な光景だったよ」

「なんか、よくわからないが。聞かない方がよさそうだな」

光一の質問に深紅は苦笑いしながら答えて明久は遠い思い出のように光一に言う。

恋と優羽と美波と渚もぐったりしており、瑞希は済まなそうにしていた

時間になると姿勢を正して授業を受ける。

「うあー……づがれだー」

「そうだね」

机につつぶすつぐみと明久。

雄二もぐったりしていた、それもそのはず。あの船越先生に目をつけられたのだから。

なんとか、近所にいる男性を紹介して事なきを得たそうだ。

「うむ。疲れたのう」

木下君がいつの間にか近くに来ていました。

今日の髪型はポニーテールだった……本当に男として見られたいのかわからない（汗）

「……（コクコク）」

康太はいつのまにか居た。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

勢いよく立ち上がる雄二からは全然疲れが感じられないのだ。それにしても、昼食のメニューはそれで良いのか？

「お弁当いらないの？」

「せっかく作ってきたのにね」

つぐみと渚に言われてはっとなる男性陣。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

「そうですね」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ」

「ん？ 雄二は何所か行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日、頑張ってくれた礼もかねてな」

「あ、それならウチも行く！ 一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺たちの分をとっておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二君と美波ちゃんは財布を持って教室を出て行った。

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空だった。

「あ、シートもあるんですよ」

みいちゃんがバックからビニールシートを取り出した。

「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」

「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全な男子高校生にとって最高の贅沢だ」

「うむっ、男として心から同意じゃ」

「……………（こくこく）」

「みんなで作ったから、量が多いかもしれないけど」

つぐみは座って重箱の蓋を持ち上げる。

全員が期待してこちらを見ていた。

どれも素晴らしく美味しそうなお弁当が並んだ。

「「「「おおっ！」「」「」

今、4人の男の声の一つとなった。

「つぐみちゃん、喜んでくれていますね」

「そうだね」

「作ったかいがあるね」

「こんなに喜ぶことなんやろうか」

「ま、いいじゃん？」

「薬品をいれると生死をさまようんですね」

女性陣の反応はまばらだ。特に瑞希は実感がこもっていた。どこか虚ろな様子だ。

「とりあえず、食べようか」

「そうだな」

「美味しそうじゃのう」

みんなで楽しく弁当を食べてると雄二と美波も飲み物を買って戻ってきて一緒にお昼のお弁当を食べた。

もちろん弁当の味は男子5人からはかなりの高評価だった。

薬品をいれた瞬間、つぐみが瑞希を巨大ピコハンで叩いて瑞希自身に味見をさせたからか、瑞希は薬品に手を出すことはしなくなった。

「あ、デザートも寒天もあるよ」

「ティラミスもありますよ」

「わっちは団子やね」

「私と瑞希はドーナツです」

食後もデザートまでも豪華だった。みんなで美味しくいただいて有意義な時間となった。

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

楽しい昼食の後、美波は雄二に話しかけていた。

「試召戦争だけど、次はBクラスなんだっただな？」

「ああ。そつだ」

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスでしょう？」

つぐみ達の目標はAクラスだ。通過点に過ぎないBクラスを相手にする理由がわからないのだ。

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言。

とはいえ、無理もないだろう。文月学園はAからFの6クラスから成るけど、Aクラスは各が違う。高成績のエリートが属する場所だ。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに？ どうやって？」

「Bクラスを使う」

「Bクラスを？」

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

雄二は明久を見て聞いたが。

「設備のランクを落とされるんやろ？」

「ああ。そうだ」

深紅はニツコリと笑って言う、どこかBクラス戦の戦いが楽しみのように思える。

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「あたし達のクラスと上位のクラスの設備の入れ替え…でしょ？」

「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

「成程な。設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させる。」

そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませる……か？」

光一が雄二に言うと雄二は頷いた。さっきの説明で明久はわかったのかなるほど、と呟いていた。

「しかし、上手く行くのか？ 向こうとしては試召戦争の方が確実なのは事実だ」

「そうじゃな。低得点じゃが実力者の光一は当然として、姫路と桜木の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりもまずは、Bクラス戦だ」

「Bクラスへの使者はわつちと久遠君でええ？」

と、突然に深紅が話にくわわって言う。

「なんでだ？」

「Bクラスの代表、あの根本って聞いたことあるから」

「根本だと!？」

「それにBクラスには戦いたいヤツがあるんよ」

「戦いたいヤツ？」

光一が言うのと雄二は驚き、つぎに深紅は笑顔で言う。

つぐみと恋は不思議そうにし、光一は疑問を口にした。

「そや、あっちは暗躍するやろっから。わっちも暗躍しようと思ってるんよ」

「知り合いなのか？」

「秘密や」

深紅は笑いながら言うのと光一を明久はどこか納得がいかなさそうだった。

「そういえば、優羽ちゃんの幼なじみがBクラスに」

「あー、蒼ちゃんのことだね」

「なるほどな」

雄二はもう一人の幼なじみを思い浮かべて呟いた。

「かなりの策士だから、気をつけるよ」

「そうやね、一筋縄ではいかなそうやし」

「勝てるのか？」

「わっちは勝つ、つもりやで」

雄二が深紅を心配し、深紅は苦笑いしながら言うと光一が質問したら、ニヤリと笑って答える。

「でも、光一や神埼さんだけというわけには」

「なら、明久も来るか？心配しなくても、コレクションとこれ位なら貸してやるよ」

「自動拳銃とスタンガン（20万ボルト）…えろっこっついもの持ってんやね」

明久に手渡す光一を見ながら深紅は言った。

「護身用と俺の趣味だからな」

「さよか」

「……また、僕は危険人物として知れ渡るのかな？ 365度どう見ても美少年なのに」

「バカとしてなら知れ渡ってるぞ？　ちなみに5度多い」

「うむつ。実質5度じゃな」

「2人とも嫌いだ！」

「もう！木下君に坂本君！」

「つぐみん、落ち着きなよ」

「つぐみちゃんはいつも大変です」

雄二と秀吉に怒るつぐみ。それを宥める優羽と苦笑いを浮かべる恋。

この後、宣戦布告に行った、光一と深紅と明久は無事に戻ってきたのだった。

深紅は目的の相手がいたので凄く楽しそうに見えた。

普通の試召戦争だといいいのだけだと、つぐみは心のそこからそう思った。

バカテスト 第六問

【第六問】

数学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

『簡単でしたかね。』

桜木恋の答え

『 $C_6H_5NO_2$ 』

教師のコメント

『それはニトロベンゼンの化学式です。』

名前にベンゼンが含まれている物を指したわけではありません。』

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

『君は化学をなめていませんか。』

吉井明久の答え

『B - E - N - Z - E - N』

教師のコメント

『あとで土屋君と一緒に職員室に来るよつに。』

久遠光一の答え

『癌善』

教師のコメント

『君も後で職員室に来るよつに。』

神埼深紅と遠月優羽の答え

『ベン』

教師のコメント

『お願いですから、真面目に書いてください！！』

第6問(前書き)

レイン様、FOOL様、秋雨様、リザク様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！

第6問

午後のテストも無事終了し、放課後。

「アキ君、大丈夫？」

「うん、神崎さんと光一のおかげでなんとかね」

「全て、明久の元へと行くとは厄介やったで」

「だな、エアガンを見て脅したからなんとかあったが」

「御苦労さまじゃのう」

「うう、光一と神崎さんには迷惑かけるね」

「アキ君、気にしたらダメだよ。二人はアキ君の親友として居てくれてるし守ってくれてるんだから
二人の気持ちも大事にしないと！」

「つぐみ……うん。そうだね、頑張るよ」

「あつきーを励ますとはつぐみんさまさまだね」

「そうですね。でも、つぐみちゃんを支えるのは私と優羽ちゃんですけどね」

帰り道をつぐみと明久と光一と深紅と秀吉と恋と優羽で歩いていた。帰る道は違つが途中までは一緒に帰ろうということになったのだ。

「明日にはBクラスと戦うんだよね」

「ワクワクしてくるぞ」

「それは深紅ちゃんだけだよ」

「そ、それより、根本が卑怯なことをしないといいんだけど」

「あー、多分大丈夫やて」

「なんで分かるの？」

「わっちの勘や」

「ふーん」

「あ、ここでお別れじゃな」

「みたいだな。俺等はここで、また明日な」

「また、明日なのじゃ」

分かれ道に着くところで光一と秀吉を別れた。

しばらくして、深紅とも途中で別れた。

「じゃあ、ここで。また、明日です。つぐみちゃん、吉井君」

「じゃあね。また明日」

恋と優羽とも途中の分かれ道で別れた。

「アキ君、勉強頑張ろうね」

「そうだね」

つぐみと明久は同じマンションに帰るとそれぞれの部屋に戻って勉強して晩ご飯を食べたのだった。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つ雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

『おおーっ！』

「やる気の子が違うよー！？」

「言っても無駄ですよ、つぐみちゃん」

一向に下がらないモチベーション。このクラスの唯一の武器と言ってもいいだろう。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。」

その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ!』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んで来い!」

「が、頑張ります」

『うおおーっ!』

一緒に戦えるということがかなり嬉しいのか雄たけびをあげるクラスメイト。

それについていけないつぐみと恋と瑞希がいた。

前線部隊の士気があがっているので良いことにしておこう。

「坂本くん。私はどうすればいいんですか?」

「ああ桜木、お前は姫路達と一緒に前線で戦ってくれ」

「わかりました」

キーンコンカーンコンー!!

昼休み終了の合図が鳴る。

「よし、行って来い! 目指すはシステムデスクだ!」

『サー、イエッサー!』

「あ、坂本。わっちはここに居るから、前線は他の奴らにまかせたえ」

「あ？なんでだ？」

「ちょっと確かめたいことがあるねん」

「？わかった」

つぐみ達が出て行こうとしてる時に雄二と深紅がそんな会話していることに誰もが不思議に思った。

「なら、俺も残る」

「そうじゃな、Bクラス相手は光一には荷が重いかもしれぬ」

「おい」

「わっちは別にええよ」

「んじゃ、決まりだな。明久につぐみに桜木に遠月、頑張れよ」

「光一は来ないんだ。うーん、頑張ってみるよ」

「後はよろしくね！」

つぐみ達は光一と深紅と話をして教室から出て行く。

「いたぞ、Bクラスだ！！」

「高橋先生を連れて居るぞ!!」

正面を見るとざっと10人程度の人数がいた。
様子見程度なのだろう。

「生かして帰すなー!!」

物騒な発言が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 総合 1943点 VS Fクラス 近藤
吉宗 総合 764点』

『Bクラス 金田一祐子 数学 159点 VS Fクラス 武藤
啓太 数学 69点』

『Bクラス 里井真由子 物理 152点 VS Fクラス 君島
博 物理 77点』

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。
止めをさせられる前にフローしないとやばい。

「援護するよ!」

「同じく」

つぐみと優羽が援護しに向かい、召喚獣を召喚して戦う。

「Bクラス 坂上智也 物理 166点 VS Fクラス 雨宮つ
ぐみ 物理 180点 & Fクラス 遠月優羽 物理 450点」

「いつけー！」

「つぐみんには触れさせないよ」

Bクラスの生徒は二人の攻撃で一撃でやられた。
次の指示を出そうとしていると

「すみません。遅れました」

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

全力疾走についてこれなかった二人が来た。
恋と瑞希はすまなそうに言う。

「来たぞ！ 姫路瑞希と桜木恋だ！」

恋と瑞希には警戒しているのか目つきが変わった。

「姫路さん、桜木さん。来たばかりで悪いんだけど……」

明久が瑞希と恋に話かけている。

「じゃあ、行ってきますね」

「は、はい、行って、きます」

そういつてBクラスの人たちのところへ向った。

「アキ君、あたし達は？」

「うーん、僕等と一緒に戦ってくれない？」

「わかったよ」

「めんどいけど、つぐみんの為」

明久とつぐみと優羽が会話していると

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「同じくBクラスの中村将太です。Fクラスの桜木恋さんに数学勝負を申し込みます」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「桜木恋です。お願いします」

「律子、私も手伝う！」

「俺も中村を手伝う」

さっそく勝負をいどまれたのか、律義に返事して言う。

一人相手に二人がかりで挑むあたりはかなり警戒しているようだ。

『試獣召喚！』
サマシ

喚声に応じて魔法陣が展開。おなじみの召喚獣が顔を出す。

瑞希の方には鎧を着て、背丈の倍くらいある大剣を持ったデフォル

メされた瑞希が現れた。

恋の方には黒いマントを身に纏い、頭に力チューシャを着けて、瑞希の大剣を小さくしたようなのを二つくっつけたような、いわゆる両剣という奴を持ったデフォルメされた恋が現れる。

恋の相手の召喚獣が弓とハンマーを構えていた。
瑞希相手の召喚獣は剣と槍を構えている。

「あれ？ 姫路さんと桜木さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「私もです」

「アキ君、結構解けるとアクセサリーが追加されるんだよ」

「これなら、簡単に勝てそうだね」

瑞希と恋の召喚獣は左手首に腕輪をしていた。

「そ、それって!?!」

「私（俺）たちで勝てるわけじゃないじゃない（んか）！」

「じゃ、いきますね」

そういつて、瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向ける。

「ちよつと待つてよ!?!」

「律子！ とにかく避けないと！」

二人は大袈裟なくらいに横に跳んだ。
その直後に瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

瑞希の召喚獣から光がほとばしり、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Fクラス 姫路瑞希 数学 412点 VS Bクラス 岩下律子 & 菊入真由美 数学 189点 & 151点』

腕輪とは、400点以上の点数を取った人につけられて、それぞれ特殊な能力を使うことができるのだ。

「さて、私の方も片付けましょうか」

そういつて、恋も腕輪の能力を使う。

「な、なんだ!?!」

腕輪が光り、恋の周りに無数の武器が現れた。

「ま、待ってくれ！」

「待ちませんよ？ それに、勝負を仕掛けたのはあなたたちですよ

「？」

そういつて恋は、周りに浮かばせてる武器を一斉に相手の召喚獣に飛ばした。

『Fクラス 桜木恋 数学 405点 VS Bクラス 中村将太
&柴村卓也 数学 186点 & 180点』

「「う、うわああーっ！」」

相手の召喚獣はで八つ裂きになり、一瞬で決着がつかしました。もちろん瑞希の方も決着がついていた。

「い、岩下&菊入ペアと中村&柴村ペアが戦死したぞ！」

「なっ！ そんな馬鹿な!？」

「姫路瑞希に桜木恋、噂以上に危険な相手だ！」

どうやらBクラス前線の残り六人の士気を下げられたみたいだ。

「み、皆さん、頑張ってください！」

瑞希が指揮官らしくない指示を出したけど

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

「桜木さんもステキだぜーっ！」

それでも士気がかなり上がった。

「瑞希ちゃんに恋ちゃん、とりあえず下がってって」

「あ、はい」

「わかりました」

特殊能力は威力の分だけ消耗が激しいという話なのだ。

「中堅部隊と入れ代わりながら後退して、戦死は絶対するな！」

そんな相手からの声がする。

その頃、深紅と光一はここで待機しているとBクラスの男子生徒が来た。

「Fクラス代表に話がある」

「Fクラス代表は俺だが、なんだ？」

「Bクラスの代表が用事があるんだと、来てくれないか？」

「わかった」

雄二はBクラスの使者に気づかれないように深紅と光一を見てから承諾して教室を出て行く。

「なあ、本当に誰もいないのか？」

「あの根本がしくるわけないだろ」

「だよな」

「さつさと終わらせるぞ」

ちなみに深紅は光一を掃除道具に隠れさせてから、自分は教壇の後ろに隠れる。

この後、Bクラスの連中がFクラスに入ってきて、卓袱台を壊そうとした瞬間に光一が掃除用具入れから出て懐からだしたエアガンでBクラスの男子に当てた。

その隙に深紅は相手に足払いしてナイフを突き付ける、この俊足についてこれる者はいない。

「あんさん等、何をしようと思ったんや？」

「言葉次第では解放してやってもいいぜ？」

深紅と光一は楽しそうに笑って言うとBクラスの男子達は怯えた。

「ま、話さないなら。ここで戦うだけや」

「だな、先生。召喚許可を」

「あ、はい。承認します」

物理のフィールドが展開された。

ちなみに先生には壁紙を被せて目立たなくしていた。

『Fクラス 久遠光一 物理 490点 & Fクラス 神崎深紅 物理 435点』

V S

『Bクラス モブキャラ 3人 物理 241点』

ジャケットにスラックスを纏い、右手にライフルと左手に自動拳銃を持った光一の召喚獣と赤いドレスを纏い、歪な剣を持った深紅の召喚獣が現れ、頭上に点数が表示される。
モブキャラの召喚獣は西洋風の兵士だった。

「さ、お終いやで」

「俺等に裏をかくなんてさせないからな」

『そ、そんな!!』

光一の召喚獣のライフルが相手の召喚獣にめがけて弾を放つ、深紅は歪な剣で相手の召喚獣を一撃で倒していくと、箱を被っていた西村先生が現れて。

「戦死者は補習だー!!」

「いやだー!鬼の補習は嫌なんだー!!」

「助けてー!!」

「逃げろー!!」

逃げようとするBクラスの男子達はすぐに西村先生によって捕えられた。

「こいつらはなんでここにいるんだ？」

「せやね〜、Bクラスの代表の命令やろ」

「声についても録音済みだしな」

「お前等な……。まあ、いい……。本人に聞けばいいからな」

深紅と光一の笑った顔に苦笑いを浮かべて言おうとしたが止めて西村先生はBクラスの生徒を持ち上げて去って行く。

こうしてBクラスの強襲は失敗となった。根本はこれを知り悔しそうにしていたのはここだけの話。

蒼夜はますます、深紅との戦いが楽しみになり、動きだすことに決めた。

第6問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希・桜木恋と久遠光一の答え

『good better best

bad worse worst』

教師のコメント

『その通りです。』

吉井明久の答え

『good gooder goodest』

教師のコメント

『まともな間違え方で先生驚いています。』

goodやbadの比較級と最上級は語尾に erや estをつけるだけではダメです。 erや estをつ

覚えておきましょう。』

土屋康太の答え

『bad butter bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

神埼深紅の答え

『good better best
bad worse worst』

珍回答を思いつかひんかった！

教師のコメント

『思いつかないでいいです』

雨宮つぐみの答え

『good better best』

教師のコメント

『一つはできましたがもう一つは思いつかなかったみたいですね』

遠月優羽の答え

『good better best
bad worse worst』

教師のコメント

『真面目に書いたことに驚いています』

第7問（前書き）

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、リザク様、FOOL様

感想ありがとうございます！

第7問

「あれ、光一に神崎さん。どうしてここに？」

「本当だ」

「もしかして、先に感づいてここにおったのかのう？」

「木下君、正解や」

「あの根本だからな。」

「用心したんだね」

明久達と一緒に教室に戻ると深紅と光一がいたことにつぐみ達は驚いて言う。

「何かあったの？」

「そうやね…Bクラスの生徒が教室に侵入してきたことやね」

「大方この卓袱台を壊す気だったんじゃないか？」

「卑怯なことするね」

「まっただね」

明久が聞くと深紅は答えると光一も言い、それを聞いて憤慨するつぐみにのほほんとしている優羽がいる。

「とりあえず、戻るかのう?」

「そうだね」

「深紅と久遠君はどうする?」

「俺がここに残るから平気だぞ。」

「なんや、おわったんか?」

「ああ、その様子だと。しかけてきたらしいな」

「その通りや」

「いったい、なんの話なの?」

つぐみは不思議そうに聞くと

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。」

その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。っていう協定を結びにいく間に何かあるかもしれないから、って神埼が言っているに光一と残ったんだ」

「なるほど。それ、承諾したの?」

「そうだ」

「でも体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利じゃないの?」

「姫路と桜木以外は、な。神崎と光一がいるから、なんとかかなるとは思うが」

「えー、まだ。やるの?」

「優羽、この勝負に勝ったら、一日雨宮と遊べるよう手配してやる」

「え!?!ちよっ、いきなり何決めてるの!?!」

「よっし、頑張るぞー!」

「やる気十分だし!?!?」

雄二の提案に優羽は承諾しつぐみはツッコミをいれる。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだよ。このままだと本丸は落とせないだろうし」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路と桜木達個人の戦闘力の方が重要になる」

「だから、受けたんだね。その方が瑞希ちゃんと恋ちゃんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

つぐみの質問に雄二は答えると明久達も納得したようにいる。

相手の作戦も崩せたのだからいいが。

「後はゴリラに任せて、俺等は前線に戻るか」

「そうだね」

「おい、モヤシに明久！ゴリラ扱いすんな！！」

後ろで叫ぶ雄二をほっという明久はつぐみ達を連れて前線に戻る。

「では、くれぐれも用心するんじゃぞ」

「秀吉もね」

「行くぞ、明久につぐみに深紅に遠月」

「うん、光一」

「う、うん」

「ほな、はんなりいきますえ」

「了解」

互いに警告し合い、光一達と話してそれぞれの部隊に戻る。

「吉井！ 久遠！ 神埼！ 雨宮！ 遠月！ 戻ってきたか！」

出迎えてくれたのは須川君。

「あれ？ 部隊の副官の美波ちゃんは？」

「島田が人質にとられた」

「な！？」

「今度は人質なん？」

「さすが卑怯なヤツだな」

「まさに卑怯な手段の王道だね」

「おかげで相手は残り2人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、つぐみ達の部隊はそのせいで敵と睨みあいになっているらしい。

「とりあえず、状況をみたいな」

「光一のいう通りだね」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君が前を歩き、つぐみ達が後に続く。

部隊の人垣から抜けると、そこには須川の言う通り2人にDクラスのモブキャラと捕えられた美波とその召喚獣の姿があった。

そして、そばには補習担当講師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

なんだかドラマみたいだね。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

美波を捕えている敵の1人が明久を牽制してくる。
つぐみは苦笑いを浮かべてから美波を見ると精神感応テレパスを使い

「美波ちゃん…【何してるの？】」

「ごめん…しくったわ【吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなったって聞いて】」

「あほや」

深紅はなぜか呆れていた。

「久遠君、どうしよう？」

「そうだな……突撃させるか」

「ええ！？美波ちゃんがいるんだよ！！？」

「大丈夫だよ、島田さんなら分かってくれるぞ」

「そ、そうかな」

「ま、納得はいかひんけど。相手を動揺させる為やと割り切ろうぞ」

「そうそう」

光一と明久は突撃させる気満々だが、つぐみは不服そうだった。

「総員突撃用意いーっ!!」

「アキ君!？」

「隊長それでいいのか!？」

「いいんだよ」

「ま、待て、久遠に吉井!」

敵からちょっと待ったコールが出た。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている?」

「馬鹿だからだろ?」

「馬鹿やしな」

「馬鹿だもんね」

「ちょっと、三人共!!?」

「殺すわよ」

しれっと答える光一と深紅と明久につぐみは驚いて言う。

「コイツ、吉井が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて1人で保健室に向かったんだよ」

「島田…」

「な、なによ」

「怪我をした明久に止めを刺しにいくなんて、お前は鬼か？」

「違うわよ！」

明久は肩をガタガタと震わせていた。

「ウチが吉井の様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

「島田さん。 それ、本当？」

「そ、そうよ。 悪い？」

ちよつとは素直になったのか美波の耳が紅い、そんな美波の発言に明久は驚いている。

「へっ。 やつとわかったか。 それじゃ、おとなしく」

「（あれは本当だよ、アキ君に久遠君。 美波ちゃんは本物だよ）」

「（そうか、なら…どうするか）」

「（ここは敢えて偽物扱いしいひん？）」

「（なんで？）」

「（あ、深紅ちゃんの考えわかった！その方が面白いからだよね）」

「（その通りや）」

「（ダメだよ！？美波ちゃんが可哀想だよ！）」

小声で光一達は会話している為に周りには聞こえていない。

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

「えー！！？」

「あの島田は偽物だ！ 変装している敵だぞ！」

「おい待てって！ コイツ本当に本物の島田だって！」

狼狽するBクラス生徒：もう、モブキャラでいいや。

「黙れ！ 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当にー！」

『英語W Bクラス・鈴木二郎 33点 VS 65点 田中明・

Fクラス』

『英語W Bクラス・吉田卓夫 18点 VS 59点 須川亮・Fクラス』

死にかけの二人を撃破するとつぐみ除いた者達で美波を包囲する。

「ぎゃあああー……！」

「たすけてえー……！」

近くにいた補習教師に二人は連れて行かれた。

「さて、もうええやる」

「だな、包囲を解いていいぞ」

「そうなのか？」

「うん、美波ちゃんは本物だよ」

「島田、大丈夫やった？」

「ええ………だけど、なんでわざわざウチを偽物扱いするのよー！」

「えー、よく言うやろ？敵を騙すのにはまずは味方からやって」

「ぐっ！」

深紅の正論になんとも言えない美波だった。

「でも、美波ちゃん。まんまと騙されすぎだよ、アキ君が瑞希ちゃんのパンツを見て鼻血が止まらなくなったと聞いて単身1人でいくだなんてさ」

「ううっ……でも、つぐみなら、わかるでしょ?」

「というより、誰でも嘘だとわかるで」

「え?なんで?」

「姫路は桜木といるし、明久はつぐみといるんだからよ」

「あ……そっか」

やっと気づいた美波はつぐみを見て納得していた。

「え?え?何?」

「つぐみん可愛い〜」

「むぎゅっ!?!?」

つぐみは混乱していたが優羽に抱きしめられていた。

「ま、明久も島田を偽物やと思ってたろうし、島田も見え透いた嘘に騙されたということだ」

「こっでーっ罰だ。お互いが名前で言い合っこと」

「え？うん、別にいいけど」

「わ、わかったわ」

深紅と光一の提案を明久と美波は承諾した。

「とりあえず、美波ちゃんは教室に戻ってて」

「そうするわ、つぐみ達も無理しないでね？」

美波は教室に戻って行く。

「よし、みんな！行くぞ！」

『おおー！！』

美波が去った後、光一が激励して再び教室前に攻め込む。

そこで今日の戦争は終わって休戦となった。

「一応計画通り教室前に攻め込んだわけだが、こちらの被害も少なくなはない」

雄二がこちらの被害を書いたメモを見て読みあげる。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調だな」

「まあな」

「良かったよ」

「まだ、気はぬけひんな」

「そうですね」

「ま、気楽に頑張ろうよ」

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

土屋君は情報係で、戦闘には参加せずに周囲を警戒していたようだ。

「ん？ Cクラスの様子があやしいだど？」

「……………(コクリ)」

土屋の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。

まず、Aクラスではないだろうか

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「土屋、そこに根本はおったんか？」

「……………いた」

「神埼さん、どういこと？」

「恋はんと話してる時に、たまたまその話になったんよ」

「それで土屋君を使って確かめることにしたんです」

「恋ちゃんに深紅ちゃん、凄い」

つぐみは深紅と恋を尊敬していた。

「つまり、深紅の情報から推測すると根本とCクラス代表の小山さんは付き合っているんだな」

「そうやで、久遠君はちゃんとわかとつたみたいやね」

「なるほどな」

雄二は深紅の情報網に関心していた。

「つぐみに光一、どういうこと？」

「つまりにね、アキ君。漁夫の利を使ってこちらに攻め込むと見せかけてCクラスに来させて」

「協定を結びに来た時に倒すんだよ、協定違反だというのを盾にな」

「卑怯だね」

「まったくですね」

つぐみと光一の説明を聞いて卑怯な手段に皆が不機嫌になる。

「ま、わかった、以上。その誘いにわざと乗っていくか」

「俺も行くぜ、雄二」

「わっちもや」

「じゃあ、僕達はここにいるね」

「おう」

雄二と光一と深紅はCクラスへと向かった。

「アキ君……大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。光一と神埼さんがいるんだし」

「そうですよ！」

「心配しなくても大丈夫だよ」

不安そうなたづぐみを明久と恋と優羽が励ましていると

「失敗した奴らの顔は笑えたで」

「だな」

「深紅の情報網がなかったらやばかったな」

三人が帰ってきた。

「あ、お帰り」

「どうだった？」

「深紅の予想どおりだった」

「そっか」

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にすぐCクラス戦はきつい」

向こうもそれが狙いなのだろうけど、こちらが勝ったとしても休憩する暇も与えないだろうし。

「それならどうしようか？ このままじゃ、勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「心配するな。」

野性味たっぷりの活き活きとした顔で雄二は告げる。

「向こうがそう来るなら、こっちだって考えがある」

「ほう……それは、なんだ？」

「詳しく聞きたいで」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しとなった。

第7問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第八問

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希と雨宮つぐみの答え

『初潮』

教師のコメント

『正解です。』

桜木恋の答え

『所長』

教師のコメント

『読みは合ってますが、字が違います。』

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

『随分と急な話ですね。』

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初径という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

『 詳し過ぎです。』

久遠光一の答え

『 初恋』

教師のコメント

『 恋は人を変えろと言いますが、残念ながら外れです。』

神崎深紅の答え

『 初潮』

教師のコメント

『 正解ですが、珍回答が思いつかないからって渋々と書かないでください』

遠月優羽

『 いつか』

教師のコメント

『 保健体育は苦手なんでしょうね』

第8問（前書き）

レイン様、FOOL様、秋雨様、リザク様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！！

第8問

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校したつぐみらに雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦？ でも開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦時刻は九時となっている。

「Bクラス相手じゃなくて。Cクラスの方やね」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

「まさか」

渚が嫌な予感がしているのか呟いた。

雄二が取り出したのは女子の制服だった。

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「」「いやいや、よくないでしょ……！」

思わずつぐみと恋がツツコミをいれていた。

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

「スルーなの!!?」

「楽しそうでいいじゃん」

優羽の楽しい限定はなんなのだろうか。

この場にいる誰もが思ったとか。

秀吉にはAクラスに双子の姉がいる。

一卵性双生児かと思われるほど似ていて、違う箇所なんでテストの点数と喋り方くらいなのだ。

光一はふざけて間違えるほど似てはいるが、完璧に見分けられるのは渚と光一くらいだ。

「というわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

「後、桜木。お前は翔子として秀吉と共に向かってくれ」

「え!?!わたしもですか!」

いきなり名指しで呼ばれて恋は驚いていた。

「ああ、お前だって髪飾りをはずして強気ばい目をすれば翔子に似ているぞ」

「そ、そうですか?」

恋は髪飾りをはずして

「「じつ…ですか？」

『おおっ！似ている！』

確かに似ていた。

恋に被害がでないのといいなとつぐみは親友である恋を心配していた。

「……話し方は、これでいい？」

「ああ、ばっちりだ」

そうこうしているうちに秀吉も着替えが終わっていた。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあね？」

「……さあな？」

渚と光一は苦笑いしながら言うと呆れてFクラスのメンバーを見る。

「バカばっかやね」

「あたし達それに入るのかな」

「つぐみんは可愛いから、いいんだよ」

「答えになってないよ！！！？」

つぐみは優羽にツッコミをいれていた。

「おかしな連中じゃのう……ん？……Aクラス代表がなんでここに
いるのじゃ？」

「私ですよ秀吉くん」

「その声は恋か？ お主も随分とそっくりじゃのう」

「そ、そうですね？」

「凄いよ、恋ちゃん！」

「ありがとうございます、つぐみちゃん」

恋に近寄ってつぐみが言うのと微笑んで恋が言う。

どこか和む空気が流れたのは気の所為ではないだろう。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「はい」

「あ、僕も行くよ」

「あたしも！」

「わっちも行くで」

「俺もだ」

「私も」

雄二に続いて恋と秀吉が出て行くと明久とつぐみと深紅と光一と優羽もついていくこととなった。

そのまましばらく歩いてCクラスを目の前にして立ち止まるつぐみ達。

「さて、ここからは済まないが二人だけで頼むぞ、秀吉、桜木」

「気が進まんのか……」

「はい……」

そうだろう。一人は双子の姉の振りでもう一人は親友の振りなのだから。

気が重いだろう。

「そこをなんとか頼む」

「むう……。仕方ないのか……」

「そうですね」

「後で霧島さんに謝ればいいよ！一緒にいて行くし」

「ありがとうございます、つぐみちゃん」

まだ、気がすすまなそうにしている恋につぐみが話しかけて言うと

頭を撫でられた。

「え？え？え〜！！？」

「あつ！恋ちゃん、ずるいよ！」

「つぐみちゃん、可愛いです」

恋と優羽に抱きしめられるつぐみを微笑みながら見ていた。

この後秀吉と恋はCクラスに向かった。

「雄二。秀吉と桜木さんは大丈夫なの？」

「そうだよ、別の作戦を考えた方がいいよ」

「秀吉なら、大丈夫さ。優子になりすましてやるんだから、面白いことになるだろうしな」

「ずいぶん楽しそうやね」

つぐみ達は隠れながら会話していたら、扉を開ける音がした。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

『……優子、いきなりそれはどうかと思う』

えー！！その言い方はどうかと思うとつぐみは思っていた。

「おおっ、優子だ」

「木下さんの性格はああいった性格やったんか」

「優子さんってああ、なんだ」

「ああ、本人には内緒な。身体の間接が壊されちゃうから」

「大変やね」

「認めちゃうの!!!?」

この挑発に乗るのだろうかと思いつつも、人を豚扱いはどうかと思うとつぐみは思っていた。

『な、何よアンタ達!』

多分Cクラスの代表の小山さんだろう。入ってきていきなり豚呼ばわりなのだから怒るのは当然だろう。

『話しかけないで! 豚臭いわ!』

『……優子。話しかけたのはこっちなんだからそれは変……』

自分から来た癖にその言い方は、もうシッコミどころが多いよ。

「いいぞ、もっとやれ。優子ならもっと高飛車にやるぞ」

「ちよ、久遠君!!!?」

「なんや、久遠君は優子さんに偉い酷い目にあってんやね」

深紅に意見に関して明久も同意見だったようで頷いていた。

『アンタ達、Aクラスの木下に霧島さんね？』

ちよつと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！

何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！』

貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！』
『？』

『……小山さん、Fクラスは豚小屋ほど酷くない』

というか、小山さんにとってFクラスは豚小屋なんですか？とつぐみは思っていた。

それ以前にFクラスとは言っていないし。

「見事に冷静さを失っているな、さすが優子」

「彼は秀吉君だよ！！？」

「冗談でいつとんのか本気なのかわからん所が久遠君らしいで」

つぐみは思わずツッコミをいれて深紅はニヤリと笑って言っていた。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

優子さんって本当のこんな性格なのが気になってきた。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。』

近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!』

『……すみませんでした』

秀吉が先に出ると恋ちゃんも謝って言い、一緒にCクラスの教室から出て行った。

「これで良かったかのう?」

「ああ、本当に優子かと思っただけだから……本人には内緒かな?」

「わかっておる。こんな事が姉上にはばれたら、ワシも生きた心地がせんわい」

「だったらあそこまでやらなければよかったのに」

「木下君……あのね。人を豚呼ばわりはよくないと思うの」

「むっ……少しいすぎかのう」

「少しというより、かなり」

「次からは気をつけるのじゃ」

つぐみが苦笑いしながら言うと秀吉は反省するよつに言う。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めよう！』

「Cクラスからヒステリックな小山さんの声が響いた。でも、罪悪感があるよ。」

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めよう！」

「あ、うん」

つぐみ達は早足でFクラスへと向かった。

「ドアと壁をうまく使ってください！ 戦線を拡大させないでくださいね！」

瑞希の指示が飛ぶ。

あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、昨日中断されていたBクラス戦という位置から進軍を開始した。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのことだった。そんなわけで指示を遂行しようとしているのだ。

「勝負はなるべく単教科で挑むのじゃ！」

「補給も念入りに行ってください！」

「敵に弱みを見せるんやないで？」

「危ないヤツはすぐに下がれよ」

副司令官の4人も支持を出していた。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む」

「行きます！」

瑞希は古典の方へ向かい、戦っている。

「古典の点数が残っている人は左側入口の方へ行って瑞希を援護してください」

「消耗した人は補給に回れ！」

指示を恋と光一がしていた。

「いくで！」

深紅は得意な教科で突撃していく。

「皆、頑張つて！」

つぐみと優羽も色々フォローに回っているようだ。

それにしても……

「なんか、神崎さんの方ばかりに敵がいつてない？」

「だね、まるで点数を減らしているかのよつに」

明久とつぐみは今の戦況を見て呟いた。

光一もそれに気づいてはいるが、抜けるわけにはいかないみたいだ。

「誰かの作戦でしょうか？」

「だろうね、誰かは予想がつくけどね」

恋と優羽も深紅の状況に気づいているようだ。

「光一、大丈夫かの？」

「こつちも人数が多くてキツイな」

そして光一の方も人数が多かったが秀吉がフォローしていた。

第8問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第九問

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希・桜木恋と雨宮つぐみの答え

『脂質 炭水化物 タンパク質 ビタミン ミネラル』

教師のコメント

『流石は姫路さんに桜木さんに雨宮さん。優秀ですね。』

吉井明久の答え

『砂糖 塩 水道水 雨水 湧き水』

教師のコメント

『それで生きていけるのは君だけです。』

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

『保健体育のテストは一時間前に終わりました。』

神埼深紅の答え

『闇社会 秘密 ナイフ 資金 情報』

教師のコメント

『そんな生き方できるのは神埼さんだけです』

久遠光一の答え

『銃社会 銃 銃弾 金属 火薬』

教師のコメント

『君の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。』

遠月優羽の答え

『可愛いもの 食糧 スケッチ 資金 気まぐれさ』

教師のコメント

『先生は君の将来が心配になってきました』

第9問（前書き）

レイン様、ヒヨウガ様、リザク様、秋雨様、闇介様

感想ありがとうございます

第9問

「そろそろ、ヤバいかもしれひん」

「そうですか、では……僕と戦ってもらいましょうか」

深紅が焦っているとBクラスの生徒が下がり、短髪の黒髪の青年で身体付きは中肉中背のようだ。

彼はBクラスの代表にふさわしいはず、なのだが代表を辞退しているらしい。

「なんや、これはあんさんの作戦やったか。雨咲」

「勝ち目がない戦いはしたくないですから」

ニツコリと笑って言う青年に深紅は楽しそうに笑って言った。

彼は優羽と雄二と翔子の幼なじみ雨咲蒼夜である。

「ど、どうしよう！神崎さんが危ないよ」

「助けにいかないと！」

つぐみが動こうとすると

「大丈夫や、つぐみは明久の護衛と久遠君のフォローしてやり」

「でもっ！」

深紅はつぐみを見て言い、それでも動こうとするつぐみに

「つぐみん、みーちゃんなら大丈夫だよ」

「そうです、信じてこちらでも戦いましょう」

「大丈夫だよ」

優羽と恋と明久が励ますように言った。
つぐみはちらつと深紅を見ると

「わつちを信じてくれひん？」

「信じるよ、無理しないでね！」

深紅が言うつとつぐみはまっすぐ見つめて言い、明久達の所に戻る。

「さて、勝負といきまひょうか」

「ええ、ですが……僕は負けませんよ」

向かいあうようになると召喚獣を相手が召喚した。

蒼夜をデフォルメした見た目に西洋甲冑に刀という不釣り合いな装備をした召喚獣が現れる。

そして点数が頭上に表示された。

【Fクラス 神埼深紅 日本史 76点 VS Bクラス 雨咲蒼
夜 320点】

深紅は連戦で点数を消費している為、蒼夜より低い点数となっていた。

「うっん……大分点数削られたけど、なんとかなるやる」

「余裕ですね、そうでなくては」

二人が笑みを浮かべて言うとお互いの召喚獣が武器を構える。辺りに静寂が満ち、そして深紅が先に召喚獣を動かした。

「いくでっ!」

「参ります」

ガキンッ!

二人の召喚獣の武器が交差する、点数は相手の方が上なので深紅はおさがちだ。

召喚獣の操作は深紅の方が上だが、蒼夜も負けてはいない。

「あははっ……こんなに楽しいとは思わへんかったわ」

「僕もですよ」

歪な剣を振り上げて深紅の召喚獣は攻撃するが蒼夜の召喚獣はその攻撃をいなして攻撃をかえす。

「危なかったわ」

「避けてばかりでは勝てませんよ?」

「そやね、この瞬間で決めたる」

「できますかね」

ふう、と息をついて深紅が言うと蒼夜は笑って言い、体制を立て直
すべく離れて

「確かに点数は雨咲が上やけど、これならどうや!」

「なっ!?!」

蒼夜の攻撃を深紅の召喚獣の腕で受けてから蒼夜の召喚獣の喉元に
剣を突き刺した。

【Fクラス 神埼深紅 日本史 42点 VS Bクラス 雨咲蒼
夜 日本史 0点】

「わっちの勝ちや」

「負けましたか」

戦闘の結果も表示されると深紅はニツと笑って言い、蒼夜はどこか
スッキリしたような心持で言うと

西村先生が来て。

「戦死者は補習だ」

「今、行きますよ。西村先生」

蒼夜が西村先生の方へ行こうとすると深紅が声をかけて

「雨咲。また、戦おうで」

「ええ、次は負けませんよ」

笑顔で二人は会話し、ここで別れた。

その頃、つぐみ達は

「皆、負けないで！」

「このまま押し返すんだ！」

つぐみと明久の指示がBクラスの教室前で響く。

「「いきます！」」

「「「行かせない！」」」

恋と瑞希ペアがBクラスの入り口に入り、戦闘をする。

【Fクラス 姫路瑞希 日本史 345点 & Fクラス 桜木恋
日本史 345点】

VS

【Bクラス モブキャラ 5人 日本史 745点】

が、一撃で一層された。瑞希と恋の二人のペアに勝てる輩はそうはいないだろうと誰もが思ったとか。

「さーて、屑野郎。てめーの相手は俺だ」

「う、うわあぁっ!」

逃げようとしたがそれは無理だった、なぜなら

「どこに逃げようとしてるんやろうな」

「逃がさないよ」

「そのままでないよー」

つぐみと深紅と優羽が周りこんでいたからだ。光一はニヤリと笑うと根本を見て

「Fクラス 久遠光一がBクラス 根本恭二に物理勝負を申し込む」

【Fクラス 久遠光一 物理 456点 VS Bクラス 根本恭二 物理 189点】

「俺に狙われたのが運のつきだったな」

ライフルの引き金を引いて根本の召喚獣の頭に弾がぶち当たり、爆発した。

「久遠君、凄い!」

「せやね、物理の点数には驚きやで」

「光一にしかできない攻撃だよな」

「久遠君のライフルに狙いをつけられた方は大変そうです」

「まあまあ、いいじゃん。これで戦争は終結したんだからさ」

Bクラス戦は光一の活躍によって終結した

第9問（後書き）

Bクラス戦の戦後対談も頑張りたいと思います

戦闘描写は苦手だ（苦笑）

次回もお楽しみに！

バカテスト 第十問

問題

以下の意味の四字熟語を答えなさい。

自然のままです飾り気がなく、ありのままの真情が言動に現れること

姫路 瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋の答え

『天真爛漫』

教師のコメント

さすがに簡単すぎましたか、また類義語として純粹無垢と言つものもありません。

覚えておきましょう

坂本 雄二の答え

『遠月優羽』

教師のコメント

一瞬丸にしそうでしたが四字熟語ではないのでダメです。

吉井明久の答え

『遠月優羽』

教師のコメント

こんな所にも

木下 秀吉の答え

『遠月優羽』

教師のコメント

3人も同じことを描いてる人がいるとは思いませんでした

神埼深紅の答え

『遠月優羽』

教師のコメント

貴女もですか

第10問 嬉しはずかしの戦後対談？（前書き）

リザク様 ヒヨウガ様 秋雨様、レイン様

感想ありがとうございます！

第10問 嬉しはずかしの戦後対談？

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「では不貞腐れたクソヤロー君、覚悟は良いかね？」

「……」

そう言うと雄二と光一の視線は床に座り込んでいる根本に向かった。今の根本はさつきまでの強気が嘘のようにおとなしい。それを見た光一は実に楽しそうだった。

「本来なら設備を開け渡してもらい、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「落ち着くんや、皆。坂本が前言ったように、わっちらの目標はAクラスや。」

「ここがゴールやないで」

「ここはあくまで通過点にすぎない。だから、Bクラスが条件を飲めば解放してやるんだ」

雄二の発言に続くように光一と深紅はクラスメイトの皆を見て言った。

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問いかける。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄い言い様だけど、そうやって言われるだけのことを彼はやっている。

だからこそ周りの人間は誰もフォローしない。本人もそれは分かっているみたいだ。

「そこで、お前等Bクラスに特別チャンスだ」

昨日雄二が言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。」

「ただし、宣戦布告はしたらあかん。すると戦争は避けられひんからな。」

あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんや」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけで良かったんだが。

「ああ。Bクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

「ねもつちにはこれを着てAクラスに行ってもらおうよ」

優羽が持ってきたのは、女子の制服だった。

「安心してサイズは完璧だから！」

最高の笑顔で優羽が言った。

つぐみは休日のことを思い出したのか根本が哀れに思っていた。

「ば、バカな事を言うな！ この俺が、そんなふざけた事を！」

根本が慌てふためく。制服のサイズについてのツッコミは誰もしないようだ。

『Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間達からの温かい声援。

これを見るだけで根本が今までどついつた行動をとってきたか分かる気がする。

「随分と評判が悪いな、お前は」

「評判が悪いなら、情けは無用やで」

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

「手間が省けたな、さっそく着つけにはいるか」

「手伝うよ、光一」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ちこんだBクラス男子。
さすがの雄二も変わり見の早さに驚いていた。

光一はすぐに我に帰ると根本の着つけにかかる。と明久も手伝いはじめた。

「ちよ、二人とも！！」

「つぐみんは近づいたら駄目だよ」

「そうです、汚れてしまいます！！」

つぐみが止めようとする。と優羽と恋が押しとどめる。
その間に光一と明久は根本の制服を脱がせている。

「う、う、う……」

「ん？ 明久、ちょっと離れる」

「うん」

うめき声をあげる根本。それに気づいて光一はスタンガンをとりだすと明久を見て言っていると

「えいつ！」

「がふっ！」

「あ、すみません。足が滑りました」

恋が根本の鳩尾辺りに蹴りをいれて言った。

周りが恋を恐ろしいものを見るような目で見たのはいうまでもない。

「わっちが蹴りたかったやけど、しゃーないか」

「しゃーなくないからね！！むしろ深紅がしたら、根本君がポロポロになるんじゃない？！」

「それも面白くていいかも」

「面白くないからね！！」

その光景を見ていた深紅があっけらかんと言うとつぐみはツッコミをいれて言い、優羽は笑顔で言うと言つと再びつぐみはツッコミをいれていた。

漫才コンビ？とBクラスも面々は思ったとか。

「と、とりあえず、脱がそう」

「そ、そうだね」

光一と明久は根本の制服を剥いで女子の制服をあてがうと

「うーん……。これ、どうするんだろう?」

「その前に順序はどうなんだ?」

男子の制服と違い困惑していると

「私がやってあげるよ」

Bクラスの女子の一人が提案してくれた。

「そう? 悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言い様だ。

「わっちも手伝うで〜」

深紅がBクラス女子に近寄って笑顔で言った。

彼女の手にはメイクセットが携えてあったのは気にしないでおこつと明久は思った。

次に光一が深紅に消毒液を渡してから、明久と光一は根本の制服を捨ててから消毒液を使い手を洗った。

その後、恋はつぐみと一緒にAクラスの教室に向かった。
優子と翔子に謝ってからじっくりとお説教されたのだった。
その帰り道に根本の声が聞こえたので見てみると

長いロングのかつらにメイクされた根本が居た。

傍からみたら完璧女子になっていたので写真が売られてそうだ。

なんでも女装の天才スマイリー隈本を呼んであの姿に根本はなっ
たとか。

本当かどうかは深紅とBクラスの面々だけが知っている。

バカテスト 第十一問

問題

『厚かましくて恥知らずな様子という意味の四字熟語を答えなさい。』

姫路 瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋の答え

『厚顔無恥』

教師のコメント

正解です。簡単過ぎましたか？

遠月 優羽の答え

『厚顔無恥』

教師のコメント

いつもそのようにやってくれれば嬉しいのですが……

吉井 明久の答え

『坂本雄二』

坂本雄二の答え

『吉井明久、久遠光一』

久遠光一の答え

『坂本雄二』

神崎深紅の答え

『坂本雄二』

教師のコメント

君達の仲が大変良いと言ったことがわかりました

第11問(前書き)

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、龍夜Mk2様

感想ありがとうございます!!

第11問

「よーしお前ら、席に着けー。今日は転校生がやってくる」

転校生か…どんな子かな？

「…！先生！女子ですか！？」

「女子だ」

『来たああああ！』

転校生が女子とわかった途端、クラスの男子が沸きあがった。

「……うるさいです」

『すみませんでした！』

恋ちゃんが言うとなんでかすぐに謝っていた。

「まったくお前らは……七咲、入ってこい」

「はい」

西村先生に呼ばれて、髪の高い女の子が入ってきた。

恋ちゃんと目が合うと笑っていたけど、知り合いかな？

「七咲ななつきです。」

この間引っ越して来たばかりですが、皆さんよろしくお願いします」

「よし。じゃあ空いてる席に座れ」

「はい」

そういわれた七咲さんは、恋ちゃんの後ろに座った。

「つぐみんつぐみん、なんか面白いことになりそうだよ」

「え？そうなの？」

ニコニコ笑顔で優羽ちゃんが言うから不思議だったけど、楽しくて平和な日だといいな。

「ではこれで朝のHRを終了する。号令！」

HRが終わると七咲さんの方に集まり、お互い自己紹介をして学校案内することになった。

優羽ちゃんに抱っこされた状態はかなり恥ずかしかったけど、七咲さんが早くクラスに馴染んでくれるといいかな。

点数補給のテストを終えた二日後の朝。

いよいよ、Aクラス戦を残すのみとなったあたし達は、もうじきお別れ予定となるFクラスで最後の作戦の説明をうけていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたのにも関わらず

ここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

壇上の坂本君が礼を言った。
なんかこそばゆいけど、嬉しいかも

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「でも、言うのは早いと思うぞ」

「せやね、そういうんは終わってからがええんよ」

「ああ、そうだな。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。」

勝って生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

『おおーっ!?!』

『そっだーっ!?!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!?!』

最後の勝負の前に、皆の気持ちが一つとなったそんな気がした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったから驚きはしなかったけど、クラスの皆はかなり驚いているみたい。
教室内でざわめきが広がってる。

『どづいつ事だ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

坂本君が教壇を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子さんとFクラス代表の坂本雄二くん。クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然といえば当然なんだけど。

でも、どうやって勝とうとしているかはわからないんだよね。優羽ちゃんに聞いても教えてくれなかったし。

「でも、どうやって勝つのさ。霧島さんは強いんでしょ?」

「まあ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともやりあえば勝ち目はないかもしれない」

アキ君の疑問に坂本君はもつともだというように頷いて肯定する。

「だが、Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう? まともやりあえば、俺達に勝ち目はなかった」

確かにそうだよな、今こうして勝ちぬいてこれたのは奇跡としかい
いようがないし。

深紅ちゃんは特に大変だったしね。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入
れる。」

俺達の勝ち揺るがない」

ここまで勝利を導いてきた坂本君を否定する理由はないけど、大丈
夫なのかな？

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今に見
せてやる」

『おおおーっ！！』

信頼の証としてクラスメイト達は雄たけびをあげた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定す
るつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

どうして日本史なんだろう？

霧島さんが不得意というわけではないだろうし。

何か意味があるのかな。

「ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

「小学生程度のレベルで満点ありですか」 雫

「それやと、満点が前提となって、ミスした方が負けるといった注意力勝負になるんやない？」 深紅

「正面きつてやりあうよりは勝ち目があるかもしれないけど」 つぐみ

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？」

「そうだったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに吉井君の言う通りですね」 恋

勝ち目が少しはあるかもしれないけど、あまりにも分が悪いと思うよね。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？」

「幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「??? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「霧ちゃんなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら、なんの問題もないよ」 優羽

「雄二、あんまりもつたいぶるな。このからくりのネタを明かしてもいいんじゃないか？」 光一

クラスの皆も久遠君の言葉に頷いていた。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、坂本君は改めて口を開いた。

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知っているからだ」

ある問題？ なんだろう。

「その問題は――『大化の改新』」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？
そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

確かに受験校なら出てくるかもしれないけど、そんな簡単な問題がでるかな？

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと何年に起きた とかのことですか？」 恋

「おつ。ビンゴだ、桜木の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

「大化の改新って言うってえっと、鳴くよウグイス？ いや、良い国

創ろう大化の改新だっけ？」 光一

「645年だ！！明久でも間違えないことを間違えるな！」

そつとアキ君を見るとアキ君は視線をそらした。

うん……間違えて覚えてたんだね。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！これは確実だ。

だからその問題が出たら俺達の勝ち。はれてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ、姫路」

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

「あれ？ 知らないの？ 雄ちゃんと霧ちゃんは私と同じ幼なじみだよ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？ なぜ明久の号令で皆が急にそのライフルを構える！？」

アキ君の号令でクラスメイト達がアサルトライフルやマシンガンを坂本君に向けて構え始める。

「ちよ、なんで深紅も参加してるの……！？」

「あ、面白そうやったから」

そんな笑顔で言うことじゃないよね!!

恋ちゃんは驚いているし、七咲さんは楽しそうに見てるし。

あ、そうだ！久遠君は！

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様を殺す!!」

「俺が何をしたと!?!」

「待て！ それ全部俺のコレクションじゃねえか！ いつの間に抜き取った!?!」

いつも久遠君が持ち歩いているボストンバッグの中が空っぽになっていた。

みんな、一体どうやって取り出したの!?!?

「ごめん光一、でもあいつを抹殺するにはこれが良いんだ!」

「だったら弾代含めてレンタル料1人1000円出せ!」

「もう！いい加減にしなさい!」

巨大ピコピコハンマーでクラスメイトと明久を叩いて言う。

「つぐみんのピコハン裁きは凄いな〜」

「渡したかいがありました」

なんて優羽ちゃんと恋ちゃんが言ってたけど気にしないでおこづ。

「そつそれより、光一だつて木下優子と幼馴染だろ!？」

「ちよつ、それは今関係ないだろ!」

明君を除く級友が彼にも殺意を向け、半分が久遠君にも銃を構えた。

「ちよつ、ちよつと待て! 優子とはもう何でもないぞ!！」

「もうつて、まさか光一、木下優子さんといい関係だったとか!？」

「それは違うのじゃ明久。光一は姉上にフラれておるのじゃから、そんな事ありえん」

一瞬時が止まった。

「ひつ、秀吉君? 久遠君、今にも崩れそうなんですけど……?」

「え? ……あつ、すつすまぬ……」

古傷をえぐられ、その場にうずくまってしまう久遠君。その姿を見て、原因を作った張本人は罪悪感を感じる。

「……まあ、その、なんだ……光一、すまなかった」

「……昔だよ。気にするな……」

「そつか……幼馴染だからって、それが良い関係であるとは限らないんだね」

「……」

その姿に何も言えなくなり、全員が銃を下した。あたしも自分の気持ちを伝えるのが怖くなってきていた。

「あの、吉井君？」

「ん？ 何、姫路さん？」

「吉井君は、木下さんや霧島さんが、好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし……えっ、どうして姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？」

それと美波、どうして君は僕に向かってなんて危険な物を投げようとしてるの！？」

「瑞希ちゃん、美波ちゃん！」

はっとなる二人はあたしを見て動きを止めた。その様子を深紅は少し呆れて見ていた。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。」

だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は…

…」

『システムデスクだ！』

そして、久遠君と木下君を残してあたし達はAクラスへと向かった。

第11問（後書き）

次は閻介さんの閻太が登場します

バカテスト 第十二問

問題

豆電球など多くの発明をし後に発明王と呼ばれた科学者の名前を述べよ、

またその人の残した言葉とは何か？

姫路瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋の答え

『？エジソン』

『？天才とは1%の閃きと99%の努力である』

教師のコメント

正解です、彼は幼少時、教師に頭が腐っているとわれ馬鹿にされると言った話が有名ですね。

遠月優羽の答え

『？1%の閃きがあれば99%の無駄な努力をしなくてよい』

教師のコメント

これはエジソンが言った本来の言葉とされていますね。

しかし記者の誤解により彼の名言が生まれたといわれていますが、

通説ではないので残念ながら不正解です。

吉井明久の答え

『?エンジン』

教師のコメント

絶対一人はこう書くと思いました。

久遠光一の答え

『?ガリレオ』

教師のコメント

コペルニクスもといいたいのですか？

神埼深紅の答え

『?エンジン』

教師のコメント

合ってるんですけど、複雑です。

第12問Aクラスへと突入！！（前書き）

ヒヨウガ様、レイン様、闇介様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます！！

第12問 Aクラスへと突入！！

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表である坂本君を筆頭に、アキ君、あたし、恋ちゃん、優羽ちゃん、瑞希ちゃん、深紅、木下君に土屋君と首脳陣勢揃いでAクラスに来ているの。

「うーん、何が狙いなの？」

現在坂本君と交渉のテーブルにしているのは木下君の双子のお姉さんの木下優子さん。

木下君達と久遠君が幼なじみなのは驚いたかも。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも無理はないよね。下位クラスに位置するあたし達が、一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑むこと自体が不自然なのだから。

当然裏になにかあると考えるのは普通だよ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。ここからが交渉の本番となる。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

坂本君が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。

「時間は取られたけれど、それだけだったよ？ なんの問題もなし」

木下君と恋ちゃんの挑発に乗り、昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けている。

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたあの（、）……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだ出されていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間をとらない限り、試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めとなってるの。

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的には、あの戦争は『和平交渉にて終結』となっていてるってことを。規約には何の問題もない。…………… Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法なんだよ。

「……………それって強迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

なんだか、坂本君が根本君のように見えるよ。この交渉の仕方、悪役だもん。

よくない交渉だと思っただけど。

「うーん……………わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？ 本当？」

意外とあっさりした返事に驚いて会話に参加していないアキ君が声をあげていた。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

そつえば、久遠君とアキ君が根本君に女装させてたっけ。その結果で交渉が通るなんて凄いかも。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて……………お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三階勝った方の」

「いや、七対七だ」

という声が聞こえてそちらを向くとAクラスの男子生徒が立っていた。

「薄刃^{うすば}！」

どうやら、彼は深紅の情報に乗っていた。薄刃^{うすばあんだ}闇太
彼は要注意人物で文月の闇という存在らしい。
そうは見えないよね？

「ちょっと、何を勝手に」

「別にいいだろ？ 俺も暴れたいんだ」

すごい気迫、みんな動けない感じだよ。
でも、深紅だけは平然としてるけど

「大事な交渉に口を出すのは感心せんえ？」

「いや、いい。文月の夜との戦いなんてそうそうあることじゃない
からな」

深紅が言っていると坂本君が笑って言い、薄刃君はニヤリと笑った。

「ただし、科目はこちらが貰うぞ」

「全部はさすがにダメよ。七回中四回はそちらにあげる」

「わかった」

「交渉成立ね」

そう言つて木下さんが緊張をとこつとしていると

「……待つて」

静かな、でも凜とした声が響いてそちらを見るとAクラス代表の霧島翔子さんがいた。

「翔子か」

「代表？」

坂本君と木下さんは突然現れた霧島さんを見て呟いた。そして、なんでか霧島さんの視線がこちらに来た。

「な、何？」

あたしが聞くと答えないまま霧島さんは坂本君を見た。

「……雄二。個人的な賭けをしない？」

「断る」

坂本君が即答した。少しは悩んであげてもいいと思うのに。

「……雄二達が勝つたら諦めてもいい」

「……本当か？」

霧島さんは坂本君の答えに気にしたこともないのか言っと坂本君は聞いた。
すると霧島さんは頷いた。

「わかった。勝負は十時からでかまわないか？」

「……かまわない」

交渉が終わるとあたし達はAクラスから出て行く。

「Aクラス戦が楽しみだね」

「うん」

「どうしたんですか？つぐみちゃん」

恋ちゃんと優羽ちゃんとで歩いていると恋ちゃんは聞いてきた。

「霧島さんのあの視線はなんだったのかなって思って」

「つぐみん、霧ちゃんにライバル視されたのかも」

「ええ！？なんで？」

恋ちゃんと優羽ちゃんとあたしの三人でFクラスに戻るまではそんな会話していた。

深紅はAクラス戦が楽しみそうだったのは言うまでもないかな？

そつえば、なんでかわからないけど雨咲君がFクラスに来ていた

んだけど、久遠君と何か話してみたい。
なんだったのかな？

第12問 Aクラスへと突入！！（後書き）

感想と評価をお待ちしております

バカテスト 第十三問

問題

戦国時代に天下統一を成し遂げた人物を答えよ。またその人物が行った事柄についても述べよ

姫路瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋の答え

『人物 豊臣秀吉』

事柄 太閤検地、刀狩り、朝鮮出兵』

教師のコメント

正解です、流石は姫路さんと雨宮さんと桜木さんです。

遠月 優羽の答え

『人物：木下秀吉』

事柄：女装』

教師のコメント

絶対にこうくると思っていました。

雨咲 蒼夜の答え

『事柄：秀吉が行った太閤検地は農民の収穫高を見極め、税収の増加を図った。』

その際農民の不満が爆発し一揆が起きないように武器などを取り上げる為に刀狩りを行った。

そして海外に対抗する力を付けるために朝鮮出兵を行ったしかし…

………』

教師のコメント

正解ですが何も他の解答欄を埋めてまで書くことではないでしょう

………

吉井明久の答え

『事柄：太閤出兵』

教師のコメント

ごちゃ混ぜになってますししっかり復習して覚えて下さい。

土屋康太の答え

『木下秀吉』

教師のコメント
貴方もですか。

神埼深紅の答え

『人物 豊臣秀吉』

事柄 太閤検地、刀狩り、朝鮮出兵』

教師のコメント

正解なのに、なぜか喜べないのはなぜでしょう？

久遠光一の答え

『人物 木下秀吉』

事柄 弟分』

教師のコメント

貴方は幼なじみをなんだと思っているのですか？

第13問Aクラスとの戦闘（前書き）

リザク様、レイン様、闇介様、ヒヨウガ様、秋雨様

感想ありがとうございます！

第13問 Aクラスとの戦闘

「改めてみると、すごいな」

「だよな」

「ここまで大きいとは」

「広すぎて眠れそうもなさそうや」

「眠る気ですか!？」

皆でAクラスの教室を見てそれぞれ言い合っていると、深紅は不服そうに言い、恋はツッコミをいれていた。ここにも振り回される存在が増えたのはいうまでもないかと。

「両名とも準備は良いですか？」

高橋先生は立ち会いし、眼鏡を押さえて代表達に聞いた。

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラスだ。どこか緊張した空気が満ちる。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「Fは当然、俺からだ」

「アタシが行くよ」

Fクラスからは切り込み隊長こと深紅と明久の相棒の久遠君が。久遠君が出るとAクラスからは木下君のお姉さんにして、久遠君と渚の幼なじみの木下優子さんが出てきた。

「科目は何にします?」

「じゃあ、物理に……」

「ちょっと待って」

選択科目の時に木下さんが割り込んだ。それも憤怒の表情だったから、余計怖いよね

「? ……どっ、どうしたんだ、優子?」

「ちょっと話があるんだけど、良いかな? 秀吉と渚も」

「えっ!? あっ、姉上? せめて、この勝負が終わってからで構わんかの?」

「そうそう、てか…私は関係ないと思うのよ!」

「じゃあ光一は後でいいわ。大丈夫よ、すぐ終わるから」

「いや、ちょっと!聞いてる?」

そう言うと渚ちゃんと木下君を連れて教室から出て行った。
二人とも大丈夫かな？

「アンタ達、Cクラスで何してくれたのかしら？
どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になっ
てるのかなあ？」

「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！
ちがつ、その関節はそっちには曲がらなっ……！！」

「だから、人の話を聞けっ！！！！」

スッパーン！！

教室の外で何か騒いでいるかと思ったら渚ちゃんの怒った声が響い
て何かで叩かれる音がした。

久遠君を見るとなにやら、理解したのかため息をついてた。
うーん…幼なじみだからこそ、分かるのかな？

ガラガラ！！

「あゝ、頭がガンガンするわ」

「人の話を聞かないからでしょ。後、秀吉も反省しないとダメだか
らね？」

「うむ、わかっておるのじゃ」

三人揃って教室に戻ってきた。

木下さんは頭を押さえてて、渚ちゃんは呆れながら言うと木下君にも忠告していた。
「なんだか、保護者みたいだな。」

「……改めて、教科は物理でお願いします」

「さて、それじゃ。始めましょうか」

「「^{サモン}試獣召喚！」」

お互いが立ち位置につくと召喚獣を召喚した。

《Fクラス 久遠光一 物理 498点 VS Aクラス 木下優子 物理 398点》

毛皮のジャケットに右手にライフル、左手にショットガンを持った久遠君の召喚獣と西洋鎧に、ランスという装備の木下さんの召喚獣が現れた。

点数はこちらが勝ってるけど、油断は禁物だね。

「行くわよ！」

ランスを持って突撃してくる木下さんの召喚獣。それに照準を合わせてショットガンをぶっ放すと木下さんの召喚獣がふっとんだ。

「凄い！」

「久遠君の武器が前と変わってるけど、どうなってんのかな？」

「わっちがそうしたんよ」

「勝手にそうして怒られませんか？」

アキ君は驚きながら言つとあたしは気になったことを呟く。

そしたら深紅は笑顔で言い、恋ちゃんも苦笑いしながら訊いた。

「平気やて」

「いえ、でも」

「本人は喜んでおるんやから」

深紅の台詞に久遠君の方を見ると本当に喜んでた。

銃の反動も少なくて扱いやすくなってるのが、あのショットガンを使いやすくしているのだろう。

「よし、良いぞ久遠！」

「やったれFクラスの切り込み隊長！」

「お前をつつた木下優子に、目にも物を見せてやれ！！」

ドスッ！！

「ちょっと、光一に何を言ってるのよ！」

「す、すまん。禁句だったな」

渚が須川君に怒ってるみたい。

確かにあの発言はどうかと思うよね

「あの、木下さん。フッタというのは、どういう事ですか？ 久遠君と交際されているのでは？」

「なっ！ ちつ違うわよ！ あんな犯罪者臭いバカなんて、知り合いどころか接点がある事すら嫌だっていうのに！！」

ドスッ！！

「こ、光一！！？」

「……………」

「すみません！この戦いは棄権します！」

「手伝うで、渚」

久遠君の状態を見てこれはやばいと認識したのか渚ちゃんが言ってる深紅と一緒に久遠君を運びだした。

でも、なんでお姫様だったの？

Fクラス棄権につき、Aクラス勝利に終わった。

「あの、木下さん。もっと言い方というものが……………」

「……優子、今の言い方は酷過ぎる」

「あの、そういう意味で言ったんじゃないくて、その……」

「酷すぎるだろ、木下」

だが木下さんに対して、Aクラスの面々の反応は冷たかった。
一回戦目はAクラスの勝利となった。

「次の人出てください」

「私が行きます。Aクラス佐藤美穂です」

眼鏡をかけた少女が頭を下げて言う。

「次は明久、頼む」

「わかったよ」

「え、あたしが行くよ!」

「わ、わたしも!」

「雨宮も瑞希も落ち着いてくれ、まだ、出すわけにはいかないんだ」

「でも」

「大丈夫だよ」

明久はつぐみに微笑んで言う。

「雨宮。幼なじみを信じてやれ」

「……うん」

「頑張れよ、明久」

「うん。じゃあ、行ってくるよ」

明久が出ると相手は眼鏡をかけた少女は明久を警戒しながら見る。

「いくよ。試獣^{サモ}召喚！」

「負けません。試獣^{サモ}召喚！」

【Fクラス 吉井明久 物理 130点 VS Aクラス 佐藤美穂 物理 389点】

これだと、勝ちにくいかもしれない。アキ君……大丈夫かな

「吉井君でしたか。よくぞ、ここまで高めましたね」

「つぐみと神崎さんと光一のおかげだよ」

それを聞いてつぐみは嬉しそうに笑い、深紅はニツと笑ったのは言うまでもない。

美波と瑞希が羨ましそうにしていたのは、見てない振りです。

「アキ君」

「……」

雄二が近寄るとワシャワシャと不安そうなつぐみの頭を撫でる。

「ふにゃあああ!!!?!?」

「おー、撫で心地最高だな」

「それってちつちやいって言いたいの!?!?」

「丁度いい場所にあるからな」

「あたし、ちつちやくないよ!!!」

「雄ちゃんばかりずるい!!!」

「そうです! つぐみちゃん親衛隊の前でそんな愚かな行為をするなんて!!!」

小柄な体で必死に抵抗するが、坂本君は止めずにもつと撫でる速さをあげるていると恋と優羽ちゃんが坂本君に怒っていた。

「いや、ちつこいから、つい」

「ちつこくないやい!!」

「坂本君、覚悟はいいですか」

「そうだよ、つぐみんに触れたのは許せないな」

なんだか、不穏な空気が満ちてきたよ。

これってあたしの所為だよな!?

一方明久達の方では

「でやあああ!!!」

「はああああ!!!」

明久の召喚獣の武器の木刀と相手の召喚獣の槍が火花を散らす。

お互いの点数は削られて行くが、お互い一步も引かない様子だ。

【Fクラス 吉井明久 物理 120点 VS Aクラス 佐藤美
穂 物理 242点】

こっちの方がかなり削られていっているようだが、明久の目には強い光がある。

「まだまだ!」

佐藤さんの召喚獣がこっちに向かってくるが足払いしてその上に追いつ打ちの打撃を与えるが、相手も負けていられないのか明久の召喚獣に蹴りをいれると下がる。

そして、お互いの均衡が続くなか、明久の召喚獣の点数と相手の召喚獣の点数があとわずかなくらいになる。

ここでケリをつけなければならない。

「これで終わらせる！」

「こちらが勝ちます！」

両方の召喚獣がツツコム。これで勝敗が決まった。

「はあああつ！！！！」

【Fクラス 吉井明久 物理 0点 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 1点】

「勝者、Aクラス」

なかなかきわどい戦いだったが、お互いいい勝負をしたのか晴れやかだった。

「ごめん、まけちゃった」

「いいの！アキ君は頑張ったよ！」

「そうやで、負けても次に誰かが勝てばええんやし」

「そうだぞ」

「明久は頑張ったと思うぞ」

「そうだよ、アッキー！」

「吉井君は皆の為に頑張ったんですから、気にしてはダメですよ」

出迎えたあたし達はアキ君を見て笑顔で言う。

みんなは明久が負けたのに笑顔で出迎えている、Fクラスだからの特性なのかもしれないな、とあたしは思ったよ。

渚ちゃんはそんなあたし達の様子を楽しそうに眺めていたみたい。

二回戦目もAクラスの勝利だったけど、まだ…頑張れそうな雰囲気があった

第13問Aクラスとの戦闘（後書き）

光一にはショットガンを持たせたかったんです！！

うーん…これだと全員が活躍できそうもないかも（苦笑）

バカテスト 第十四問

問題

文法において『海がよんでいる』『や』『我が輩は猫である』のような表現技法をなんと呼ぶか答えよ。
また例文を一つ作りなさい

姫路瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋の答え

『擬人法』

『風が走り回るように駆け抜ける』

教師のコメント

擬人法とは本来人でないものを人のように表現をして表す技法です。
主に小説等に出される事が多いですね

島田美波の答え

『疑人法』

教師のコメント

日本には慣れましたか？惜しくも間違いますが後少しです。
しっかりと復習して次回の結果を期待しています。

坂本雄二の答え

『かごの中の鳥』

教師のコメント

正解ですが、なぜでしょう。凄く切実な思いが伝わって来ます。

遠月 優羽の答え

『勝手気ままに暴れまわる台風』

教師のコメント

名前をみる前にあなただと確信しました。

久遠光一の答え

『不良に囲まれる』

教師のコメント

苦手なのはわかっていますけど、これはないんじゃない？

第14問（前書き）

ヒヨウガ様、リザク様、仮面ライダー
レイン様、門矢綺羅様、闇介様
様、秋雨様、エミ様、

感想ありがとうございます！！

第14問

「では次の方、どうぞ」

「……（スック）」

ムツツリー二がここで立ちあがる。

相手は二勝しており、後二点取られるとこちらの負けだ、負けるわけにはいかない。

「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

誰もが誰だろうと考えていると女の子が答える。

「一年の終わりに転入してきた、工藤愛子です。よろしくね」

「科目は何しますか？」

「……保健体育」

高橋先生の問いにムツツリー二が答える。

この科目はムツツリー二の最強の武器となっている。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子は余裕そうにムツツリー二に話しかける。

「ちょ、つぐみ！落ち着いて!!」

「あつ、俺も混ぜて。出来れば実技での教授を希望したい」

「良いよ……って、もう復活したの？」

「元々フラれてる訳だし、優子の性格もガキの頃から知ってるから、これ位どうという事はない」

あたしが工藤さんの台詞にオーバーヒートを起こしていたら、久遠君が工藤さんに声をかけていた。

でも、その久遠君の台詞に木下さんがなんか複雑そうな表情をしているのが見えた。

「じゃあ光一も交えて、是非ご教授を……」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらなのよ!」

「美波ちゃん、その言い方はないよ」 あたし

「そうですよ、吉井君に悪いです」 瑞希ちゃん

「てか、勝手に決め付けるのはよくないと思いますよ」 恋ちゃん

「みなみん、つぐみんの言う通りだよ」 優羽ちゃん

あたしと瑞希ちゃんと恋ちゃんと優羽ちゃんは美波ちゃんをジト目で見て言った。

勝手に決め付けてたらその人の人生台無しになっちゃうもの。

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試獣^{サモン}召喚っと」

「……………試獣^{サモン}召喚」

忍び装束に2本の小太刀を持つ土屋君の召喚獣。

そして工藤さんの召喚獣は、セーラー服に巨大な斧を持ち、その腕には腕輪も装備されてる。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんの召喚獣が、腕輪を光らせて踏み込む。

斧が雷光を纏い、高得点で得たスピードで距離を詰め飛び上がった。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

そして豪腕で斧を振るう。危ないと思ってついあたしは叫んでいたんだけど

「土屋くん!」

「……………加速」

両断されてしまかうかと思った直後、土屋君の腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え?」

相手の戸惑う顔。でも、深紅はワクワクしながらそれを見ていた。つぐみ達にはなにが起こったのか、わからないままだ。

「……………加速、終了」

ボソリと康太が呟くと一呼吸おいて愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

【Fクラス 土屋康太 保健体育 572点 VS Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点】

この戦いは土屋君の勝ちで決まった。

「そ、そんな……………！この、僕が……………！」

工藤さんは膝をついている、相当ショックだったみたい。三回戦目はFクラスの勝利、工藤さんには申し訳ないけど…勝ててよかったかな？

「これで二対一だね」

「ああ、だが。油断はできない」

「まだ、他の一騎討ちがあるもんね」

「ここが正念場ですね」

「ワクワクするね」

「先ず終わった戦いに安心してから坂本君と話をする。
負けるわけにはいかないもんね。」

「次の方は誰ですか？」

「僕が行こう」

「なら、こっちは。わっちが行くえ」

「あちらはAクラスの学年次席だ。姫路がいたら、三席にいたほどの
実力者。」

「頼んだぞ、神埼」

「ほいほい」

「（心配だ（汗））」

「無理するなよ」

「わかつとるで、久遠君」

「楽しそうに進んで行く深紅に不安になるFクラスの面々。
だけど、あたしと恋ちゃんと久遠君と優羽ちゃんは勝つと信じてい
た。」

「科目は何にしますか？」

「総合科目で」

「ちょっと！」

「大丈夫だよ」

「そうだけ、明久」

「つぐみに光ー？」

「なんでかな、深紅ちゃんなら。勝てると思えるの（ニッコ）」

「俺も同意見だな」

そう言うとは故か倒れる人が続出して優羽ちゃんと恋ちゃんに抱きしめられちゃった。
なんでかな？

「明久に光ー」

「言わないで、わかってる」

「無自覚は恐ろしいな」

この光景を見ていたアキ君と坂本君と久遠君は何か話をしていただけ、何していたのかな？

「つぐみんかーわーいーいー！！！」

「妹にしたいです！！！」

「うにゃああ！！？、なんで撫でるのー！！！」

優羽ちゃんと恋ちゃんに頭を撫でられたんで離れようとしたんだけど、全然離れられないんだよ!!!
瑞希ちゃんに助けを求めただけど、謝られた。渚ちゃんはよそ見をしていて気づいてないし。

「では、始め!」

「サモン試獣召喚!」

「サモン試獣召喚や!」

お互いの召喚獣が魔方陣から出てくる。

久保君の召喚獣は戦士で武器はせんぶ戦斧だ。

深紅ちゃんの召喚獣は赤いドレスに歪な剣の装備でとても強そうに見えるよ。

「さあ、やるつかえ」

「……っ!」

深紅ちゃんの目が鋭くなる。それに久保君はおじけづくこともなく、召喚獣を動かす。

「ここまでの力あるのになぜFクラスへ?」

「Fクラスの方が楽しそうだから」

戦っている時に会話するのも凄いいよね。あたしにはできないかもし

れない。

深紅ちゃんの召喚獣はアキ君より、機敏な動きで相手を翻弄し、まるで踊るような戦いかたでした。まるで意志があるかのような感じに見える。

「まだまだや！」

「くっ！」

深紅ちゃんの召喚獣が剣を振り回すと【花散る天幕】ロサ・イクトウスを使用した。久保君の召喚獣は一撃で撃破されたのだ。

「なかなか、楽しめたえ」

「君は強いな」

《Fクラス 神埼深紅 総合科目 5478点 VS Aクラス

久保利光 総合科目 3997点》

「勝者、Fクラス」

「ただいま」

『お帰りー！』

深紅は笑顔で戻るとあたし達は駆け寄る。もちろん久遠君も近寄ったよ

「これで同点か」

「二対二やね」

「まだまだ、油断はできないな」

そう、まだ三戦の戦いが残っているのだ。

選択科目の譲渡に気をつけながらいかないとヤバいだろう。

「後、二勝しないと勝てないね」

あたしが言つとみんなも頷いてこれからの戦いに不安を抱いていた。
四回戦目もFクラスの勝利となった。

第14問(後書き)

感想と評価をお待ちしております!!

バカテスト 第十五問

演劇

シェイクスピアの演劇『ジュリアス・シーザー』において、カエサル最後の言葉として登場する台詞は何でしょう。

木下秀吉 & 姫路瑞希 & 雨宮つぐみ & 桜木恋の答え

『ブルータス、お前もか』

教師のコメント

はい、正解です。特に木下君には簡単すぎましたかね。

姫路亮の答え

『……は。小娘が、もちっと歳とって出直してこい』

教師のコメント

ランサーの最後の台詞ではなく、シェイク『スピア』の最後の台詞をお願いします。

というか、わざとですか？

吉井明久の答え

『私を倒しても、第二、第三のシェイクスピアが…』

教師のコメント

ゲームのやりすぎに注意しましょう。

神埼深紅の答え

『僕は魔法使いなんだ』

教師のコメント

衛宮切継の最後の台詞でもありません。

何がしたいんですか？

第15問(前書き)

ヒヨウガ様、秋雨様、レイン様、仮面ライダー
様、リザク様

感想ありがとうございます!!

第15問

第五回戦目

「次の人は誰ですか？」

「私が行きます」

「なら、俺が行こう」

雫ちゃんが前に出て言うとAクラスからは薄刃君が出てきた。
どこか緊張感があるのは気の所為だろうか？

「科目は何にしますか？」

「古典でお願いします」

雫ちゃんは先生の問いに答えた。

科目が決まると先生は薄刃君と雫ちゃんを見て

「では、始めてください」

「「サモン試獣召喚！」」

薄刃君の召喚獣は白いフード付きのコートでフードはかぶらない。

武器は双剣で、右手の剣は鋭く細いあまり頑丈じゃない剣、左手の剣は幅広の頑丈な切れ味が鈍い剣といった感じだった。

対して雫ちゃんの召喚獣はこの制服がモデルかわからないけど、

白が基準の制服を着て頭に緑色のヘアピンを着けていた。

獲物は……槍……いや、ガンランス？

ともかく、槍と銃をあわせた感じの武器みたい、銃槍という感じだったよ。

「文月の夜、ヤミ。参る！」

「行きます」

薄刃君の召喚獣は地を蹴って、雫ちゃんの召喚獣に双剣をで攻撃しようとしていた。

雫ちゃんの召喚獣は槍でその攻撃を防ぐ。

遅れて頭上に点数が表示された

『Fクラス 七咲雫 古典 203点 VS Aクラス 薄刃闇太
古典 138点』

お互い腕輪の装備はできてないみたいだけど、ここからどうなるかはまだわからないからね。

雫ちゃん、大丈夫かな。

「『放電』」

ジジジジジ…

剣の先より放射状に雷が走る。それが雫ちゃんの召喚獣にヒットし

た。

でも、点数は変化なし。なんの効果なんだろう？

『Fクラス 七咲雫 古典 203点 VS Aクラス 薄刃闇太
古典 118点』

「（点数は減ってない…でも、何か違う意味があるのかもしれないね）」

雫ちゃんは何か考えているみたいだったけど、何を考えているんだろう？

「薄刃：やるやん。模擬戦でもええから、戦いたいで〜」

「戦いか…俺も戦ってみたいな」

ワクワクしてる深紅と久遠は戦闘を見ながら喋っていた。
本当に似たもの同士だね。

「やあ！」

雫ちゃんの召喚獣が槍を横薙ぎにするけど、動きにズレがあった。
薄刃君の召喚獣が左手の剣で受け、右手を突き出す

「くっ」

『Fクラス 七咲雫 古典 127点 VS Aクラス 薄刃闇太
古典 118点』

「この攻撃はタイムラグを発生させていますね」

「気づくの早いな、その通りだよ」

薄刃君の召喚獣にそんな能力があるなんて、驚いたよ。
ノイズでも発生しているのかな。

雫ちゃんは一旦離れると銃槍から弾丸が放たれて相手を撃ち抜いた。

「銃としても使えるのかよ」

『Fクラス 七咲雫 古典 127点 VS Aクラス 薄刃闇太
古典 78点』

お互いの点数が削られているけど、雫ちゃんの方が点数は高いみたい。

薄刃君は銃の弾を避けるけど、雫ちゃんは照準を合わせて撃ってる。
あれが銃形態なのかな？

でも、連射して弾は持つのだろうか

「弾切れですか」

あ、リロードしてる。

今の状態だと、かなりやばいよね!？

「その隙は逃さないぜ」

「くっ!」

案の定、その隙をついて薄刃君が接近してきた。
銃槍に戻して防ぐ。

「なんや、ハラハラ展開やね」

「もう、何呑気な事言ってるの!」

深紅は戦闘を見ながら言うので思わずあたしはむっと思いながら言う

「はあっ!」

「くらえっ!」

双剣で連激してる薄刃君と銃槍で攻撃をしのいでは、攻撃する。

「ちっ!」

「今ですっ!」

薄刃君の召喚獣が銃槍の攻撃を避けて下がるとそのタイミングを逃さないように銃槍から弾丸を放った。それが薄刃君の召喚獣に当たると勝敗がついた

『Fクラス 七咲雫 古典 127 VS Aクラス 薄刃闇太
古典 0点』

「勝者、Fクラス」

五回戦目はFクラスの勝利。

「やったあ」

「やりました!!」

皆で雫ちゃんの勝利を喜んでいると

「ちょっと、薄刃。どこに行くのよ!!」

「しばらく、旅にでるんだが」

「なんで、そうなるのよって、無視していくな!!」

Aクラスでは、なんだか騒がしい事が起きてるのは気の所為かな？

「次の人は誰ですか？」

「ワシが行こう!!」

「秀吉君、頑張って」

「う、うむっ」

Fクラスの方から6人目は秀吉が出ると相手の6人目は女の子が出たが、

こちらは150cmのくらいだ。

「綺麗で身長が高い」

「羨ましいのか？」

「とうぜん！」

もはや苦笑いするしかない雄二だった。

「秀吉君だっけ、よろしくねん」

「うむ、よろしくなのじゃ」

お互いが固い握手をした

「科目は何にしますか？」

「英語で」

高橋先生に聞かれて女の子が選択する。

「では、始めてください」

「行くぞい！試獣^{サモシ}召喚」

「行くよ、試獣^{サモシ}召喚」

【Fクラス 木下秀吉 英語 60点 VS Aクラス 狐邑梨来
英語 232点】

二人が召喚すると魔方陣からお互いの召喚獣が出現する。そして頭上に点数が表示された。

木下君の召喚獣は袴に胴着だった、相手の方は狐の耳と尻尾が生えた着物のチャイナドレス版の格好をした召喚獣だった。

「うわ!？」

「点数高い!」

さすがAクラス、点数も高い。これは一瞬でケリがついてしまうのか。

「負けるわけにはいかんのじゃ!」

「わたしもそうだよ」

一斉に動きだすお互いの召喚獣。得意の鉤爪で秀吉を劣勢させる。秀吉の召喚獣も薙刀で応戦するが押し切られてしまい、こちらが負けた。

「すまぬ。負けてしまったのじゃ」

「相手が強かったし、操作もあっちが上だからね」

「だが、よく頑張った」

「そ、そうかの?」

「うん!負けてしまったけど、秀吉君は強くなれると思うよ」

「あ。ありがとうなのじゃ」

秀吉は涙ぐみながら言つと鼻血を噴出する。Fクラス男子数名がでた。
こんな終わりかたもあり、だよね

バカテスト 第十六問

問題

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希&雨宮つぐみ&桜木恋&七咲雫の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

その通りです

神埼深紅の答え

『シルヴァラント、テセアラ、テレジア』

教師のコメント

先生もテイルズ系は好きです

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

『香川、徳島、愛媛、高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

久遠光一の答え

『魏、呉、蜀』

教師のコメント

先生も三国志は好きです

遠月優羽の答え

『 バカには見えない文字で書いてます

教師のコメント

後で職員室に来なさい

第16問(前書き)

レイン様、秋雨様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます!!

第16問

「最後の一人どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子が出る、こちらは

「俺の出番だな」

Fクラス代表の坂本雄二君。

「科目はどうしますか？」

「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言に、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

雄二のねらいが当ればこちらは確実に勝てる。当然なかつたら、こちらが負けるだけ。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待ってください」

ノートパソコンを閉じて、高橋先生は教室を出て行く。

「雄二。あとは任せたよ」

「負けたらゆるさへんえ」

「へマするなよ」

アキ君と深紅ちゃんと久遠君が坂本君に近寄って言う。
これが最後の戦いなんだよね

「頑張ってくださいね！」

「雄くん、ふおいとー！」

「ああ、任された。」

恋ちゃんと優羽ちゃんも応援するように坂本君に近寄って言う。
雄二はニヤツと笑って言うとまたあたしの頭を撫でる。

「って、またなのー!!!？」

「撫でごこちがいいなー」

「あ、坂本君！つぐみちゃんに撫で撫でするなんて、ずるいですっ
「！」

「そつだよ！ つぐみんに触れるのなら、つぐみんファンクラブ会員？1と？2を倒してからにしてよね！」

あたしが坂本君から逃れようと身をよじると、恋ちゃんも優羽ちゃんも不機嫌そうに坂本君に近寄って言う。雫ちゃんは渚ちゃんとか、話していて助けをもとめれそうもなかったよ。

「……………」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

土屋君は坂本君に近寄ってVサインをしていた。

坂本君はお礼を土屋君に言う。
すると、

「……………」

土屋君は口の端をあげて元の場所に戻る。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

高橋先生が戻ってきて、雄二達は教室を出る

『問題を配ります。制限時間は五十分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているぞ』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

「吉井君、いよいよですね」

「そうだね。いよいよだね」

アキ君と瑞希ちゃんは緊張しながら会話していた。

「勝てる、かな？」

「どうだろうな、しっかり勉強してたら」

「大丈夫やろうけど」

あたしの呟きに久遠君と深紅ちゃんは返事をして言う。
他の皆はディスプレイを見てる。

「これで、あの問題がなかったら」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね」

瑞希ちゃんが不安そうに言うとアキ君は緊張しながら言い、

「でも、もし出ていたら」

「私達の勝ちですね」

優羽ちゃんはどこか楽しそうに言うと恋ちゃんは笑顔で言う。
誰もが固唾をのんで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

() 年 平城京に遷都

() 年 平安京に遷都

次々と問題が表示されていく、アキ君はわかっているのか。
自分でもわかると呟いていた。

() 年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

「あ………！」

次の問題が出たら、瑞希ちゃんが声をもらった

「で、出てたよ！」

「やった！」

あたしも嬉しくて喜んでいたら、アキ君に抱きしめられてた。

「これでわっちらの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったFクラス全員の言葉。

「最下層に位置した僕等の、歴史的勝利というわけだな」

『うおおおおっ！！』

教室を揺るがす歓喜の音が響く

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》 VS 《Fクラス 坂本雄二

53点》

卓袱台から……みかん箱に代わってしまった。

バカテス 第十七問

問 次の() に正しい年号を記入しなさい

『 () 年 キリスト教伝来 』

霧島翔子の答え

『 1549年 』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません

坂本雄二の答え

『 雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993年 』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

神埼深紅の答え

『 1192 』

教師のコメント

良い国作ろう鎌倉幕府ではありませんよ。
後で、職員室にきなさい。

吉井明久の答え

『 1192 』

教師のコメント

貴方もですか。

第17問(前書き)

レイン様、ヒヨウガ様、今宵闇介様、秋雨様、リザク様

感想ありがとうございます!!

第17問

「雄二、てめえコラ!!!」

視聴覚室の扉が開かれ、Fクラスの武装集団が押し寄せる。

「4対3で、Aクラスの勝利です」

それに構う事なく、高橋女史はそう宣言。

そのそばでは、座りこむ坂本君とその傍で坂本君を見下ろす霧島さん。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい覚悟だ、殺してやる！ 歯をくいしばれ!!!」

「待て明久、その前に八手の巢にするべきだ!!!」

掴みかかるうとするアキ君を制し、両腕や肩、背にコレクションを重装備した久遠君が両手の銃を坂本君に突き付ける。

アキ君はそれを見て頷き、先程久遠君から渡されたアサルトライフルを坂本君に突き付けた。

「アキ君と久遠君、ダメだつてば!!! 深紅ちゃんと優羽ちゃんも参加しようとしなない!!!」

「いややわ、ほんの冗談やん」

「そうそう」

あたしは慌ててアキ君と久遠君に近寄って言うと深紅と優羽を見て注意した。

「吉井君、落ち着いてください！」

「光一も落ち着きなさいよ！」

あたしに続いて瑞希ちゃんがアキ君を、優子さんが久遠を制し、坂本君から引きはがそうとした。

「大体、53点って何！？ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃ……」

「いかにも、俺の全力だ」

「糠喜びさせんな、このゴリラ野郎……」

「そうやで、ゴリラ野郎」

アキ君が坂本君の襟をつかんで怒りながら言うと久遠君はスタンガンを取り出して、坂本君につきつける。深紅は楽しいからか、坂本君をいじっていたよ。

だがそれは、美波によって阻まれる。

「吉井、久遠、落ち着きなさい！ アンタ達だったら、30点も取れないでしょうが……」

「それについては否定しない！」

久遠君とアキ君の声が、寸分の狂いもなく合わさった。双子みたいに息が合うね。

「久遠君と吉井君……双子みたいに息があいますね」

「私も同意見ですよ、恋」

その様子を見ていた恋ちゃんと雫ちゃんは呟いていた。

「それなら、坂本君を責めちゃダメっ！」

「くっ、4人とも何故止めるんだ！？このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！！」

「それって体罰じゃなく処刑です！」

「待て明久、まずは逆さに吊るし上げて俺のコレクションと投げナイフ的にしないと」

「待ちなさい光一！前半はともかく、後半が明らかに処刑でしょう！」

あたしと瑞希ちゃんと優子さん、3人に引き留められアキ君と久遠君は大人しく(?)引き下がってくれた。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

「潔いのは結構やけど、あまりにも情けなさすぎひん？ 手を抜いて負けるやなんて」

「……ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの台詞に土屋君は突然撮影準備をしはじめた。約束って……………あの時のことかな？

「え？ どういう事？」

「霧島さんの提案で、負けた方は何でも言う事を聞くなって約束をしたんよ」

「……………成程ね」

久遠が不思議そうに言うので深紅ちゃんが笑顔で説明していた。お似合いの二人って感じで羨ましいなあ。

視線を戻すと瑞希ちゃんに視線をやった後に坂本君に視線を戻した霧島さんが……………

「……………雄二、私と付き合って」

と、きつぱりはっきりと言った。

「霧ちゃんは本当に一途だね」

「優羽ちゃん、知ってたんだね」

のほんといつた感じで言う優羽ちゃんを見て言うと

「幼なじみだからね」

「そっか」

ニッコリ笑って言うのはいいけど、あたしを抱きしめるのはやめてほしいな。

「あ、遠月さん。ずるいですっ!」

え、恋ちゃんもなの!?

優羽ちゃんに抱きしめられたまま、恋ちゃんに抱きしめられたあたしはどうしたらいいのかな?

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか?」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

アキ君はいまの状況に混乱しているようで、深紅ちゃんは久遠君に近寄っていた。

「その話は何度も断つただろ? 他の男と付き合う気はないのか?」

「……私には、雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

霧島さんは一途に坂本君を想っていたのが、色々な噂がついたわけなんだね。
噂って凄いなあ。

「拒否権は？」

「雄二、んなもんある訳ないだろ」

「……その通り。約束だから、今からデートに行く」

坂本君の質問を久遠君が呆れたように言うと霧島さんは頷いて坂本君の手をひいて歩き出した。

「離せ！ やつぱりこの約束はなかったことに！」

坂本君はそのまま霧島さんに引きずられていかれた。
その場には沈黙が流れていた。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

それを破ったのは、とある教師の声。

「あれ？ 鉄人……鉄村先生？ 俺たちに何か？」

「そこは西村先生だよな！？ そんな斬新な名前はダメだよ！！！」

久遠君の台詞にあたしは思わずツツコミをいれていた。

「あ、そうやったね。すんまへん、鉄人先生」

「神崎さんも悪ノリしすぎです!!」

笑顔で言う深紅ちゃんに恋ちゃんがツツコミをいれた。

「雨宮、桜木。……苦労するな。……今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

あたしと恋ちゃんに言つと西村先生はFクラスの皆を見て言った。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「……なにいつ?!?!?」「」「」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに、グウの音も出なかった。

「吉井と久遠、そして坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“過激派筆頭”。ならばに“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ! 何としても監視の目を掻い潜って、今ま

で通り楽しい学園生活を過ごして見せます!」

「その通り! 一筋縄でいくとは思わない事ですね。村人先生」

「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか? それと久遠、勝手に斬新な名前をつけるな」

そんな気はないのはポーズだけだよ、ね。
そう思うコトにしよう!

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

「2時間か、頑張ってみまひよか」

「うえっ!?! ……けど、ちと頑張ってみるか? どうせ3ヶ月何もできないんだし」

「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

それぞれやる気を出す久遠君とアキ君と深紅ちゃん。
それでいいの!?

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか?」

「ありません!」

「きっぱり断言しないでよ! ……てか、堂々と言い放つことじゃない

でしょ!？」

思わず、久遠君とアキ君にツッコミをいれていたあたしがいた。

「久遠君、ちよつとええ？」

「?なんだ。深紅」

皆が帰ろうとしていたら深紅ちゃんが笑顔で久遠君に近寄っていた。

「あんな、久遠君のこと。名前で呼んでもええ？」

「え？」

深紅ちゃんの突然の発言に久遠君が呆然としていた。

「ダメなん？」

「いや、そんなことはない」

小首をかしげて深紅ちゃんが聞くと久遠君が答えた。

「ほな、決まりやな。光一君って呼ばせてもらうで」

にんまりと笑顔で言う深紅ちゃんは本当に嬉しそうに見えた。

「あ、それは映画のチケットやね」

「ん?ああ……行くか？」

ふと目に入った映画のチケットを見て言うと久遠君は映画のチケットを見せて聞いた。

「ええん？ 他に誘いたい子とかおつたんやない？」

「別にいいさ」

深紅ちゃんが聞くときっぱりと久遠君は答えた。

これって……デートだよな？

あ、優子さんが複雑そうな顔してるよ。

「ほな、秀吉はんを介抱してからいきまひよか」

「そうだな」

久遠君と深紅ちゃんってお似合いの二人だよな。

「光一、秀吉のことは。私と優子に任せて、あんたはデートでも楽しみになさいよ」

「ちよ、渚」

久遠君に渚ちゃんが近寄って言うと優子ちゃんが慌てて言う。
でも、渚ちゃんはスルー。

「そうだな、行ってくる」

「ほなな」

久遠君は深紅ちゃんと一緒に歩き出した。

「買い物くらい、私が付き合っつわよ。それに、今はほっといてあげなさいよ」

「うう……わかってるわよ」

渚ちゃんは見送ると優子ちゃんを見て呆れながら言い、どこか納得がいかないような優子ちゃんが返事した。

「つぐみ、帰ろうか」

「え？うん」

アキ君はいつものまにか隣に来ていてあたしに笑顔で言った。

瑞希ちゃんと美波ちゃんから嫉妬の視線がきてるけど、恋ちゃんと雫ちゃんに引きずられていかれてたよ。

アキ君に手をひいてもらいながら歩くのは少し恥ずかしいけど……嬉しいという気持ちもあった。

このまま買い物して家まで帰るのもいいかな？

「じゃあ、優羽ちゃん、恋ちゃん、雫ちゃん。またね！」

「うん、ばいばい」

「また、明日です」

「またね」

みんなで靴箱まで行くとそれぞれの帰路を歩き出した。

こうして、Aクラス戦は幕を閉じたのでした

バカテスト 第十八問

問題

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希と姫路亮と桜木恋と雨宮つぐみの答え

『Peace Keeping Operations（平和維持活動）の略。国連の韓国のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の事。』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば、覚えておくといいでしょう

吉井真希の答え

『PK』

教師のコメント

それはプレイヤーキラーの略では

土屋康太の答え

『Pants Koshi-tsumi Oppaiの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事』

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人たちです。

久遠光一の答え

『PK Offsideの略』

教師のコメント

それはサッカーです

閑話 映画編

試召戦争が終結してからの翌朝のことだ
噴水の前で光一は深紅を待っていた。

「よくよく考えると、FFF団はどうして攻撃してこなかったんだ？」

ふと、待つてる間に気になっていることを呟くと

「そんなん、わっちが脅したんにきまっとるやろ」

けたけたと笑いながら深紅は光一に近寄って行った。

服装は着物だった。真紅の着物には蝶の絵がついている。

「そうなのかって……!!」

深紅の声に光一は振り向くと驚いた表情をした。

「?どないしたん?」

深紅は不思議そうに光一に聞いた。

「その格好」

「ああ、これ…普段着でもあるんよ」

光一が深紅を見て言うと深紅は笑顔で言う。

「どうやら、家では着物を普段着として着ているようだ。」

「気まぐれでワンピースとか着たりするんやけど……どうも似合い
そうもないんよ」

苦笑いを浮かべて深紅は言った。

スタイルもよく、容姿も良い彼女に似合わない服などないと思うの
だが。

彼女自身はそう思っていないようだ。

「そんなことはないと思うけどな」

「そうけ？　なら……今度は違う服を着てくるで」

光一が言うつと深紅はニツと笑って言った。

そして、映画館に二人で向かうと

「あれ、つぐみに明久やん。」

「偶然だな」

深紅と光一はつぐみと明久を見つけると近寄って声をかけた。

「あ、深紅ちゃんに久遠君！！」

「光一に神埼さん、デートなの？」

つぐみは驚きながら言うつと明久は小首を傾げて聞いた。

「うーん……デートといえばそうかもしひんな」

「なんか微妙だな」

深紅は苦笑いしながら言うと光一も苦笑いをして言う。
二人で出掛けてる時点でデートだと思うが、二人はそういうのした
ことがないからよくわかっていなかったりする。

男子 side

「そっか…所で、光一も映画館？」

「ああ、明久もか？」

明久は苦笑いを浮かべてから尋ねると光一も頷いて聞き返す。

「うん、日頃の感謝をこめてね」

「明久らしいな」

笑顔で明久が言うと光一は笑って言う。

二人はいつまでも仲の良い相棒としているだろう。

もう一方の女子 sideでは

「映画館ってことは、試召戦争が終了した時のチケットのこと？」

「そうや。相手もおらひんかったみたいやから見に行くんよ」

つぐみは小首を傾げて聞くと深紅は笑顔で答えた。

「そっか……着物似合ってるね」

「おおきに、そう言ってもらえると嬉しいで」

笑顔でつぐみが言うと深紅は嬉しそうに笑って言う。
よほど、想いれがある着物なのだろう。

会話が終わると映画館に入ることとなった。
偶然なのかお互い見る映画は同じだった。

映画が終わると

「面白かったね」

「うん、こついう映画は凄く好きかも」

明久とつぐみは笑顔で会話をし

「たまにはこついうもんもええね」

「良いチョイスだったろ？」

深紅は笑顔で言うと光一は笑って言った。

「そついえばさ、雄二が霧島さんと一緒に居たけど」

「なんだか、お互い眠っていたね」

「珍しいな、雄二が暴れていないなんて」

「そつやね。なんか意味あるんやろうか」

ふと気になったことを明久が言うとなつぐみも思い出して言った。すると、光一は意外そうに言い、深紅も不思議そうに悩みながら咳く。

「そつだ、みんなで喫茶店に行かない？」

「いいな。今日はみんなの分、俺がおごるぜ」

明久が笑顔で言うと光一も賛成して言った。

「え、いいよ！！自分の分はちゃんと払うし」

「そつや、光一君は気にせんでええよ」

つぐみは慌てて光一に言い、深紅は苦笑いを浮かべて言う。

誰かにおごられるというのに慣れていないために遠慮をしていた。

「そつか？ 明久はどうするんだ？」

「僕？僕は光一におごってもらおうかな」

光一が聞くと明久は笑顔で言った。

「アキ君、生活費足りてないの？」

「え、あー…そついうわけじゃないよ。ちょっと、欲しい物があつて」

小首を傾げてつぐみが聞くと苦笑いを浮かべて明久は言う

つぐみは明久の生活費の財布を握っているけど、ある程度は明久に渡している。

「ゲームじゃないから、安心して」

「そう？ でも、あんまり無理して食を削らないでね？」

「うん」

明久が笑顔で言うつつぐみは笑顔で言ったので明久は頷いた。そうこうしているうちに喫茶店に着いて、光一側と深紅側に別れて座った。

男子 side

「で、何が欲しがってたんだ？」

「つぐみに贈るプレゼントだよ」

光一が聞くと明久は笑顔で答えた。すぐに答える辺り、本当のことなのだろう。

「へ〜。どんなの買うつもりなんだ？」

「うん、うさぎのぬいぐるみか。髪留めにしようかなと思ってるんだ」

ニヤリと笑って光一が言うと明久は少し照れながら言った。

「日頃のお礼にか？」

「うん、そのつもりだけど……変かな？」

光一は明久に聞くと明久はすぐに頷いた。

まだ、自分の気持ちに気づけていない為に常日頃のお礼という意識でしているのだろう。

なんとも明久らしいことだ。

そして女子 side では

「アキ君は瑞希ちゃんにプレゼントを贈るのかな」

「なんで、そう思うんや」

つぐみは俯いて言うと深紅は呆れながら言う。

「だって、上の空が多かったから……」

「だからって、そう思うんはあかんよ」

俯いたままつぐみが言うと深紅は優しくつぐみの頭を撫でて言う。

「うん……そうだよな。アキ君、疲れてるだけかもしれないし」

「ま、わっちにはつぐみへの贈り物を考えてるんやないかと思うんやけど」

笑顔でつぐみが言うと深紅はニッコリと笑って言った。

「えー!! そんなことないよ!! あったとしても日頃のお礼とかだ

「よ」

「断言できる辺りがむなしくなるで」

すぐに否定してつぐみは言うつと深紅は苦笑いを浮かべて言った。

こうして、映画館デートは幕をとじたのでした。

この後、明久はつぐみの贈り物を光一と相談していたことは誰も知らない。

第18問 学園祭プロローグ 改(前書き)

リザク様、サイレント様、FOOL様、ヒョウガ様、秋雨様、レイ
ン様

感想ありがとうございます!!

第18問 学園祭プロローグ 改

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

この文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室を改善を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。

この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。

学園祭準備の為にLHRロングホームルームの時間は、どの教室も活気があふれている。我がFクラスはというと……

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

代表の坂本君は、床にござを敷いて座るFクラスに、だるそうに言った。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として、誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の坂本君。

興味がないのがわかりまくりだ。多分、全部他人に押し付けて坂本君だけは寝るつもりなのだろう。

「吉井君、つぐみちゃん。坂本君って学園祭はあまり好きじゃない

んですか？」

話合いの邪魔にならない程度の小声で明久に話しかける。

「直接聞いたわけじゃないから、わからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね。」

「興味があるならもっと率先して動いてるはずだよ」

「そうなんですか……。寂しいです……」

いつも明るい瑞希の表情に翳りがさす。

「吉井君とつぐみちゃんも興味がないんですか？」

「あたしはそんなことないかな」

「うーん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいてわけじゃないし」

明久の正直な気持ちから言えば、授業が潰れるのは純粹に嬉しいけど、

学園祭でこれをやりたいという目的のようなものがないのだから。

「つぐみちゃんは同じ気持ちで嬉しいです」

でも、私は吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほえ？」

「アキ君も瑞希ちゃんと一緒に学園祭での思い出を作ろうよ？」

どこか無理がある笑顔で明久に話しかけるつぐみ。自分の気持ちよ
り、親友を優先していた。

「それに、うちの学園祭ではとつても幸せなカップルができやすい
って噂があるんだよ」

「そうなの!？」

「はい、つぐみちゃんの言うとおりです」

つぐみが明久に笑顔で言うとも明久は驚きながら言い、それを瑞希は
笑顔で肯定した。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え?ウチがやるの? うん……、ウチは召喚大会に出るから、
ちよつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃない
の?」

「え? 私ですか?」

突然話を振られて瑞希は小首をかしげる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタ
イムアップになる」

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会にでるのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと渚ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

と、手を握り締めて言う瑞希。

「学校の宣伝みたいな行事なのに、もの好きやね」

「ウチ達は瑞希に誘われてなんだけどね。」

「瑞希ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないしね」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。」

『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの

「ははっ。バカなのは否定しないが、そこまで言うてくれるなんて嬉しいな。」

「瑞希が怒るなんて珍しいね」

「だって、皆の事を何も分かっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せせんっ」

「あはは（苦笑）」

Fクラスはバカなのはどうも否定できないな」と苦笑いしながらつぐみは思ったとか。

「だから、Fクラスのウチと渚とで組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「その手伝いをする事になったのよ」

確かにこの3人なら、瑞希の父親の鼻をあかすこともできるだろう。

「お前等。こつちの話が続けていいか？」

「ウチは召喚大会に集中したいし、勘弁してほしいわね」

「なら、あたしがやるよ？」

小さな手を上げてつぐみは笑顔で言う。

「兩宮が？背が届くのか？」

「あたし、そんなにちっこくないよ!!」

頬を膨らませて拗ねるつぐみに坂本君は苦笑いする。

すぐに優羽ちゃんの膝の上に戻されたけどね。

「後は副実行委員やね」

「はいはい！私がやる！」

「いえ、私が！」

深紅が言つと優羽ちゃんと恋ちゃんが手をあげて競い合う。
ふ、二人ともやる気まんまんだね（汗）

「三人で実行委員したらどうだ？」

「ふむ…それもいいかも」

困っていると坂本君が優羽ちゃんと恋ちゃんを見て言つ。
え、それでいいの！！？

そんなわけで、三人で教壇に立つんだけど。
し、身長が（泣）

「つぐみ、これを使いなよ」

「あ、ありがとう！アキ君」

明久が西村先生から預かった雨宮専用土台を持っていき、置くと笑顔で言つた。

「これでok！じゃあ、始めるよ！」

教壇に土台を置いてそこに上がると笑顔で仕切る。

「クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してね？」

つぐみが言つと数名が手を上げる。

「はい、土屋君」

「…………（スクツ）」

名前を呼ばれて康太は立ち上がった。

「…………写真館」

「写真館だね。」

つぐみが振り向くと優羽ちゃんが『秘密の写真館』と書いた。

「つ、次は横溝君」

「メイド喫茶………といたけど、流石に使い古されいると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

恋ちゃんが普通に書いてくれた。

「次は、横田君」

「ゴスロリ喫茶なんてどうですか?」

「ゴスロリ?」

『女は似合うだろうが、男には似合わないだろ?』

『だよな』

これには批判を多く出ているが一応意見なので優羽ちゃんに書いてもらった

「他にありませんか？はい、須川君」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川は立ち上がりながら言つと

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せたいの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「それもいいね。」

「追加しときますね」

恋ちゃんは須川君の意見を普通に『中華喫茶』とチヨークで書いた。

すると、厳つい男が扉を開けて入って来た。

「お前等出し物は決めたか？」

「今の所この4つです」

「雨宮が議事進行役か」

「はい」

西村先生は私を見て言い、恋ちゃんと優羽ちゃんを見て

「書いたのは、桜木と遠月か」

「はい」

「そだよ」

恋ちゃんと優羽ちゃんはすぐに答えた。

「ところで、先生。その後ろにいる方は？」

「ああ、転校生だ」

あたしは西村先生の後ろにいる人を見てから聞くと、西村先生はすぐに答えてくれた。

「あれ、亮くん？」

「久しぶりですね。つぐみちゃんに恋ちゃん」

見覚えのある髪の色とメッシュに驚いて言うとニッコリと笑って答えてくれたのは、小学校と中学校の時に出会った。瑞希ちゃんの双子の弟君でした。

「あれ、いつ………？」

「みい姉に聞いていないんですか？」

恋ちゃんが困惑したように言うと亮くんは困ったような笑みを浮かべて聞いた。

すぐに瑞希ちゃんを見ると、瑞希ちゃんは視線をそらしていた。

第18問 学園祭プロローグ 改(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

学園祭 アンケート？

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希と姫路亮の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

久遠光一の答え

『新しい恋』

教師のコメント

この回答と何度も書き直した跡を見て、君の哀愁の深さを実感しました

桜木恋と雨宮つぐみの答え

『静かなクラスメイト』

教師のコメント

あなた達も苦労しているんですね。

雨咲蒼夜の答え

『現状維持』

教師のコメント

何かを求めるのではなく今が一番ということでしょうか……あなたらしい意見ですね。

遠月優羽の答え

『今より広い交友関係』

教師のコメント

ふざけた回答を期待した先生を許して下さい。

神埼深紅の答え

『面白いこと』

教師のコメント

先生までも振り回して楽しいですか？

第19問(前書き)

ヒヨウガ様、レイン様、秋雨様、FOOL様

感想ありがとうございます！

第19問

「これで決をとるよー！」

「いいと思う方に手をあげてくださいね？」

「あげないと悪戯しちゃうからね」

あたしと恋ちゃんと優羽ちゃんの三人で周りを見て言ったよ。
これで、人数がちゃんと集まるといいんだけど。

「まずは写真館」

「これだけですか」

手を上げた人数分だけ書き込む

「次はウェディング喫茶！」

写真館よりは多い方だね

「次はゴスロリ喫茶！」

「多いな」

ロリコンが多いのも悩みものだと思ったのはあたし達だけではない
だろう。

「次は中華喫茶！」

次々と書いて行く恋ちゃんを見てからあたしは多数決の結果を見る。

「多数決の結果、ウェディング喫茶に決まりました！全員で協力して頑張ろう！」

接戦だったが、僅かな差でウェディング喫茶が勝ったのでした。

『Yes!! Little princess!!』

何か変な合言葉が出たのは気にしない方がいいのだろうか。

「次に、誰が料理しますか？」

と恋ちゃんが聞くと

「俺が引き受ける」

「……………（スクツ）」

須川君と土屋君立ち上がったの。

二人とも料理なんてできるのかな？

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

料理が紳士の嗜み？

そもそも彼が紳士かどうか不明なんだけど。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうよ。
厨房班は須川君と土屋君のところ、ホール班はアキくん、お願いね？」

「うん、わかったよ」

「それじゃ、私達はホールに居ますね」

「そうだね、瑞希達女子と木下君はホールで他に男子で料理できそうな人は厨房に行つて、できない人はホールに行つてね」

瑞希の意見に頷いててきばきと指示をする。

「では、僕はみい姉を見張る為にもホールにいきます」

「わ、私もホールにします」

亮君はわざわざ見張る為という言葉を強調してるけど、彼も被害にあつたのかな？

恋ちゃんと亮君は幼なじみなんだっけ。
お似合いカップルなんじゃないかな？

「なあなあ、光一君。わつちと一緒に厨房にいかへん？」

「ん？別にいいぜ」

深紅ちゃんはニコニコと笑いながら久遠君と会話してる。
うわ、積極的だよ……！

「つぐみはどうする？」

「え？あたしもホールにするよ」

ぼんやりと眺めていたらアキ君に話しかけられていて少し考えてから結論をだした。

「つぐみがホールなら私も」

「わたしもホールにしようかな」

優羽ちゃんと渚ちゃんもそれぞれ担当する場所を決めていた。

「これで決まりだね。みんな、準備頑張るよー！」

あたしが小さな手をあげて言うと

『おー！！！』

クラスメイトの奴らもテンションをあげる。

こんなんでちゃんと売り上げを伸ばせるのか不安な気分だよ。

学園祭 アンケート？

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希と姫路亮の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

久遠光一の答え

『動き易く、品を保てて人目を引く服装』

教師のコメント

君からまともな意見が出て、意外だと思った先生を許してください。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント
裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています

桜木恋の答え
『その喫茶店にあった服。雰囲気を壊さなければ私服でも可』

教師のコメント
雰囲気にあった服装ですか、なかなか良い考えですね。私服ならコストもかかりませんしね。

雨宮つぐみの答え
『喫茶店をするに適した服装。エプロンとか、かな』

教師のコメント
確かに喫茶店をするに適した服装でないと動きにくいですもんね。

遠月優羽の答え
『喫茶店という場を考え、奇抜に行くか堅実に行くかで進路は変わる。』

・後者のアイデアの一つはノーマルに学校の制服との相性の良い調

理実習に使うようなエプロンなどにするのも良い。

・前者の意見を優先するなら、奇抜性を考え、コスプレ、着ぐるみなどなど詳しくは後述

・3つ目はオーソドックスに普通のウエイトレスに近い服装等も良い、またウエイトレスの服に関して詳しくは後述………』
(以下大学ノート一冊をフルに使った解説と考察)

教師のコメント

そのベクトルを学業に1ミリでも向けてください。

神埼深紅の答え

『チャイナドレス』

教師のコメント

本気で書いてませんか!!!?

第20問(前書き)

ヒヨウガ様、リザク様、秋雨様

感想ありがとうございます

第20問

「ねえ、恋と亮とつぐみってもう瑞希にあの話聞いたの？」

帰りのHRが終わってから美波が急に話しかけてきた。

「あの話？」

「どっぴりっぴりっ。」

「あ、ごめん。端折りすぎたわね、瑞希の転校についての話よ」

そういえば、瑞希ちゃんが朝からそんなこと言ってた気がする。

亮君からもその話を聞いたし。

「あ、その話なら聞きました」

「聞いてるよ」

恋ちゃんはすぐに答えてあたしもそれに続いて答えると

「はい、朝から愚痴られましたから」

亮君は苦笑いしながら答えたよ。

「そう、ならいいわ。後は……アキ、久遠、深紅、ちよつといい？」

そう言っつて、美波ちゃんは久遠君と深紅ちゃんと会話してるアキ君に話しかけた。

「ん、何か用？」

「どうしたんだ、島田？」

「どないしたん？」

アキ君と久遠君と深紅ちゃんは振り向いて美波ちゃんを見て聞いた。

「うん。用というか、相談なんだけど……」

「相談？ 僕等で良ければ聞かせてもらうけど」

「そつやで、わっちらの仲やん」

「とりあえず、聞かせてくれないか？」

美波ちゃんは口ごもりながら言うのとアキ君と深紅ちゃんと久遠君は不思議そうな表情をして聞いてきた。

「うん、ありがと。多分、3人が言うのが1番だと思うんだけど……その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張りだせないかな？ ほら、あの様子じゃ坂本が仕切らないと……」

「あー、まあ確かにな」

「興味ないんはしゃーないやろ」

「でもそれは難しいなあ……さっきも言ったけど、雄二は興味ない事に徹底的に無関心だからね」

久遠君は苦笑いを浮かべて言うと深紅ちゃんも苦笑いを浮かべて言い、アキ君は悩みながら答えた。

「でも、アキと久遠と深紅が頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

美波ちゃん、どこにそんな自信があるの？

アキ君の言う通りだと思っし。

「ううん、そんなことない。きつとアキと久遠と深紅の頼みなら引き受けてくれるはず」

まるで確信めいたように美波ちゃんは言う。

「そりゃ確かに、良くつるんではいるけど、だからと言って別に…」

そうだよな、つるんでいるだけだし。

アキ君の被害は大きいけど。

「あんた達、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕、お婿に行けない！！」

「というか、どういう経緯でそんな結論にたどり着いた！？」

「てか、なんでそうなるんや！！」

美波ちゃんの発言にアキ君が突拍子もない一言を言い、久遠君と深紅ちゃんはツッコミをいれていた。

しかも、アキ君は泣き崩れて、久遠君は全身に鳥肌が立ったみたいだし。

アキ君達の噂はよく知らないけど。深紅ちゃんのは素直になれないから、坂本君をいじっているんではっという噂が流れていた気がする。

「誰が雄二なんかと！ 僕はホモじゃないんだから、女の子のつぐみとの噂の方がいいよ！」

「ふ、ふえ！？」

アキ君の突然の発言にあたしの顔が真っ赤になってオロオロしてる。

「凄い告白もあつたもんだな」

「せやね、わっちも同意見や」

久遠君と深紅ちゃんはニヤニヤと笑って言った。

「べ、別に告白というつもりでアキ君が言ったわけじゃないだろうし！！」

「あ、アキ君。気持ちは嬉しいけど……まだ、あたし達は高校生なわけだしっ」

「ち、違うんだよ。つぐみ！ あれは、言葉のあやというか！」

冷静になるうとしながら言うとアキ君も慌てて言った。

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

美波ちゃんが若干不機嫌に言うとアキ君は頷いて言うと

「なんとかできませんかね？ このままだと喫茶店が失敗に終わり
そうですし……」

「このままというのもダメでしょうしね」

「で、一体どうしたんだ？ やけに喫茶店に拘ってるみたいだけど
？」

「そうやね、深刻そうやし。詳しく話してくれひん？」

恋ちゃんは悩みながら言うと亮君も考えながら言い、久遠君と深紅
ちゃんは不思議そうに尋ねた。

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の
話で」

「アキくん、久遠君、深紅ちゃん。実のところ本当に深刻な話なん
だよー！」

美波ちゃんが困っているけど、これはちゃんと言わないとね。

「え？ どういうこと？」

「本人には言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。」
けど、一応秘密の話だからね?」

と美波ちゃんは真剣な様子でアキ君達を見て言った。

「う、うん。わかった」

「右に同じ」

「同じくや」

アキ君と久遠君と深紅ちゃんは頷いて言う。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん? 姫路さんがどうかしたの?」

美波ちゃんは口を開いて言うとアキ君は不思議そうに聞いたら

「このままだと、みい姉は転校してしまうんですよ」

亮君が苦笑いをして言う。

「あれ、亮君は問題ないの?」

「はい、僕は頑丈なので」

あたしが疑問をもって尋ねると亮君は笑顔で答えた。

頑丈だから大丈夫って言われても、万が一ってこともあるだろうに。

「どっ、どういう事だ？ それに“このままだと”って、一体……？」

「待つんや、光一君。明久が処理落ちしかけてるで」

久遠君も驚いて言うと深紅ちゃんがアキ君の状態に気づいて言った。

「このバカ、不測の事態に弱いんだから！」

「いや、いきなりこんな話されたらパニックになってもおかしくないぞ？ おい明久、しっかりしろ」

美波ちゃんは呆れながら言うのと久遠君はツッコミをいれて言い、アキ君の体を掴んで揺らした。

「いやいや、誰だってこんな話をされたらパニックになるからね！」

「光一……モヒカンになった僕でも、相棒と呼んでくれるかい？」

「………どういう処理したら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら？」

「ある意味、稀有な才能かも知れんの」

「ああ、呼んでやる。呼んでやるから落ち着け」

虚ろな目だったアキ君の発言に美波ちゃんは呆れながら言い、いつのまにか来てた木下君も苦笑いを浮かべて言った。

久遠君はアキ君の発言をスルーしながら言う。

「亮君！ 姫路さんが転校って、どういう事さー!？」

「どっつて……そのまんまの意味ですよ」

つめよるアキ君に亮君は苦笑いを浮かべて言う。

「このままだと、瑞希は転校してしまうかもしれないということですよ」

「このままだと?」

恋ちゃんは苦笑いをして言うとアキ君は不思議そうに言った。

「このままって……まあ、この設備と姫路の体調を考えれば、納得するなという方が無理か」

「そうやね。瑞希は体が弱いからというのも理由やろっけど」

久遠君は教室を見回して言うと深紅ちゃんも同意するように言った。

「桜木よ。その姫路の転校の理由がさっきの話が全然つながらんのじゃが」

木下君は小首を傾げて聞いて

「それでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なんだから」

美波ちゃんは木下君を見てきっぱりと言った。

「ってコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて」

「そうですね。純粹に設備の問題ということに……ケホツケホツ！」

アキ君は考えながら言つと恋ちゃんが頷いて言つと咳き込み

「恋ちゃん。大丈夫ですか？」

「……はい、大丈夫です。それに瑞希は身体も弱いですし……」

「そつだよね。それが一番マズいよね……」

亮君が心配そうに尋ねると恋ちゃんは頷いてからアキ君達を見て言つた。

設備の問題かあ。これは厄介だよね。

「なるほどのつ。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

Fクラスの皆が頭が悪いというのも理由らしいけど、一番は設備の問題だよな。

このままではいけないよね。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……？」

美波ちゃんがアキ君に聞くと

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や桜木さんやつぐみ、秀吉であつても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

きつぱりとアキ君は言い、美波ちゃんは笑顔で言った。
アキ君は本当に優しいね。

「わかった。そういうことなら、何としても雄二を焚きつけてやるさ！ 協力してくれるよね、相棒？」

「当たり前だ。俺達の為に怒ってくれてる以上、ここで立ち上がり
にや男じゃないだろ。相棒」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれ
ん」

「わっちも同意見や」

アキ君は頷いてから言うつと久遠君を見て聞いて、久遠君はキツパリ
と言つて木下君も真剣な様子で言うつと深紅ちゃんも頷いて言った。

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね？」

アキ君はそう言うつと携帯を取り出して坂本君と連絡を取る。

「あ、雄二？ ちょっと話が……。え？ 雄二、何してるの？ ……」

雄二！？ もしまし！ もしまし！

と、何やら意味不明の会話が行われたらしく、通話が切られた。

「坂本はなんて言った？」

「えっと、“見つかった”とか“鞆を頼む”とか言ってた」

「……何それ？」

「きつと翔子さんに追われているんじゃないですか？」

「ああ……」

亮君が美波ちゃんの台詞に苦笑いしながら言うと納得したように言った。

「とにかく、これじゃ坂本くんと連絡を取るの難しいですね」

恋ちゃんは困ったように言うと

「いや、これはチャンスだ」

アキ君は確信めいたように言った。

「え？ どういうこと？」

あたしは不思議そうに聞くと

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。」

「じゃあ秀吉と島田。ちょっと協力してくれるか？」

アキ君とアイコンタクトを交わした久遠君は美波ちゃんと木下君を見て言う。

「それはいいけど……坂本の居場所はわかってるの？」

美波ちゃんは不思議そうに聞いた。

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「じゃあ明久、雄二を頼む。タイミングはそっちに任せるから。」

アキ君はキツパリと言うと久遠君はアキ君を見て言った。

「了解」

ニヤリと笑ってアキ君は言う教室を出て行った。
それから数分間……

「じゃあ頼むぞ？」

「……こんなので、坂本を引っ張り出せるの？」

「大丈夫やて。おっ、来たみたいやね」

久遠君はアキ君に合図を送ってるみたいで、それを美波ちゃんは見ながら言う。深紅ちゃんは楽しそうに笑って言う。

深紅ちゃんは連絡が来ると携帯を美波ちゃんに渡す。

「もしもし坂本？ ……ちょっと待って、今代わるから」

美波ちゃんは携帯に出て坂本君と会話すると木下君と変わる。

「（頼むぞ秀吉）」

久遠君はそれを見ると木下君に言う。

「（了解じゃ） ……雄二、今どこ？」

木下君は頷くと声を霧島さんに変えて話す。
すると…

『人違いです』

プツツっといって一瞬で切られたみたいだった。
とりあえず、アキ君達が戻ってくるまで待機することになった。

学園祭 アンケート？

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ ? 統率力 ? 行動力 ? その他」() 「

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『【？かわいらしさ】 候補……姫路瑞希&島田美波&雨宮つぐみ
&桜木恋&遠月優羽』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】 候補……雨宮つぐみ』

教師のコメント

確かに可愛いですからね

久遠光一の答え

『【？可愛らしさ】 候補……神埼深紅&雨宮つぐみ&桜木恋』

教師のコメント

何度も書き直した形跡がありますが、誰を書きたかったのでしょうか？

坂本雄二の答え

『【その他（結婚相手）】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

桜木恋の答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希、霧島翔子、吉井明久、雨宮つぐみ』

教師のコメント

姫路さんは人気ですね。
それよりも何故吉井君が候補に入っているのが気になります。

雨宮つぐみの答え

『【？可愛らしさ】 候補……姫路瑞希、霧島翔子、桜木恋、島田美波、遠月優羽』

教師のコメント

姫路さんが候補に入る確率が高いですね。
遠月さんも入っていることには驚きました

遠月優羽の答え

『【?可愛らしさ】 候補……雨宮つぐみ』

教師のコメント

雨宮さんもかなり人気ですね。

第21問

それから少しして、坂本君を伴ったアキ君が戻ってきた。

「そうか。姫路の転校か……そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？ どうして？」

話を聞いた坂本君が言うとアキ君は不思議そうに聞いた。

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つ。まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面やね。」

「深紅が言った点は喫茶店が成功したら利益でなんとかできるだろう二つ目は、老朽化した教室。

これは健康に害のある学習環境という面だ」

深紅ちゃんは笑顔で言う久遠君も便乗するように言った。

「そうじゃな。一つ目もそうじゃが、二つ目や三つ目も難しいのう」

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田と永久で対策を練っているんだらう？」

秀吉君が悩みながら言う坂本君は振り向いて言った。

「まあ、私は参加はつぐみちゃん優羽ちゃんとで参加するつもりで

すけど」

「だから、瑞希に参加するのはウチと渚なのよ」

恋ちゃんは苦笑いしながら言つと美波ちゃんは坂本君を見て言つた。

「ならいつそ、俺と明久と深紅も参加するかな？ 俺達のコンビネーションなら、良い線いけると思うし」

「そうだね。神崎さんもいるからそうそう負けることはないだろうし！」

「わっちは別にええよ」

久遠君は考えながら言つとアキ君は同意するように言い、深紅ちゃんも笑顔で言つた。

「翔子に参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこついった行事には無関心だしな。」

姫路と島田と永久の優勝は十分にありえるだろう」

なんでそういつのわかるのかな？と思つていたら

「雄ちゃん、残念だね。霧ちゃんも参加するよ」

あたしを抱き上げた優羽ちゃんが笑顔で言つた。

いつ来たの！！？

「なんだと！！？ そんな…俺はどうしたらいいんだっ！」

坂本君はそれを聞くと膝をついて落ち込んでいた。そこまで落ち込むことなのかな。

「それで、坂本くん。二つ目の問題はとうするんですか？」

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

恋ちゃんは坂本君に近寄って尋ねた。するとしれっとした表情で坂本君は言った。

「やっぱそうなるよな。けど学園長は偏屈だって噂だし、大丈夫か？」

「あんな。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とはいえ、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

久遠君がため息をついて言う。坂本君は呆れながら言った。そうだよ、あくまでもここは教育機関だもん。改善要求くらいは聞いてくれるよね。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

思い立ったが吉日というように、アキ君がそう提案した。それに答えるように久遠君と坂本君と深紅ちゃんが頷いたのであたしも優羽ちゃんも恋ちゃんも頷いた。

「それじゃ、さっさと行くか。一応行くのは、俺と明久と雄二と深紅とつぐみ……桜木と遠月も来てくれるか？」

「そのつもりでしたので良いですよ」

「つぐみんが行くなら私も行くよ」

久遠君が言うと恋ちゃんと優羽ちゃんは笑顔で言った。
優しい友達がいてくれると嬉しいなあ。

「じゃあ島田は、学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

久遠君が言うと美波ちゃんは頷いた。

「後、秀吉と美波。鉄人を見かけたら俺たちは帰ったと言っておい
てくれ」

「うむ。了解じゃ。鉄人と、ついでに霧島翔子も見かけたらそう伝
えておこう」

坂本君が言うと秀吉君は頷いて言うと坂本君がひきつった笑いをし
たが見えたのは気の所為かな？

学園長室前

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランド……』

新校舎の一角、学園長室前にて。

辿り着くや否や、出迎えたは言い争いの声だった。

「どうしたのつぐみん？」

「中で何か話をしているみたいなんだけど」

優羽ちゃんは立ち止まったあたしを見て聞いたので答えると

「とりあえず、学園長が居るとわかったんだから、入っちゃおうぜ
」？」

「ああ。さっさと中に入るぞ」

「失礼しまーす」

「たのも〜」

久遠君が言うと坂本君とアキ君はさっさと学園長室に入った。
深紅ちゃんはなんだか楽しげに見えたのは気の所為……かな？

「四人とも……普通は返事を待つものだと思うんですが」

「そのこのヤツの言う通りだよ。本当に失礼なガキどもだねえ」

恋ちゃんの言う通りだよ。

ノックしたのはいいけど、返事くらい待とうよ。

中に入ると白くて長い髪が特徴の藤堂カヲル学園長。

研究者だからなのか、規格外なところが多い人のようだよ。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

そういうのは教頭の竹原先生。鋭い目つきに眼鏡をしていて、クールな態度で一部の女子生徒に人気が高いそうだよ。あたしも恋ちゃんも優羽ちゃんも興味はないけどね。

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

やれやれとしたように教頭を見て学園長が言うと皮肉を教頭が言った。

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

不機嫌そうに学園長が言うと諦めた教頭はまた皮肉をこめて言う。

そういつて、竹原先生は部屋の隅を一瞬見てから、

「それでは、この場は失礼させて頂きます」

なんだろう、あの隅に何かあるのかな。

教頭が出て行くと深紅ちゃんは隅の方に向かって行くと何かを触っ

て弄っていた。
何をしてるんだろっ？

第21問（後書き）

感想と評価とお待ちしております！

バカテスト 第十九問

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希&雨宮つぐみの答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

神埼深紅の答え

『酸化カルシウム』

教師のコメント

惜しいですね。今回は真面目に答えようとしたんでしょっか？

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

第22話

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつて来ました」

学園長はわたし達を見て聞いてきた。

すると坂本君が敬語でしゃべりだした。

アキ君が気持ち悪そうに坂本君を見ていたのは気にしないでおこつ

「私はそれどころじゃないんでね。学園の経営に関するのなら、
教頭の竹原に言いな。」

それと、最初に名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだよ」

学園長はそう言うと坂本君が前に出て

「俺は二年F組代表の坂本雄二です。」

「わたしは雨宮つぐみです！」

「神埼深紅やで」

坂本君が自己紹介したので慌ててわたしも自己紹介をする。
それに続いて深紅ちゃんも自己紹介をした。

「それでこつちの2人が……こちらが2年を代表するバカで、こち
らは同じく過激派です」

そしたら坂本君が勝手に久遠君とアキ君の自己紹介をした。

「坂本君！その説明仕方はないよ！！？」

「ほう……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と久遠かい」
わたしがそう叫んで言ると学園長はいまのでわかったのか言う。

「ちょっと待って学園長！ 僕たちはまだ名前を言ってますよね
！？」

アキ君は学園長につめよりながら言った。

「離せ、深紅！」

「すんまへん。ここで相手を怒らせたら台無しやから、辛抱してや」
深紅ちゃんは久遠君を抑えていた。

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじやないか」

「ありがとうございます」

学園長は坂本君を見つめて礼を言う。

よかったどうぞやら聞いてくれるみたいだ

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノロ」

「わかりました」

うう、学園長はどうしてこうも口が悪いかな。

坂本君はよく耐えてるよね

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

あくまで丁寧な坂本君は説明していると学園長は耳をかいて言った。

ちゃんと聞く気あるのかな？

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です」

え、ええ！！？

全然耐えてないよ！しかも本音が駄々漏れだし！

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われれます」

「ちょ、坂本君！学園長にその言い方は」

わたしは慌てて坂本君の袖をひっぱって言う。

いますぐこんな暴言はやめさせないと！

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、という訳です」

ああ、もう言いきつちゃったよ。

しかも目がちゃんと笑ってないし！

あ、学園長が思案顔だ。なにを考えているのかな

「あの、学園長……?」

「坂本君のご無礼を許してください!」

「いいじゃん、つぐみんの頼みだよ?」

「……ふむ、ちょうどいいタイミングさね」

アキ君が声をかけてから恋ちゃんと優羽ちゃんが学園長にお願いしている、思案顔で学園長は小声で呟いた。

「よしよし、お前たちの言いたい事はよくわかった」

「え? それじゃ、直して貰えるんですね!」

あっさりと問題が解決する事に、アキ君が喜んで言うと

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

そう学園長が言うとアキ君がとんでもないことを言いだした。

「やめろ、こんなの捨てたら環境の害にしかならん。

ここは“文月妖怪 藤堂カラル”と銘打った見世物として、利益にするべきだ」

「いやいや、ここはとある場所で手に入れた薬の実験台になっても

「らいまひよ」

「……お前ら、もう少し態度には気を使え！」

「あの、坂本君が言えるセリフじゃないと思うんですけど」

久遠君は止めたかと思っただらアキ君よりとんでもない発言をして深紅ちゃんは笑顔で楽しそうに言いだした。

坂本君が呆れながら言うつと恋ちゃんが苦笑いしながら言った。
まったくその通りだよな。

「まったく、このバカ共が失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」 坂本

「そうですね。教えてください、ババア」 アキくん

「理由なく断られて納得出来る訳ねえだろ、妖怪」 久遠くん

「そうやで、理由を教えてんか」 深紅ちゃん

「そつだそつだ！教えて、妖怪学園長」 優羽

坂本君とアキくと久遠君と深紅ちゃんと優羽ちゃんは笑顔で学園長に問いかける。

でも、顔が怖いよ？

「堂々と妖怪呼ばわりするんじゃないよモヤシのクソジャリ！遠月も妖怪呼ばわりするんじゃないよ！……お前たち本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「「本当にすみません」」

学園長が怒鳴りながら言うのでわたしと恋ちゃんは頭を下げて謝っていた。

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちょろいガキども」

「確かにそうですけど、俺達はともかく体の弱い生徒が……」

学園長は呆れながら言うと坂本君が口を開いていいかけると

「……と、いつもなら言っているんだけどね。」

可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

学園長はニヤリと笑って言う。

それを聞いて坂本君は考え込み、久遠君も考え込んでいた。深紅ちゃんは笑っていた。

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

わたしが聞くと学園長は聞き返してきた。

それは知っているけど、頼みと関係あるのかな？

「わたしは優羽ちゃんと恋ちゃんと出るつもりですよ」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

不思議に思いながら答えたら聞かれた。

優勝賞品がトロフィーと賞状と白金の腕輪。

そして優勝賞品の副賞が、如月グランドパークプレオープンペアチケット。

準優勝賞品の漆黒の腕輪と如月グランドパークペアチケットのことだよ。

「それが、何か？」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

久遠君が聞くと学園長はやれやれとした様子で言うので

「はい、知りません」

「堂々と言うんじゃないよ！……まあ良いさね。

この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

きつぱりと久遠君が答えたら学園長がツッコミをいれていた。

副賞か、アキ君と行けたらいいな。

「回収？ それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。

けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。

今更覆す訳にはいかないんだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

かなり、もっともな話だよな。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！
それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「けどチケットで良かったじゃないか。腕輪に問題があるならまだしも、それなら問題としては軽い」

学園長は逆切れするように言うので坂本君は見つめて言った。
そこで学園長の表情が崩れた事を、坂本君と深紅ちゃんは見逃さな
かった

「で、良からぬ噂ってのは、なんや？」

「如月グループは、如月ランドパークに1つのジンクスを作ろう
としているのさ。」

“ここを訪れたカップルは幸せになれる” ってジンクスをね」

深紅ちゃんが聞くと学園長はわたし達を見て説明してくれた。

そ、そんなジンクスがあるんだ。

「ジンクス？ ……どうやってです？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコー
ディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を
用いてもね」

「な、何だと!？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる坂本君。
ああ、翔子ちゃんのことだ驚いてるんだね。

「どうしたのさ、雄二？」

「慌てるに決まってるだろうが!

今ババアが言った事は“プレオーブンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ!？」

アキくんが不思議そうに尋ねると坂本君は焦ったように肩を掴んで言う。

「別に言い直さずとも、わかってますよ？」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

恋ちゃんが苦笑いしながら言う。と学園長はため息をついて言う。

文月学園にはその性質上、数多くのスポンサーが存在する、

如月グループも当然、そのスポンサーの1つ。

「くそっ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたっぷりだからな」

「それに加えて、学生から結婚まで行けばジंकウスとして申し分なしだ。」

「候補としてこれ以上の学校はないやろうね」

「ふむ。そつちのモヤシのガキと神埼もそつだが、流石は神童と呼ばれていただけはあるね。」

頭の回転はまずまずじゃないか」

坂本君の知識の高さと久遠君と深紅ちゃんの知識に学園長はほめていた。

坂本君が神童ということは学園長は知っているみたい。

「坂本君、とりあえず落ち着きましょう。」

如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないですか」

「……絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる……行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚……俺の、将来は……！」

「……どうやら、安請け合いしたらしいな。妙な所で明久よりバカだよな、こいつ」

呆れたように言う久遠君の意見を余所に、学園長は言葉をつづけた。

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、交換条件ってのは……」

「そうさね。“召喚大会の優勝賞品および準優勝賞品”と交換。」

それが出来るなら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

そう学園長が言つとアキ君と久遠君が視線を合わせた。
あれはなにか考えているよね

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？
譲つて貰う事も不可だ。

アタシはお前達だけで召喚大会の決勝に進出しろと言っているんだ
からね」

考えてた事をモロに言われた為、苦虫をかみつぶしたかのような顔
をする久遠君とアキ君。
それを恋ちゃんは呆れたように見ていた。

「大丈夫ですよ、わたし達が勝てばなんとかなりますし」

「そうだよ、幸いに人数わけもできてるしね」

恋ちゃんが苦笑いして言つと優羽ちゃんは笑顔で言った。

「じゃあ僕たちが決勝進出したら、教室の改修と設備の向上は約束
してくれるんですね？」

「何を言っているんだい？
やってやるのは教室の改修だけで、設備についてはうちの教育方針
だ。変えてやる気はないよ」

アキ君が期待にみちたように言つと学園長はしれつと言った。
世の中そんなに甘くないみたい。

「ただし、清涼祭の売り上げでどうにかするのは別さね。今回だけは見逃してやってもいい」

「だけど、喫茶店を経営しつつ大会を勝ち抜くと言うのも難しい話だよ。そこを何とか……」

学園長がそう言うのでわたしが言うのと深紅ちゃんに止められた。

「やめとき、わっち達はあくまでも頼む側だから、話を引き受けてくれただけで儲けものだと思わな、あかん」

「そう言う事だ。ババアに譲る気がない以上、この取引に応じるしか方法はない」

深紅ちゃんはわたしを見て言うのと坂本君もあきらめたように言った。

「……わかりました。この話、引き受けます」

「わたしも頑張ります!」

「そうかい。それなら、交渉成立だね」

アキ君が言うのと恋ちゃんははりきりながら言い、学園長は笑みを浮かべて言った。

「ただし、こちらからも提案がある」

「何だい? 言ってみな」

坂本君は一步前に出て学園長を見つめて言う。

「俺達は最後に当たる物として、召喚大会は3対3のタッグマッチ。形式はトーナメント所為で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

坂本君が学園長を見てそう言つと

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか」

学園長が不思議そうに言うつと坂本君は見つめて言った。
承諾はされたから、良い方だね。

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進めるんだろっかね？」

そう言われ久遠君はアキ君と深紅ちゃんと拳を合わせる。

「無論だ。俺達を誰だと思ってる？」

「絶対に優勝して見せます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

「はんなりいきまひよ」

「わたしも頑張るよ」

「わたしもです！」

「つぐみんの為ならえんや」

全員で、頷きあう。

「それじゃあなた達。任せたよ！」

「おうよっ！」

「任せてや」

「はい！」

こうして、アキ君と久遠君と深紅ちゃんのバカと危険物と女王のトリオができた。

わたしは恋ちゃんと優羽ちゃん、美少女と歌姫と猫のトリオが誕生した。

第22話(後書き)

こんなんでいいかな？

バカテスト 第二十問

以下の問いに答えなさい。

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？ 驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

雨宮つぐみの答え

『603』

教師のコメント

正解です！

神埼深紅の答え

『603』

教師のコメント

真面目に書いてありますね
なんか複雑です

第23問(前書き)

内容を変更しました!!

第23問

清涼祭初日の朝。

Fクラスの教室はいつものような小汚さはなく、あたし達の教室は教会へと変貌していた。

壁にかかるロザリオやらネックレスなど様々なものが教室を飾る。さすがに本物ではないけれど充分華やかだ。

まあ食べ物を取り扱う店だから、小汚いと人が寄りつく訳がない。

ホールの女子は、上半身は体にフィットし、腰から裾にギャザーで広がった型、

いわゆる「お姫様ドレス」に身を包み、顔の良い男子はタキシードを着ている。

ドレスは土屋君が作ってくれたため初期経費は少なくてすんだ。後、タキシードは深紅が作ってくれたよ。

「なんかあたし達の教室じゃないみたいだね」

あたしは教室を見て呟いた。

「そうだね。このテーブルなんて、ぱつと見は本物と区別がつかないよ」

明久がテーブルを見て言った。

そこに並べられたテーブルは、みかん箱を重ねてその上にクロスをかけた物。

演劇部である秀吉作で、小道具作りでの経験を生かした一品。

「けれどクロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉君がクロスを捲る。

するとそこには、白いクロスの影響もあって、より汚く見えるみかん箱があった。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちだね」

あたしが肩越しから覗き込む。

これだと客足が遠のくこと間違いないし。

「大丈夫ですよ。こんなところまで見る訳ないし、見てもきつと見なかった事にしてもらえますよ」

つぐみは苦笑いしながら言うつと恋が笑みを見せて言った。

「そうですね。態々クロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよね」

「おいおい姫路、たかが学園祭の喫茶店で営業妨害するバカはいないって」

瑞希が笑顔で言うつと光一が苦笑いして言った。

少なくとも、そんな事をするメリットは全然ないだろう。

「……………料理も完璧」

厨房から出てくる土屋君。

手に持っているお皿には、色んな種類のケーキが乗っている。

あ、おいしそう。

「突然、出てきますね」

亮君は康太を見て言った。
神出鬼没だね、本当に。

「土屋、厨房はどないや？」

「……………味見用」

深紅ちゃんが聞くと土屋はお盆を差し出した。
その上には、陶器のティーセットとケーキセットがあった。

「わぁ……………おいしそう」

「凄い」

瑞希ちゃんとあたしはケーキを見て目をキラキラさせて言う

「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの？」

「……………」

美波がそう聞くと土屋君は頷いた。

「では、遠慮なく頂こうかの」

「わたしも」

「あたしも」

「わっちもや」

「つぐみんが食べるならー」

「うちもそうしようつと」

「わたしもです」

瑞希ちゃん美波ちゃんと秀吉君とあたしと深紅ちゃんと優羽ちゃんと恋ちゃんは手を伸ばし、
ケーキを取り勢いよく頬張る。

「お、おいしいです！」

「ふわふわで甘みがあって美味しい〜」

「ふわふさスポンジみたいなのじゃ」

「凄く美味しい」

「後で、レシピでももらっとくで」

「美味しいです〜」

「すっごく美味しいね〜」

瑞希ちゃんが笑顔で言つと美波も笑顔で言い、秀吉君は感觸を確かめながら言つ。

深紅ちゃんは笑って言うと恋と優羽も笑みを見せて言った。
こんなに美味しいケーキは幸せだよ

「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、7人とも」

「あの、秀吉は男ですよ」

アキ君が笑顔で言うと亮君が苦笑いしてツッコミをいれていた。

「紅茶も美味しいです」

「本当ね〜……」

「幸せかも」

「はふ〜」

おいしさにトリップしているのか、4人の目がトロンと垂れた。
それを見て、光一、明久、ムッツリーニ、亮も食欲をそそられる。

「それじゃ僕も貰おうかな？」

「ああ。たまには甘い物もよさそうだ」

「……………（コクコク）」

「では、僕も」

さらに残ったケーキを、明久と光一と亮は一口食べた。

「へー、旨いな」

「だね！」

「みい姉は入らなかったみたいでなによりです」

久遠君が感心したように言うとアキ君は笑顔で言い、亮君は心底安心したように呟いた。

がらっ！

「こーちゃんっ！」

がばっ！

突如、186cmの少女がドアを開けて入ってきて土屋君に抱きついた。

「がふっ！」

抱きしめられたことにより、文月最強のバストサイズに挟まれて意識不明になりつつある土屋君がいた。

「はふうー、こーちゃん分があやうく不足するところだったよ」

そんな土屋君の状態に気づかないままスリスリしてる少女がいた。

はミルク多めのミルクティーのような色で、ふわふわした癖のあるロングヘア。
少し眠そうな表情が特徴的な美人ではあるものの、どこか幼い童女のような印象を与える。

「あ、相沢さん」

「土屋君が危ないですよ!？」

あたしと恋ちゃんが慌てて綾菜ちゃんに近寄ると

「ん? あ! 恋ちゃんとおぐちゃんだ」

そう言うとターゲットが恋ちゃんとあたしに変更されたのか、土屋君は床に置かれた。

ちなみに康太は鼻血まみれになっていたのは予断だ。

そして、あたし達は捕獲されてを抱きしめられた。

「はう、抱き心地がいいよう」

「むぎゆう!?!?」

綾菜ちゃんはスリスリとあたしを恋を抱きしめて至福の時にひたっていた。

「む、ムツツリーニ!! 大丈夫!？」

「あんな奴に抱きしめられたら、俺はやばいな」

「誰でも、やばいで」

アキ君がその間に慌てて土屋君に近寄る。

久遠君は呆然として自分の末路を思い浮かべると青ざめていた。そんな久遠君の肩を軽く叩いて深紅は言った。

「まずいですね。すぐに蘇生しなくてはっ」

亮君が土屋君の様子を見て言う。

そこまでやばいのか？

「ムツツリーニ！死ぬな！死ぬんじゃないっ！」

アキ君もかなり必死に土屋君の蘇生を手伝っていた。

この後、すぐに心臓マッサージをして土屋君を無事生還させた。

「紹介するね。この子は相沢綾菜ちゃんといって」

「こーちゃんの幼なじみなんだよお」

あたしは天使の抱擁から、なんとか脱出すると彼女のことを久遠君達に紹介した。

「ムツリーニの？」

「うん んで、将来の夢はこーちゃんのお嫁さん」

久遠君が聞くと綾菜ちゃんはニコニコと笑って言う。
どこか、ほんわか空気がながれる感じの彼女の一言に土屋君もある
いみブラツクリストにはいったとか。

「クラスはどこだっけ」

「Cクラスだよ？」

優羽ちゃんが首を傾げて聞くと綾菜ちゃんは笑顔で答えた。
多分、あちらの代表はかなり苦労してるだろうな。

第23問(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第二十一問

以下の問いに答えなさい。

【？】と【？】に当てはまる語を教えてください。

『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希と雨宮つぐみと桜木恋と姫路亮の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【other】（他人）です』

教師のコメント

その通りです。Motherから『M』がなくなるとother（他人）という単語になります。

こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

389

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

神埼深紅の答え

『マザー（母）から【車】を取ったら【普通】（他人）です』

久遠光一の答え

『マザー（母）から【距離】を取ったら【見知らぬ人】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

吉井君のお母様がどんな人が気になります。

神埼さんのお母様は車に乗ると豹変でもしそうな表現ですね

久遠君の家庭環境が気になります

第24問

光 side

「……綾菜」

「なーに、こーちゃん？」

意識が戻ったムツツリー二が口を開くと相沢は笑顔で言う。
すると、突然扉が開いて

「相沢さん！お願いだから、自分のクラスの出し物を手伝って！」

「あ、ともちゃんだ。むー、なごり惜しいけど。もう、行くね！」

「……ああ」

そう言うと相沢が振り向いて笑顔で言うと少し考えてから結論を出して立ち上がり、扉に向かう。

扉を見ると小山？がいて、相沢が笑顔で会話していた。

どこか疲れたような小山？の様子を感じるが、そのまま二人は出て行く。

「うーっす。あっちは終わったぞ」

受付の準備に行っていた雄二が着ているのはタキシードではなく、
牧師さんが着る様な黒い服に、胸元には口ザリオ、片手に聖書とい

う徹底ぶりだ。

なんでも、どうしてもタキシードは着たくないらしい。
ちなみに俺とムッツリーニはタキシードだ。

「ご苦労だった。喫茶店はいつでもいけるぜ？」

「ばっちりじゃ」

「……………紅茶とケーキも大丈夫」

俺がそう言っていると秀吉とムッツリーニも雄二にそう言った。
心配事もなく、準備万端の状態になった。

「よし、少しの間喫茶店は俺達に任せろ。光一と明久と神崎は、
—
回戦済ませてこい」

雄二は頷くと明久達を見てそう言った。

「もう、一回戦なんですか。皆さん、頑張ってくださいね！」

参加することを知っているので瑞希は笑顔で応援する。

「おっ」

「うん」

「姫路達も頑張るんやで」

光一と明久と深紅は頷いて答える。

「はい！」

「ところでさ、参加するってことは賞品が目的なの？」

瑞希が笑顔で答えると渚がふと気になって問いかける。

「そう言う事になるかな」

「あ、わっちは光一君と行く為やで」

「ぶっ！」

明久が苦笑いして言う。と深紅は笑顔で言い、光一は飲んでいたお茶を吹いた。

「く、久遠君。大丈夫!!？」

「あ、ああ」

つぐみは慌てて光一に近寄ってハンカチを渡す。

それを受け取り、口元を拭く。

「つぐみは……誰と行くつもり？」

「ふえ？」

「私も知りたいです、教えてくれませんか？」

美波がつぐみを見て問いかけると瑞希も賛同するように近寄って聞く。

「つぐみんはわたしと恋ちゃんと一緒に行くんだよ」

そこをフォローするように優羽が笑顔で言った。

それを聞いて少し安心したような表情を美波と瑞希はした。

「でも、これだとさ。二人は…むぐっ！」

「う、ウチ等が勝てばいいのよ」

「そ、そうですね！」

渚が何か言おうとすると美波と瑞希が渚の口を手で塞いで言った。チケットのことでしか、考えてないか不安になる状態だ。

「そろそろ、行くか」

「そっやね」

「うん」

光一が言うつと深紅と明久は頷いて教室を出て行く。

「さて、わたし達も行くかうか」

「そうですね」

「三人のチームワークを見せてやるう」

つぐみが笑顔で言うと桜木と遠月は頷いて教室から出て行く。

あ、ちなみにつぐみと桜木と遠月の場合はウェディングドレスだ。さて、俺達も行くか。

光一 side end

それから、校庭に作られた特設会場にて。

決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックによる準決勝の勝者で行われる。

明久と深紅と光一達はDブロックの為、決勝で当たる様には考慮されていた。

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。

三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会いを務めるのは数学の木内先生。当然勝負科目は数学となる。

「頑張ろうね、律子、加奈子」

「うん」

「あい！」

対戦相手の女子三人がうなずき会う。微笑ましい光景だ。

「……試験召喚サモンっ！」「……」

相手の三人が喚び声をあげると、お馴染みの魔方陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした形態を持つ試験召喚獣が喚び出された。

【Bクラス 岩下律子 数学 179点 & Bクラス 菊入真由美 数学 163点 & Bクラス 春宮加奈子 数学 189点】

「よし！召喚しよう！」

「はい！」

「了解」

つぐみが笑顔で言つと恋と優羽も笑顔で返事する。

「「「^{サモン}試獣召喚」」」

その声に導かれて現れるつぐみ達の召喚獣。

つぐみの召喚獣はうさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみをデフォルメした感じ。

武器はキャロットバトンを装備している。

優羽の召喚獣は猫耳と猫の尻尾を付けており、武器はクロー型の爪でデフォルメ化された感じだ。

とっても可愛らしい格好で、つぐみと揃うと癒し系コンビに見える。

恋の召喚獣は黒いマントを身に纏い、頭にカチューシャを着けて、瑞希の大剣を小さくしたようなのを二つつけたような、いわゆる両剣という奴を持ったデフォルメされた感じだ。

「か、可愛い」

「猫と兎…癒し系勢揃いじゃない!」

「抱きしめたい〜!!」

つぐみと優羽の召喚獣を見てそう相手側が叫んだ。

「つぐみんが可愛いの当然だよな」

「はい！それも反則急に可愛いですからね！」

どこか満足そうに優羽と恋は笑顔で言った。

【Fクラス 雨宮つぐみ 数学 138点 & Fクラス 桜木恋
数学 402点 & Fクラス 遠月優羽 数学 689点】

遅れてつぐみ達の点数が表示された。

優羽の点数と恋の点数に気後れしていたが、試合初めの合図がきた。

「では、始め！」

「律子！」

「真由美！」

「加奈子！」

「『行くわよ！』」

向こうの三人は名前を呼び合って頷きつぐみ達を挟みこむように移動してきた…が

「でもさ、つぐみんは私のだから輝くのかもね」

「いえ、つぐみちゃんは私の隣だから輝くんですよ」

「ふ、二人共!? 敵がきてるよ!!」

優羽が笑顔で言うと恋も笑顔で否定しながら言う。
それを見たつぐみが二人を止めようとするが、聞こえていないよう
だ。

「仲間割れ?」

「今なら!」

「行くよ!」

三人がそれに気づいて今のうちにと攻撃しようとする

「邪魔です!」

優羽の猫パンチと恋の剣の攻撃で三体の召喚獣が一瞬で消滅した。
あまりにも早い時間で。

「しよ、勝者、雨宮・桜木・遠月チーム」

木内先生は勝者の名を告げる。とりあえず一回戦は突破したことになる。

この後、つぐみによって恋と優羽はこっぴど叱られたようだ。

第24問(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

学園祭 アンケート？

学園祭においての雰囲気において似合っている出し物が何なのか意見を述べよ。

姫路 瑞希&雨宮つぐみの答え

『活気にあふれ生徒が生き生きと働く出店等』

教師のコメント

生徒が元気よく接客や売り子をしている様子はとても学園祭らしいと思います。

土屋 康太の答え

『女子生徒が売りをしている様子』

教師のコメント

あなたがいうと犯罪臭く感じるのは何故でしょうか？

遠月 優羽の答え

『コスプレ！！！！可愛くて際どいコスプレ誰がなんと言おうがコスプレ』

教師のコメント
そうですか

久遠光一の答え
「普通に喫茶店とか」

教師のコメント
なるほど、普通が一番ということですね。

神埼深紅の答え
『射的場やる！』

教師のコメント
それは貴女がしたいだけなのでは？

第25問(前書き)

内容を変更しました!!

第25問

姫路亮 side

「気合充分でいったの」

隣にいる秀吉がぼそつと呟く。

明久と雄二を見送った僕らには僕らで店の開店という準備がある。

「ワシらも鬩いを始めるとするかの」

廊下の外をみると、そろそろとお客さんが来る。

丁度、開店準備も終わり、いつでも受け入れられる体制だ。

「皆さん！2-Fのウエディング喫茶で結婚してみませんか？」

僕は外で受付の人が呼びかける。

ちらほらと僕らの教会が覗かれる。それに笑顔で対応する。

みい姉を見張る為にも、ホールにも回してもらえようにしたけど、女装することになるなんてショックですけどね。

「お、おい、あの子可愛くないか」

「めっちゃタイプだぜ……」

秀吉は男を呼び寄せる芳香剤なんですよね。

にこつと笑う笑顔は、男だって分かっている人でもドキッとする
ことがあるそうです。

え？僕はないですよ

「旦那様二名がお帰りです」

「ではまたの」

バージンロードを意識して作られた赤い絨毯のうえを秀吉が歩く。お客が男性なら女子が、女性なら男性がエスコートするという仕組みだ。

ただこのクラスは女子の数が少ない。従って

「旦那様、三名がお帰りです。りょうこねえ、お願い」

男子が女装をしている。僕と明久は真つ先に白羽の矢がたった。

光一はしなくていいみたいですけどね。

秀吉が妹、明久あきちゃんが幼馴染、僕が姉という役割だから大丈夫！というのがみんなの意見。

なにが大丈夫なのかさっぱりわかりませんよ。

僕と秀吉は休むことなく動きっぱなしです。まったく、いつの時代も男の欲望は恐ろしいですね。

お客さんも満杯になり始めた頃です、

二人の男、片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカンといつ見ても面白い髪形。

もう一方は百七十五センチくらいなつかわの体格で、こちらは丸坊主。

一つ上の先輩で夏川俊平しゅんへいと常村勇作つねむらゆうさくです。

あ！覚えにくい人は、『夏坊主、常モヒカン』と覚えましょうね？

「おら、客だぞ！案内しねえか！！」

秀吉がちよいつとドレスをつまみ、愛想よく彼らに向かいます。

「申し訳ありません、旦那様がた。すぐさま席にご案内します」

秀吉は演技が得意ですから、尊敬できますね。

僕も見習うべきでしょうか？

「神崎が用意した机の場所に案内したんですか？」

「うむ。神崎がその方が良いと言ったのでな」

僕は戻ってきた秀吉に言うと言うと秀吉はすぐに肯定した。

恐らく、盗聴返しをして何かを知ったのかもしれないね。

秀吉の案内した席。

あそこだけは普通の机なんです。

特に豪華にしたわけではないけど、ケチを付けられる心配も無いんです。

珍しそうに部屋中を見るお客さんとは違い、あの先輩達は何かしようつしていますね。

「おい、その女！」

僕のことのようですね。

「なんででしょうか、旦那様」

どうしてもメイド喫茶のような感じがしますね。そんな気持ちを抑えながら奴らに近づく。

ん？ なぜ夏川は顔を赤らめているのでしょうか？

「じ、じ」

「じ？」

鶏の真似でもしているのでしょうか？

だとしたらそれはコケッコッココーであり、コではないですよね。

「コ、コーヒー二つ」

「かしこまりました」

注文のようですね。

かるやかにドレスを持ち上げて僕は言うに戻ります。

「な、夏川！ 暴れるんじゃないのかよ！？」

「ファーストインパクトは大切」

おや？何やら会話していますね？

どうしたのでしょうか。

「何をいつておるのじゃろうか」

「さあ？」

秀吉も不思議そうに言うので僕は首をかしげて答えます。

他のお客さんに注文を聞きながらも、秀吉とすれ違う度に情報を交

換します。

おかしい、深紅さんの情報と合わないのはなぜでしょう？

「お、おい！」

秀吉とアイコンタクトを交わし、僕が対応に向かいました。

秀吉にはドアの近くに待機してもらって、

クレーム処理のためにすぐに光一達を呼びに行ってもらうつもりですからね。

「お、お、お、」

「お？」

未だ顔を赤くしている夏川先輩。

座っているため、頭皮まで赤くなっているのが見える。

ふと震える手元をみると、コーヒーに虫が入っていました。なるほど、言いたいことは分かりましたよ。

「（秀吉）」

「（了解じゃ）」

再びアイコンタクトを交わし、秀吉は出口のドアを開けた。

「お、お会計をお願いします！！」

ガンー！！

秀吉が足を滑らし、地面に倒れる音がしました。

「お、おい、あの子のパンツ見えるんじゃないか」

「も、萌えー」

教室内がざわめく。

お客さんは可愛いお嫁さんが倒れこむ姿に、クラスメイトは秀吉の希少な姿にそれぞれ驚いた。

「か、かしこまりました」

僕のほうを見て手を振りながら去っていく夏川先輩と、夏川先輩の肩を大きく揺さぶる常村先輩。

「コーヒー二杯で四百円になります」

「「言つてらっしゃいませ、旦那様」」

またまた、情報が違うんですけど。何もしていかなかったのはなんでなんですかね？

いや、されても嫌ですけど。

隣に居る常村が夏川の心配をしていたから、具合でも悪かったのでしょうかね。

とにかく、警戒することにしたことはないですね
そんな奴らが行った方と逆から聞こえてくる足音。

あ、つぐみちゃんと恋ちゃんと優羽ちゃん達のようにですね

亮side end

光一、明久、深紅のチームの方では

科目はおなじく数学となっていた。

「頑張ろうね、光一」

「ああ、お互いにな」

「仲よろしゅうおすな」

明久が光一に言うのと光一は頷いて言うのと深紅はにっこり笑って眺めていた。

そして光一と明久と深紅が会場に上がり、相手と対峙。
対戦相手は、2・Eの中林宏美と三上美子と萩原みかん。

「げっ、久遠光一とあの女帝となの!?!」

「危険すぎますわ!?!」

中林が深紅に怯んで言うときみかんが青ざめながら言った。

「いったい何をしたんだいと聞きたいような気分にかられる光一と明久だった。」

「女帝とは失礼やな。そんなつもりこれっぽっちもあらへんに」

「ま、まあいいわ。一番弱そうな奴から狙うことにしましょう」

深紅が不機嫌そうに言うとき中林は相棒達にそう伝えると二人は黙っ

て頷いた。

「では、始めてください」

「サモン試獣召喚！」

六人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した。

光一はモデルガンを構えて引き金を引いてのキーワードを言うと光一の召喚獣が姿を現す。

毛皮のジャケットに、黒いスラックスに編み上げブーツ、そして右手にはライフルで

左手にショットガンを持ったデフォルメされた光一だ。

明久の場合は変身するポーズをとっての召喚だった。

姿は学ランに木刀という装備でデフォルメされた明久だ。

深紅の場合は扇を出して手首にスナップきかせて舞うようにしての召喚だ。

姿は赤いドレスに歪な剣の装備したデフォルメされた深紅だ。

そして相手側はは普通に召喚する。

球のプロテクターを纏い、ミットとバットを持つ中林の召喚獣。

白いローブをまとい、手に本を持った三上の召喚獣

黒いローブを身にまとい宝石がついた杖をもつ萩原の召喚獣がEクラスチームとして姿を現す。

《Fクラス 久遠光一 数学 135点 & Fクラス 吉井明久
数学 77点 & Fクラス 神埼深紅 数学 230点》

VS

《Eクラス 中林宏美 数学 95点 & Eクラス 三上美子
数学 85点 & Eクラス 萩原みかん 数学 190点》

「んじゃ、明久は三上だっけ？そいつと戦っててくれ」

「わかったよ」

「なら、わっちは萩原やね。あの点数ということは得意科目なんや
ろ」

光一は明久に言うと深紅はどこかわくわくしたように笑って言う。

「こつちを無視するな！」

冷静さを失いそうになるが光一に向かって自分の召喚獣を動かして
突撃させた。

「はあ、やれやれ…大人しくしてる」

そう言うと、ライフルをかまえて相手の召喚獣の足を撃った。

「なっ！？」

「Aクラスにこそ負けたけど、BやDとお前ら以上の相手と戦って
きたんだ。」

それにそれ以上に強い相手とも戦ったことあるから、お前らごとき敵じゃないんだよ」

中林が驚くと光一は相手をまっすぐ見つめてなんでもないように言っただ。

Eは基本部活中心の生徒が多く、試験召喚戦争に対して興味はないのだ。

だから、Fクラスの主戦力や光一の戦い方を知らない。

「えい、やあ！」

「全然当たらないよ！」

三上の召喚獣を攻撃を上手にいなして相手の召喚獣の腹や腕に攻撃を叩きこむ。

操作になれている明久ならではの戦いだ。

深紅はというと

「なんや、期待はずれやな。これで S c a c c o m a t t o y a」

チエックメイト

「そ、そんなあ！」

深紅はつまらなそうに言うど歪な剣で相手の召喚獣を切り裂いた。相手が落ち込み座りこむ。

「あつちも終わったみたいだな」

「光一、もういいよ」

光一は明久の声に頷くと自分の召喚獣に指示をして中林と三上の召喚獣の頭をショットガンで撃ち抜いた。

「俺の弾丸は、絶対をもって敵を撃ち抜く」

そう笑って光一が言った。

「勝者、久遠&吉井&神埼チーム」

立ち会いの教師により勝者が告げられ、敵側のチームは膝をつく。明久と光一と深紅は、勝者らしく余裕ある佇まいでその場を去っていく。

「俺達最強チームだな」

「光一と神埼さんがね」

「いや、吉井も強いと思うで」

光一が呟くと明久が苦笑いして言うと深紅は笑顔で言っって一同教室に向かう。

第25問(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

第26問

「どうした？」

光一が不思議そうに聞くので

「常夏コンビが来たのじゃが、何もせずに帰っていったのじゃ」

「なんだそりゃ」

秀吉が僕の代わりに答えてくれました。
それを聞いた光一は呆れながら言いました。

「それより、お疲れ様です」

「そんなに疲れてへんよ。にしても、どうして情報と違う行動をしたんやろ」

僕が笑顔で言うと深紅は笑顔で言い、悩みながら呟いた。

「ま、いいじゃん。何もされなかっただけでも」

「そうだな。こっちは一回戦に勝利したしな」

明久は笑顔で言うと光一も笑顔で言った。

「勝てたんですか、おめでとつございます」

「あれ？ みんな何してるの？」

僕は笑顔で言うつつぐみの声が聞こえたので振り向きまして。すると、恋ちゃんと優羽ちゃんとみい姉と渚ちゃんと美波達が揃っていました。

「おかえり、美波に瑞希と渚さん。つぐみに恋に優羽ちゃん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

「こっちも勝てたよ！」

瑞希がVサインをして言う。

つぐみも笑顔で言う。

もともと内気な性格のみい姉ですけど、今回は話が別です。勝ちにこだわるのは当然でしょう。

「……雄二、お客様」

「翔子さん、いらっしやい」

ひしつと雄二の腕を抱く翔子さん。

その行動に忍者の末裔じゃないかと感じるときがあります。

「しょ、翔子！ 何故お前がここにいる！？」

いや、それよりも何故ウエディングドレスを着ている！？」

「……雄二、タキシードはどっ」

驚きながら雄二が言うけど、聞かないままキヨロキヨロと周りを見て聞く。

「あっちだよ、翔子さん」

「……ありがとう、亮」

僕が笑顔で言うと言嬉しそうに翔子さんは笑った。

「亮！ てめえ、覚えとけよ！」

結婚に一途な彼女を見送って、結婚に頑なな雄二を見捨てて、僕らは教会の中へと戻っていった。

つぐみ side

来店する二人のカップルは、片方はドレス、片方はタキシードととてもお似合いだ。

「お客様、結婚式場はお決まりでしょうか」

「……こちらで」

優羽ちゃんが笑顔で相手をすると霧島さんが即答した。

「ちょっと待ってーらあー！」

「雄二、タキシードに縄なんて似合わないよ」

坂本君はどこか不満なのか叫んでいた。

霧島さん：縄で縛るのはどうかと思うよ、うん。

「明久、俺が本気でこんな格好をしてると思うか」

「じゃあ翔子さんとの交際は遊びって事！？ それは人としてダメですよ」

アキ君に坂本君が言っていると亮君が驚きながら言った。
結構楽しんでる？

「いいかげん、素直になりやーいいのに」

「縄で縛られて素直になれるかーっ！！」

久遠君が呆れながら言っていると坂本君は大声で叫んだ。

「瑞希、もうすぐ二回戦の時間よ」

美波ちゃんが、部屋に飾られたキラキラと輝く時計を見てそういった。時刻は十時四十分。

あたし達の二回戦は十一時からだからあともう少し余裕がある。

アキ君達のは十二時からだから、少し余裕があるんだよね。

「代表！ もう、結構探したんだからね」

そう言っ教室内に入ってくるのは久遠君と渚ちゃんの幼なじみの

木下優子さん。

凜とした態度のお姉さんは、秀吉君を見つけるやいなや、心の底から嫌そうな目に変わった。

「あんだ、女装はやめなさいって言ったわよね」

「姉上、これは仕方なくじゃ」

優子さんが秀吉君を見て言うと秀吉君は困ったように笑いながら伝える。

「まあまあ、落ち着け。優子」

「そっだよ、優子」

それを見た渚ちゃんと久遠君が苦笑いしながら宥めにかかる。

「光一に渚、その格好」

「あ、これが。いいんだ、どうせ似合わないんだろう」

呆然としたように優子ちゃんが久遠君を見て言う。

若干優子さんの頬が赤いように見える。

見違えたのかな？

「そ、そんなことないわよ。ちゃんと似合ってる」

「…あ、ありがとう」

優子さんが慌てて言うと少し照れたように久遠君がお礼を言った。

なんだか、良い雰囲気？

「あ、後でAクラスのメイド喫茶に来なさいよ！ ほら、いくよ代表！」

「……雄二、また」

なんだか落ち着かないように言うと優子さんは霧島さんを連れて教室を出て行った。

「あ、そろそろ行くっ！」

「もう二回戦目が始まるね！」

「急ぎましょっ！」

あたしと優羽ちゃんと恋ちゃんの三人でステージのある校庭に向かった。

第26問(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

第27問(前書き)

戦闘描写は本当に苦手です

うーん…他ので見て勉強するべきでしょっつかね

第27問

二回戦目

「それでは、二回戦を始めてください」

忙しいクラスを手伝った後は急いで特設ステージに向かい、試合会場にいるわけで。

「相手はBクラス代表とCクラス代表と誰だろ？」

「ちよっ、優羽ちゃん」

つぐみは焦って優羽の服の裾を掴む。

上目遣い&低身長なのでこれは慣れてないとかかなりキツイ。

「と、遠月に雨宮に桜木！！お前等が二回戦目の相手か」

つぐみ達を見て戦慄しているのはBクラスの根本だった。

そしてパートナーは

「ちよっと根本君？なにビビッてるのよ？」

小山さんは呆れながら言っている。

「二人は別れたんじゃないのですか？」

「別れたわよ？でも、召喚大会にどうしても出場して私とのヨリを戻したいみたいなのよ」

「ちなみ、あたいは付き添い」

どっと疲れたような表情で小山さんは言う知らない少女は笑顔で言う。

それに、今回の立会人は、英語担当の遠藤先生みたいだ。

「サモン試獣召喚！」

この場に居る四人の生徒の召喚獣が出現する。

【Bクラス 根本恭二 英語W 199点 & Cクラス 小山友香 英語W 165点
& Bクラス 青山晴香 英語W 169点】

流石BクラスとCクラスの代表とその隊員だね。点数も立派なものだ。

【Fクラス 遠月優羽 英語W 569点 & Fクラス 雨宮つぐみ 英語W 146点
& Fクラス 桜木恋 英語W 458点】

つぐみ以外の二人はかなり点数が高いようだ。

「じゃあ、行くよ」

「覚悟してくださいね」

「負けられないからね」

優羽が笑顔で言うと恋も笑顔で言い、その次につぐみが真剣な感じ
で言う。

「わたし達の負けでいいわよ」

「え？」

「へ？」

小山さんはあっさりと言う、なぜだろうか。

「あの、なんですか？」

「貴女達、相沢さんの知り合いでしょ？ 同じように苦労してるみ
たいだからね」

恋ちゃんが尋ねると小山さんが苦笑いして言った。
綾菜関連だと、真面目なキャラや小山さんみたいな人はみんな苦労
するらしい。

「お、おい！友香！なんで」

小山さんは遠藤先生に近寄って話かけると何かを話してから、
こちらに来てつぐみの頭を撫でると去って行くこうとする。

「おい！待ってくれよー！！」

「根本っち、あたいと付き合う約束は？」

慌てて根本は小山を追いかけると青山さんが不機嫌そうに追いかける。

つぐみと明久と遠藤先生は啞然としていたが、ハッと我に返り、

「勝者　Fクラスの雨宮&遠月&桜木チーム！」

「つぐみん、なんか。わからないけど、帰ろう？」

「そ、そうだね」

「釈然としませんね」

釈然としないままあたし達の二回戦は幕を閉じた。

深紅視点)

「トーナメントを見ると次はCクラスコンビやね」

「点数平気か？」

「大丈夫や」

雄二と深紅は二回戦目のステージに向かったのだ。そこには・・・遠藤先生がいた。

「二回戦目を始めてください」

「『『『『試^{サモン}獣召喚！』』』』」

おなじみの幾何学模様の魔方陣から召喚獣が姿を現す。

【Cクラス 黒崎トオル 英語W 125点 & Cクラス 野口
一心 英語W 167点
& Cクラス 原田薫 英語W 126点】

相手の召喚獣の点数を見て光一君がぴゅーと口笛を吹いたで。
わっち？わっちは全然平気やで

【Fクラス 吉井明久 英語W 122点 & Fクラス 神埼深紅
英語W 234点
& Fクラス 久遠光一 英語W 180点】

「神埼さんと光一、点数高いね？」

「わっち、英語は得意な方なんよ」

「俺も英語は得意だからな」

吉井がわっちを見て聞くので笑顔で答えたで

「そつえば、そつだったね」

吉井はわっちの物理の点数を思い出して苦笑した。

「くらえー！」

敵の召喚獣が吉井に攻撃するが、かわして吉井は自分の召喚獣を動かす。

相手の召喚獣に木刀で叩きこむ。

「やりますなあ」

「よそ見してる場合かよ！」

「おっと、わっちに触れるとやけどしますえ」

赤いドレスをまとったわっちの召喚獣は歪な剣で相手の攻撃をいなして、かわす。

敵は避けられた為に大きく横に薙いでくるがわっちは距離を測って小さく後退する。

「俺もやるかね」

光一君は意気込んで言うと召喚獣を動かしてショットガンで相手の足を撃ち抜く。

うーん、いつ見てもええわ

「さて、わっちもはんなり行きますえ？」

「う、うわ！？」

ここで攻撃に転じて相手の点数を削って行く。

「とどめー！」

「そんなんっ」

吉井の召喚獣は拳を敵の召喚獣に叩きこんで終了や。

「はあっ！」

「くっそ〜」

わっちの召喚獣は舞うように戦い、相手の召喚獣を剣でとどめの一撃をくらわした。

「こんなもんか」

「あー、負けたか」

光一君も相手の召喚獣にショットガンを向けて撃ちこむと終了したで

431

「しよ、勝者。久遠&神埼&吉井チーム!!!」

「俺達」

「最強」

「無敵や」

わっちら、3人で笑顔でハイタッチして笑いあうと、会場から去る。遠藤先生は似た物同士なのだろうか？と考えていたとか。

第27問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

光一の点数を変更しました！！

第28問（前書き）

LAN武さんからお借りしたキャラを出演させてみました！

なんというかオリジナルだらけで怒られないか不安ですが。

読んでくれると嬉しいです！

第28問

文月学園校舎へと続く坂道を文月学園の制服に身を包んだ青年が懐かしそうに校舎を眺めていた。

「……………！！……………！（りゅうくん！しろちゃん！）」

「お、芹待つててくれたのか」

「わうん、お姉さまああ〜」

芹と呼ばれた少女は笑顔で青年に近寄る。

この少女の名前は瀬川芹香せがわ せりかという。

芹香の背は凡そ158センチ位だろうか？

長身とは言えないがスタイルは良い。

黒と言うより濡れ羽色と言えるその髪は腰より下まで伸びており、

それをポニーテールに纏めている。

少々吊り目気味の顔は愛嬌のある笑顔を浮かべており、

何よりも驚くべきことは大きめの制服ですら隠しきれない瑞希より

大きなその胸である。

もう一人は芹香の恋人で『兄貴』といわれて頼られる存在の青年だ。

身長は2メートルジャストくらいだろう。

長身で相沢綾菜よりは大きいだろう。

髪は黒で首の後ろで結んでいる。容姿も頼もしく体格も良い

趣味は西村教諭と同じく身体を鍛えることとトリアスロンだということだ。

名前は榊龍星さかきりゅうせい。

その隣にいるのは榊龍星の従妹で榊白姫なにかきろくひめという。すわりとした長身で胸は翔子より少し小さい位。髪は薄い青で肩までのショートカット。見た目はクールだけど甘えん坊な少女だ。とても美人でかなり人気がでそうな雰囲気がある。ちなみに今、芹香に抱きついているのが白姫だ。

「……………!? (にやあああつ!??)」

「ちょ、シロ!? 落ち着け!」

スパコーン!!

抱きつかれた芹香は叫ぶと龍星が慌ててハリセンを取り出して白姫の頭を叩いた。

そのさいハリセンには『落ち着きなはれ!』とかかれていたとか。

数分後、落ち着いた白姫を伴い。

芹香の案内で学校に入り、Fクラスの方へと向かうことにした。

Fクラスに入ると

「いらっしやいませ、奥さま、旦那様」

つぐみがウェディングドレスを着て出迎えた。するとシーンと周りが静かになり

「…………… (つぐちゃん、可愛い)」

「わうん、可愛いすぎますわ〜」

「え、え！？ちよつ、ふえええ！！？」

芹香と犬耳&犬尻尾モードの白姫に抱きしめられてつぐみは驚いて叫んでいた。

ただ、白姫のパンツがまる見えなのが危険だったりする。その声に驚いた明久が慌ててきた。

「どうしたの、つぐみって…龍！？」

「よう、明久。久しぶりだな」

明久は龍星がいることに驚いて言うと龍星は笑って言う。

「吉井君、どうかしましたって龍兄！？」

「みい姉、走るとこけまっ…龍兄さん！？」

「瑞希も亮君もいきなりどうしたんですって…龍星さん！？」

一番上から瑞希、その次に亮がきてそのまた次に恋が来て驚いていた。

「瑞希と亮と恋も久しぶりだな。てか、驚きすぎだろ」

「…あ、すみません」「」

苦笑いしながら龍星が言うとはっとなってすぐに謝る瑞希と亮と恋

がいた。

この後、まだ暴走してる白姫を龍星がハリセンで叩いて正気に戻す作業が行われたとか。

その際にハリセンには『ええかげん目を覚ませ！』と書かれていたとか？

数分後…

「はあ、驚いたけど。久しぶりだね、龍星君、芹香ちゃん、シロちゃん」

「はいなのですわ」

「……………？（うん、久しぶりだね？）」

「確かに、久しぶりだな」

つぐみは落ち着くと笑顔で言い、白姫と芹香と龍星は笑顔で答える。

「にしても、驚いたで」

「だな、姫路達と桜木の幼なじみだとは」

タキシードを着た光一とウェディングドレスを着た深紅が笑顔で笑いあっていた。

なぜか、お似合いに見える二人だ。

「ところで、二人はどんな関係なの？」

「芹とか？恋人同士だな」

優羽もウエディングドレスを着ていて龍星に尋ねると答えた。

すると…

ザッ！

「龍星君に攻撃したら、デザート無しだよ？」

「私とつぐみちゃんが作ったデザート欲しくないんですか？」

立ち上がるFFF団を牽制するようにつぐみと恋がむうとした表情で言う。

それ聞いたFFF団はすぐに自分達の作業に戻る。

これには龍星も明久も光一も呆れていた。

「龍は僕達の幼なじみでもあるけどね」

「そうだな。明久の幼なじみは俺にとっても幼なじみだし」

明久は笑顔で言うと龍星も頷いてつぐみを肩に載せて頭を撫でていく。

「はづう／＼／／／」

「……………（りゅうくんの頭なでなでは気持ちいいんだよね）」

子供扱いはされたくないけど、どうもなにも言えないつぐみがあり、それをニコニコと笑みを見せて眺める芹香がいた。

「ところで、もう身体はいいの？」

「ああ、もう完治して復学して良いようになったんだ」

明久が聞くと龍星はすぐに答えた。

それを聞いた瑞希と明久とつぐみと亮と恋は安堵していた。

「それを聞いて安心しました」

「ですね、僕達にとって龍星さんはお兄さんですし」

「はい！最初は凄く心配しましたし」

瑞希が笑顔で言うと亮も笑顔で頷いて恋も同意するように呟く。

「ところで、龍星君。その子は？」

「ああ、従姉妹の白姫だ」

「初めましてですわ！榊白姫ですの！シロと呼んでくださいませ」

つぐみは隣に座っている白姫を見て龍星に聞くと龍星が紹介して白姫はにっこり笑って答えた。

「明久の知り合いか」

「雄二、頼むから問題起こすなよ」

「そつやで、そつでなくとも試召戦争のこと許したわけやないんやで？」

何か考え込む雄二に光一と深紅が釘をさしていた。

第28問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

なんというグダグダ！！

読みにくくないか、凄く不安です（滝汗）

恋は瑞希の幼なじみだから、こつこつ会話もあり…ですかね？
もっともっと光一達の活躍を増やさなくては！！

第29問 自己紹介と葉月ちゃん登場！（前書き）

今回は葉月ちゃんを登場させてからませてみました！

第29問 自己紹介と葉月ちゃん登場！

芹香 side

「とりあえず、自己紹介しないか？」

りゅうくんがみんなを見てそう言った。

「そうだね。じゃあ、まずは」

明くんが頷いて周りを見ると

「じゃあ、わつちからやね。わつちは神埼深紅や！よろしゅうな
んで、こっちは相棒でありライバルの」

「久遠光一だ。よろしく頼む」

深紅ちゃんが笑顔でりゅうくんに手をだして握手をもとめると笑顔で隣にいる方を見て紹介した。
光くんも笑みをみせて自己紹介した。

「俺は榊龍星だ。よろしゅうな、神埼ちゃんに久遠」

りゅうくんも笑顔で言う二人と握手をした。

「……………？（私は瀬川芹香です、よろしゅうな？）」

「おん よろしゅうな、榊に芹香」

「よろしくな、榊に瀬川」

私もりゅうくんを見習って笑顔で握手したら深紅ちゃんと光くんが笑顔で握手を返してくれた。

次はしろちゃんだね

「改めまして、榊白姫ですの！お兄様とは従姉妹ですの 皆様、どうぞよろしくですわ」

「かわええー！！わっちの妹にならへん？」

しろちゃんが笑顔で自己紹介すると深紅ちゃんがむぎゅと抱きしめていた。

あ、しろちゃん。大丈夫かな！？

「わふ〜／＼／恥ずかしいですの。はい、深紅お姉ちゃん私のことはシロと呼んでくださいな」

「了解や。よしよし、シロはかわええな〜」

あれ、幻視でしろちゃんの頭の上に犬耳が見えるのは気のせいかな？
深紅ちゃんは笑顔でしろちゃんの頭を撫でている。
ほんわかとするね。

ところで、土屋君はなんで写真を撮ってるんだらう？

「落ち着け、深紅」

「あ、やってもうた」

光くんに言われて深紅ちゃんは苦笑いしながら離れるとしろちゃんは少し残念そう。

「俺は久遠光一だ、よろしくな。えっと」

「シロでいいですわ 光一さん」

光くんがしろちゃんに笑顔で自己紹介して呼び方に困ってるとしろちゃんが笑顔で言う。

「初めまして、とわなきせ永久渚です」

「よろしくな。永久ちゃん、俺は榊龍星だ」

「……………!!……………? (初めまして、瀬川芹香です!よろしくね、渚ちゃん?)」

「初めまして、榊白姫ですの。シロと呼んでくださいな」

渚ちゃんが笑顔で自己紹介するとりゅうくと私としろちゃんも笑顔で答えます。

仲良くなれるといいな

「私は遠月優羽だよ つぐみん親衛隊の会員なんだから!」

「おう、よろしくな。遠月ちゃん 俺は榊龍星だ」

「……………? (はじめまして、瀬川芹香です。よろしくね、優ちゃん?)」

「はじめましてですわ！榊白姫ですの！シロと呼んでくださいな」
「優ちゃんとも笑顔で自己紹介をしたよ。」

「これで自己紹介は終わりかな？」

「……………終了した」

つぐみちゃんが小首をかしげて言うと土屋君が来て呟いた。

芹香 side end

龍星 side

自己紹介が終わって数分後

「ところで、亮。秀吉は？」

「あ、演劇部にあいているテーブルがないか調べに行ってもらってるんです」

明久が亮に尋ねると亮は思い出したように答えた。

「アキ君、何があったんだろうね」

「わからないよ、でも儲かる分には問題ないんじゃないかな？」

つぐみがそれを聞いて不思議そうにしながら明久に聞くと苦笑いしながら言う。

そんな俺たちの後ろから人波を掻き分けてくる一つの集団があった。前、同じクラスだった秀吉と他に男子数名が立派なテーブルを運んでいる。

あれは……演劇部で使っている大道具のテーブルか。

「明久に雄二よ、ちょうどよかった。後の人数が足りておらんのだよ、手伝いに行ってくれんか」

「了解！」

秀吉に言われて明久と雄二が手伝いに向かった。

テーブルのすぐ横を通り二つ目のテーブルを探す。走った距離はクラス二つ分くらいだろうか。

さっきの半分くらいの人数で同じ位の大きさのテーブルを運ぶ男の集団と、

その上にちょこんと座る小さな女の子の姿。まるで家来とお姫様みたいだ。

「あつ！ バカなお兄ちゃんです！」

小さな女の子はそう言ってテーブルから降りると明久に抱きついた。

「うわつとど。あれ？ 君、どこかで……」

明久が小さな女の子を見て優しく引き剥がすと何か考えるように呟く。

「……………？（あれ、もしかして……………葉月ちゃん？）」

芹は見覚えがあるのか小さな女の子に近寄ると言う。

「あ、すつごくお胸が大きいお姉ちゃんです！」

「……………（お、お胸つて／＼／＼）」

そう言つて今度は芹に抱きついてきた。

芹と知り合いなのか。

そつえば、小さな女の子と出会つたと言つてたな。

この子が葉月ちゃんなわけだな。

「もしかして、ぬいぐるみの子か？」

「鉄砲のお兄ちゃんもいたです！」

久遠が思い出すように言つと葉月ちゃんは久遠を見て笑顔で言う。

「あんときのちびっこやない、元気しとる？」

「お花のお姉ちゃん！はいです、葉月は元気してました！」

お姉ちゃんからもらったお花も元気です！！」

神崎ちゃんは久遠の横から出て葉月ちゃんの頭を撫でると葉月ちゃんがとても嬉しそつな笑顔で言つた。

「そりゃ、良かったで」

神崎ちゃんはとても嬉しそつに笑つて言つた。

「ああ！？ あの時の、ぬいぐるみの子だよね？」

「はいです！ 葉月です！」

思い出してもらえて嬉しいのか、再び笑顔になる葉月ちゃん。

「久しぶりだね。あのぬいぐるみたちは元気かな？」

「はいです！」

きれいなお姉ちゃん達とつぐみちゃんとすつごくお胸が大きいお姉ちゃんにもらった子も元気です！」

明久が笑顔で言うつと葉月ちゃんは笑顔で言うつ。
とつても嬉しそうだ。

「葉月ちゃん、こんにちは あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですつ！ 毎日一緒に寝てますです！」

元気よく答える葉月ちゃんに、瑞希も嬉しそうに微笑む。

「よかった。気に入ってくれたんだ」

「気に入ってくれたようだなによりです」

「良かったですね、みい姉、恋ちゃん」

嬉しそうな様子の瑞希と恋を見て、亮も優しく微笑む。

「?皆して何してるのよ?」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよ!」

戸口から入ってくると葉月ちゃんが島田に気づいて嬉しそうに言う。

「あ、葉月。いらっしやい 迷わずに来れたかしら?」

「うん お兄ちゃん達がテーブルの上に乗せてくれたからっ」

島田が笑顔で言うと葉月ちゃんは笑顔で返事して言った。

「あんたら、葉月に変なことしなかったでしょうね」

島田はそれを聞いて葉月ちゃんを抱き上げて睨みながら言った。

「馬鹿者! 女の子の応援で俺たちは力が沸くんだ!」

「幼女は愛すもんじゃない、愛でるもんだ!」

「今だからこそ変なことをするんだ!」

三人中二人の発言が完全にアウトだ。だめだ、このクラス。てか、つぐみに危機が迫ってる気がするぞ。

「美波、葉月ちゃんと知り合いなの?」

「知り合いも何も、ウチの妹だもの。アキこそ葉月と知り合いなの?」

「去年ちよつとね。でも姉妹が、確かに目の感じや、髪の色が似てるね。」

そう言いながら、葉月ちゃんの頭を撫でる明久。

「あれ、皆してどうしたのって、葉月ちゃん!？」

その時、ちよつと他の手伝いを終えたつぐみが戻ってきて驚いた。

「つぐみちゃんです! こんにちはわです!」

元気よく返事する葉月ちゃんを見て

「ウチの妹、つぐみとも知り合いなの? えーと、世間は狭い……だったかしら?」

「え? 葉月ちゃんって、美波ちゃんの妹なの?」

島田が驚いてから悩みながら呟くとつぐみが驚きながら聞いた。

「はいですっ! 島田葉月です! よろしくです、つぐみちゃん!」

そして元気よく挨拶する葉月ちゃん。

「そうなんだ、こちらこそ。よろしく……ね?」

つぐみが笑顔で言い、視線を合わせようとするとわずかに上向きになった。

「は、葉月ちゃん。もしかして……背、伸びた?」

「はいです！　—センチ伸びたので、139センチになったです！」

おずおずと聞くと葉月ちゃんは満面の笑みで言う。

それを聞いたつぐみがまっ白になっていた。

第29問 自己紹介と葉月ちゃん登場！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！

第30問 Aクラスへと偵察だよ！

光 side

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？ どんな話なの？」

葉月ちゃんが島田を見て笑顔で言うと島田が不思議そうに聞いた。

「えっとね、ウエディング喫茶に可愛い黒髪の花嫁がいるって」

その瞬間亮の動きが止まった。

「亮君、どうしました？」

「な、なんでもないですよ？」

桜木が不思議そうに聞くと亮は苦笑いしながら言う。
いや、なんでもないようには見えないんだが。

「亮の奴どうしたんだ？」

「さあ？」

不思議そうに明久と雄二もテーブルを運びながら呟き合っ。
そんな明久のズボンを引っ張る葉月ちゃんが居た。

「お兄ちゃん、それ運んだら葉月と一緒に遊びにいこう」

上目づかいで見上げる様子に明久は困ったように笑う。

「ごめんね、葉月ちゃん。」

お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

「むー。折角会いに来たのにー」

明久が謝るとむくれながら葉月ちゃんが言う。

「いいぞ、遊んできても」

「いいの、坂本君？」

雄二が明久を見て言うにつぐみが見上げて聞いた。

「ああ、どうせ飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要があったんだ」

雄二は頷いてフォローするように言う。

「んー、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

明久はそれを聞いて葉月ちゃんを見て聞いたら笑顔で頷いた。

重いテーブルを教室のはじめに置いて一息つく俺達。

秀吉が布巾ですぐさまテーブルを拭いて、ムッツリーニがテーブルクロスをかぶせる。

「光一に、龍も行くよね？」

明久が俺達を見て聞くので

「じゃあ、お言葉に甘えるか。召喚大会があるから、早めに昼を済ましたいし」

「そうだな、芹が在籍してるクラスも見たいし」

俺と榊も頷いた。

「私も一緒にします。つぐみちゃんと白姫ちゃんも行きましょう？」

「うん」

「はいですわ」

姫路が笑顔で言うつとつぐみと白姫を誘う。

「わっちも行くで！優羽はどないする？」

「うん……私も行くよ」

深紅も笑顔で言うつと遠月に尋ねる、遠月は少し考えてから答えた。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね？」

島田の口調は、普段と違って柔らかく優しい姉その物。
トータル10人。この人数で学園祭を歩き回るにはかなり不便にな
ってきている。
さすがにドレスや牧師さんの服は脱ごうという話になった。

「それで葉月ちゃん、ウェディング喫茶の話はどの辺で聞いた？」

「えつとですね……。」

短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんとカツコイイお兄さんがい
っぱい居るお店……。」

つぐみが葉月ちゃんに尋ねると思いだしながら言う。

それを聞いて、俺は真っ先に反応した。

「なんだって！？ 光一に雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がクラスの成功のために、（低いアングルか
らの）綿密な調査が必要だな！」

「ああ。これもFクラスの為だ！ 未開の楽園へと、いざゆかん！」

「「おおーっ！！」」

と、俺達は全力ダッシュで駆け出していく。

光一 side end

「葉月ちゃん、ああいう男は好きにならないようにね？」

「？はいです！」

葉月ちゃんの頭を撫でて俺が言うと笑顔で返事をした。

「吉井君」

「アキ君」

「アキ、最低」

「光」……姉上にフラれた故の錯乱と信じたいのじゃが、良いのかの？」

「光も男なんはわかるけど」

瑞希とつぐみが若干悲しそうに見える。

島田は不機嫌そうに言い、秀吉は遠くを見つめて呟いた。
神埼ちゃんは苦笑いしてるな。

「……………（りゆうくん、追いかけてよう？）」

「そうだな」

芹が俺のシャツの袖をくいくいと引つ張って苦笑いしながら言う。
俺は頷いて明久達を追いかけることにした。

もちろん、シロや瑞希、つぐみや神埼ちゃん達も一緒にだけどな。

数分後……

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！！」

Fクラスが宿敵Aクラスが経営する。

メイド&執事喫茶『ご主人さまと呼んであげなくもないわ』の前に
て。

俺達が追いつくと雄二は心底嫌そうに、久遠はすごく複雑そうな顔
で立っていた。

「というか。呼びたいのか、呼びたくないのか、どっちなんだ？」

Aクラスの看板を見て久遠は呟く。

それに関しては同感だ。

「そっか。」

ここって坂本の大好きな霧島さんと、久遠の大好きな木下さんと榊
の恋人の芹香さんが居るクラスだもんね」

島田はAクラスを見て思い出したように呟いた。

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？ 久遠君も、気
持ちはわかりますけど……」

「……いや、大丈夫。いい加減未練は断ち切るべきだし、敵情視察何だから、な？」

瑞希は諭すように雄二に言い、久遠も見て言う。
久遠が少し考えてから結論をだす。

「光……」

「光くん……」

その姿に、相棒の明久はいたたまれないような気持ちで見ていた。
神崎ちゃんが心配そうに久遠を見ていた。

「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

その空気を破ったのは、連続して聞こえるシャッター音。

「……ムツツリーニ？」

「……人違い」

明久が声をかけると他人の振りをする。

「どっからどう見てもムツツリーニだろ！ 厨房責任者が何してやがる！？」

「……敵情視察」

久遠が叫ぶように言うと淡々とした口調で答えた。
いや、ローアングルの写真撮影では、とてもその説得力はないぞ。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……」

「……1枚100円」

明久が注意するようにムツツリーニ言うと明久に聞こえるように言う。

「2ダース買お……じゃなくて、可哀想だと思わないのかい？」

思わず買いそうになるが耐えてムツツリーニ言う。
それに驚いたムツツリーニは呆然としていた。

「……そろそろ当番だから戻る」

「全く、ムツツリーニにも困ったもんだね」

が、すぐにそそくさと戻って行った。

明久がため息をついて言う。

一瞬買いそうになってたら、説得力ないぞ？明久。

「それじゃ入るわよ。お邪魔します」

島田が1番手となり、いざメイド喫茶へ。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのは知的な美人メイド事、霧島翔子。

「わあっ、きれい……」

長い黒髪にエプロンが映え、黒のストッキングが美脚を際立たせている。

これは女であろうと、見惚れる光景だろう。

芹香もこの姿だから余計似合ってるんだよな。

「それじゃ、僕らも」

「流石はAクラスやね。雰囲気も違っで」

「はい、失礼します」

「お邪魔します！」

「お姉さん、きれー！」

続いて瑞希と葉月とつぐみを連れた明久が、中に入る。

「…………お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、模範的な礼儀で出迎えた。

そして芹を見てアイコンタクトをする霧島ちゃん。

「……………（お帰りなさいませ、ご主人様）」

芹は頷くと俺を見て笑顔で言う。

やばい、幻視で芹の頭の上にネコミミが見える。

「「お帰りなさいませ、お嬢様？」」

その次に神埼ちゃんと遠月ちゃんとシロが入ると晃希と神薙がいた。二人の服装は執事の服だな。

「わふ〜！晃希さん、カッコイイですの」

「ありがとうございます、お譲様」

シロが目をキラキラさせて言うので晃希がくすつと笑って答える。お似合いだよな、本当に。

「綾人が執事とは、面白いもん見れたで」

「俺は面白くないんだけどな」

クスクス笑う神埼ちゃんに神薙は苦笑いしながら言う。

「ほら、いつまでも仏頂面してんじゃねえ」

「ちつ……」

今度は久遠と、それに連れられ不機嫌そうな雄二。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

と、雄二に対して、かなりアレンジが加えられた出迎えが贈られた。

「お帰りなさいませ。サービスとして、保健体育の特別実習を一晚
中行います」

「……特別実習終了後、全身の関節が粉々になるまでマッサージをさせていただきます」

と、これまたかなりのアレンジが加えられた出迎えがあった。

「……って、あれ？」

久遠を出迎えたのは翔子ではなく、工藤愛子と木下優子の2名。ちなみに前者を出迎えるはニコニコと笑顔の工藤ちゃんが行い、後者は目が笑っていない笑顔の木下ちゃんが行った。

「優子ちゃん！」

「……………（ゆーちゃん！）」

ピココン…！

それを聞いた芹とつぐみが巨大ピコハンで木下ちゃんの頭を叩いていた。

息が合うな〜と感心していたら瑞希もつぐみ達にくわわろつか悩んでいる所が見えた。

「いたたっ…何するのよ!？」

「そこで正座！」

「……………（ゆーちゃん、私達怒ってるんだよ?）」

木下ちゃんが頭を押さえて言うつつぐみと芹が厳しい目で見ていた。二人の威圧のオーラに反射的に正座する木下ちゃん。

まあ、こうなるよな。

「光一、龍、どうしよう」

「俺に聞くな」

「そのままにしとくしかないだろ」

明久が困っていると久遠と俺が苦笑いしながら答える。

「えーっと……他の人は席に着く？」

「ああ、そうするよ」

工藤ちゃんが俺達を見て聞くので頷いた。

「龍兄、わたしは芹ちゃんをつぐみちゃんを見えます」

「そうか？その方がいいかもな」

未だに説教をされている木下ちゃんを見てから瑞希を見て言う。
瑞希は若干に苦笑いしていた。

「では、お席にご案内いたします」

後で晃希に説明してもらった工藤ちゃんが俺達を席へと案内する。
説教が済んだのか芹とつぐみと瑞希が木下ちゃんを連れて戻ってきた。

「優子、言葉にはきーつけなあかんで？」

「ダブルで説教は辛いわ」

疲弊した木下ちゃんに神埼ちゃんが苦笑いしながら言う。
説教がよほど堪えたのだろっ疲労がつかがえる。

「……………」

久遠は木下ちゃんを見ていた。

メイド姿を見て絶句してるのかな？

「どうしたのよ、光一？」

「あつ、いや、その……………」

「お前、やっぱりまだ吹っ切れてないだろ？」

雄二の突っ込みに、久遠は苦虫を噛み潰した顔をした。

「ダメですよ、坂本君。誰かを想う気持ちを諦める事は、すごく辛いと思いますから」

「そうよ坂本。そう言う事だからかうなんて、感心しないわ」

「坂本君！久遠君の気持ちをちゃんと考えて言わないとダメだよ？」

瑞希と島田とつぐみが久遠をフォローするように言う。

とりあえず、この場は収まったな。

「あははっ、学園1の過激派って話だけど、随分と純情なんだね？」

すると、工藤ちゃんが出てきて笑って言った。

「あれ？ 確か保健体育実践派の……」

「愛子、遊んでないであっちをお願い」

「あっ、うん」

木下ちゃんに注意され、工藤ちゃんは別のテーブルへと向かって言った。

それと入れ違いで、霧島ちゃんと芹が見るからに高級そうなメニューを持ってやってくる。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島ちゃんが用意したメニューを受け取り、それぞれ注文品を決定。

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれが良いです」

「葉月もー！」

「あたしもそれにしようかな」

「わっちもやね」

「つぐみんと同じ奴ー！」

「私は深紅お姉ちゃんと同じお姉ちゃんと同じものがいいですわ
」

と、女性陣は女性らしいメニューに。

「僕はえーつと……じゃあ、その、オレンジ、ジュースで。後、ト
ーストお願い、します」

「俺は紅茶にケーキセットだな」

明久はそもそも、喫茶店で注文などする機会などない。
なので、少々無難な物で行く事にした。

「俺はケーキセット。飲み物はコーヒー、エスプレッソで」

「んじゃ、俺は……」

久遠が注文すると次は雄二の番になり

「……ご注文を繰り返します」

すると雄二の注文を、翔子が遮るように声を上げる。

「……ふわふわシフォンケーキを7つ、トーストとオレンジジュ
ースを1つ、ケーキセット、お飲み物はエスプレッソを1つ、紅茶と
ケーキセットを1つ、メイドとの婚姻届を1つ。
以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞ！」

それを聞いた雄二が叫ぶ。

「はい、以上でお願いします」

「テメ、光一！！」

久遠がしれっとスルーして言うと雄二が久遠を睨む。

「……では、食器をご用意いたします」

女子7人と俺と光一の所にはフォークが、明久の前にはストローが。そして雄二の前には、実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！ これ本当にうちの实印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください」と、霧島ちゃんは優雅なお辞儀をして、キッチンと思わしき方向へと歩いて行った。

「さて、そろそろ本題に入るかえ。葉月ちゃん、この辺りで聞いたんやね？」

「うん。嫌な感じのお兄さん2人が、おっきな声でお話してたの」

「もしかして、あの2人ですか？」

たまたま話を聞きつけた晃希が、入口を指差した。そこには、坊主とモヒカンの2人組がいた。

「だからあのスラリと伸びた指が美しいと言ってるだろうが」

「お、おい夏川！ 落ち着けよ、悪評を流しにきたんだろ！ なに良い事ばかり言ってるんだよ」

坊主が興奮したように言うとモヒカンが驚きながら止めていた。

「晃希、あいつら何やってんだ？」

「来てから、あの調子なんですよ」

俺が晃希に聞くと苦笑いを浮かべて晃希が答える。

「これなら、ほつといてもええね」

「そ、そうだね」

「わふ〜、よく分からない人達ですの」

神崎ちゃんが笑って言うつとつぐみは苦笑いしてシロは不思議そうに呟いた。

ほんと、何しに来たんだ？

「綾人、こっちも手伝って欲しいですよ！」

「あー、走るとこけるぞ？霞」

145cmくらいの少女がパタパタと走ってきて神雑に声をかける。なんか、狐っぽいようなミミがあの子の頭上にあるような気が。

第30問 Aクラスへと偵察だよ！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！

第31問

深紅side

「で、三回戦目は不戦勝だったんだよね」

「わっち等のもや」

あの後、問題ない為に常夏コンビと坂本をほっという試合が始まるまで店の手伝いをして。

時間がきたから三回戦目に行ったはいいけど、不戦勝だった。なんでやる？

「ならば、済まぬがこっちに協力してくれんか？」

常に満員だったホールは、今ではお持ち帰りコーナーまで出来ているんやで。

花嫁をお持ち帰りというわけでは断じてないえ。

「思ったよりサービスが好評で、食べ物だけ欲しいというお客が増えてきたのですよ」

「なるほど、だが材料が足りるのか？」

亮がこちらに来て苦笑いしながら言うといつのまにか戻ってきた坂本が聞いてきた。

どこか疲れた様子があるけど、大丈夫やろ。

「明日の分から頂戴しておる。無論、明日の分は亮が既に注文して

おるので心配無用じゃ」

「そうだな。稼げる時に稼いでいたほうがいい。だが、そうになると……何かインパクトが必要だな」

秀吉が質問に答えると坂本は顎に手を当てて考え込んで呟いたんや。そして坂本は辺りを見渡す。

まるで特定の人物を探しているようやね。誰を探しているんや？

「よし、明久。おまえスクール水着にネコミミをつける」

「その二つは混ぜたら危険だよね!？」

坂本が突然そう言うにつぐみガツツコミをいれていた。というか、結婚式と全然関係あらへんやん。

「ちよっ……! お願い許して! ドレスならまだしもそんなの着たらもうお婿にいけない!」

「あ、アキくん!大丈夫だよ、えっと…なんだったら、あたしと瑞希ちゃんまで」

吉井が慌てながら言うにつぐみまで慌てるように言う。てか、フォローになってへんやん。

「安心しろ、尻尾は勘弁してやる」

「坂本君にとってはそれで安心なのですか!？」

坂本が笑顔で言うと恋ちゃんがツッコミをいれていたで。

「じゃあじゃあ、つぐみんはゴスロリね」

「なんでそうなるのー!?!」

遠月が笑顔で言うつつぐみが遠月を見て言う。

あー、それも確かにインパクトはあると思うで。

「ねえねえ、綾人もタキシードを借りて着てみてくださいです」

「なんでだ?」

こっちはこっちでなんやほんわかムードやね。

てか、神薙と霞ちゃん。

実は恋人同士なんやろか

「…………ニヤン」

「しよ、翔子!? バカな、なぜお前がここにギャアツ! 爪で引つかくなあつ!?!」

さすが霧島やね。坂本の行動なんて全てお見通しみたいや。

しかし、ネコミミメイドとは。

制服に着替えてこんかったんやね。

「…………光」

「絶対、着ないからな!?!」

あ、優子も来たみたいやけど。
なんか、あつたん？

優子は背中後ろに何か隠し取るけど、何をもっとるんやろ。

「「たっだいま〜！」」

「ただいま戻りました〜」

「ただいまです！」

おっ、4人娘も帰って来たみたいやね。

「さて、お前らにはまたドレスを着てもらっぞ」

「ふう、あれ動きづらいのよね」

坂本が島田に近寄って言うところか疲れたように島田が呟いた。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

吉井のズボンを引っ張って葉月ちゃんが聞くと不思議そうな顔をしてから尋ねる。

「お手伝い？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだ
い！」

「けど、ごめんね。 気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は
数が」

それを聞いて小首をかしげてから頷いて答えると吉井が困ったように言う。

「……………！！（チクチクチクチクチク）」

「つ、土屋君！？ どうしてそんなすごい勢いで裁縫を！？
っていつかさっきまでいなかったよね！？」

ものすごい勢いで裁縫して土屋を見てつぐみがツッコミをいれていた。

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

セリフだけなら、かつこええけど。凄くカッコ悪い気がするぞ。

「でも、時間がないから三回戦が終わったら着替えますね」

「だめだ。Fクラスのウエディング喫茶を象徴するために着て行け。
宣伝のためだ、我慢してくれ」

姫路が苦笑いして言うと坂本が断固とした態度で言う。

「おい、雄二。瑞希が嫌がってるだろ」

「というか、父さんも来るんですよ？ウエディングドレスなんて着たら」

榊が坂本を咎めるように言うと亮が呆れたように言う。

「俺がどうかしてたみたいだ。許してくれ」

坂本が土下座して謝っていた。

そのままの格好で急いで出て行く3人。

さすがに結婚もしてないのにドレス姿を父親に見せるのはマズイで。

「んしょ、んしょ」

「……………！！（ボタボタボタ）」

「……………！！（は、葉月ちゃん！ そんなところで着替えちゃダメだよー）」

が、土屋の前で着替えるのはもっとマズイと思うので。
芹香、ナイスアシストや。

「後、シロちゃんもだよ？」

「きゅーん」

つぐみが着替えようとするシロに忠告していた。

こっちでも着替えようとしてた奴がいたん！？

「とりあえず、あたし達だけでも着替えてこようっ？」

「そっやね」

「賛成！」

「わっ！行きますわ！」

「そろそろしましょっ」

5人で更衣室に向かうことにしたで
あ、衣装はウエディングドレスやで

第31問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第32問(前書き)

夏川が変になりました。

第32問

つぐみside

「着たけど」

「やっぱり恥ずかしいです」

「つぐみちゃんは葉月とおそろです」

「あはは（苦笑）」

「つぐみん可愛いよ」

「こんなもんやね」

「なんでアタシまで」

「じよ、女装させられる為に僕は連れてこられたんですか!?!」

「深紅お姉ちゃんをつぐみお姉ちゃんとおそろですの」

あたしと葉月ちゃんと恋ちゃん、深紅、優羽ちゃん、優子ちゃん、雨咲さんとシロちゃんとで着替えた。

ちなみにあたしはウエディングドレスにうさみつけた衣装になった。

なに、これ!?!?

深紅と恋ちゃんと優羽ちゃんと葉月ちゃんと優子ちゃんと蒼夜くん

はウエディングドレスになった。
というか、優羽ちゃん。

着替える前にBクラスへと行って雨咲くんを拉致してくるのはやめてあげようよ。

「……………！（ブシャアアアア！！）」

あ、土屋君が鼻血を噴出した。

「ムツツリーニ！！！！」

アキくんが倒れた土屋君に駆け寄る。

「来たばつかで悪いが早速ウエイトレスをやってくれ」

「はい」

「わかったわ」

「ほな、頑張るとす」

「恥ずかしいよ」

「了解ですの」

「了解」

「僕もですよ、わかってますけど」

坂本くんがあたし達を見て言うので頷いて接客に向かった。

雨咲くんは…落ち込んでいたけど。

亮くんは同士がきたかのようになんか会話してたような気がする。

「僕らの為ありがとうね、葉月ちゃん」

「ううん。葉月も楽しいもん！つぐみちゃんや他のみんなとの作業だし」

アキくんが葉月ちゃんの頭を撫でて言うと葉月ちゃんは笑顔で言う。
そして、ウェディングドレスから着替えた瑞希ちゃんと美波ちゃんが召喚大会に行った後。

「雄二。僕と秀吉と葉月ちゃんをつぐみで回ってくるよ」

「そうか、気をつけていけよ？」

「何かあったら言うんだぞ」

「……駆けつける」

「うん、じゃあね」

アキくんは残った雄二達が言うのを頷いて歩き出した。
あたしもアキくんと一緒に歩くことにした。

「そや！わっちらもいかへん？」

「そうだな、今は人数少ないし」

「この姿で？」

という声があたし達が出た後で聞こえてきた。
久遠君と深紅と優子ちゃんだと思つ。
仲良いな

つぐみ side end

恋 side

「たっだいま！」

「ただいま戻りましたー」

「戻つたよ」

ホールに響き渡る元気な声。どうやら勝つたみたいですね。

「丁度良かったよ。二人とも疲れているところ悪いけど、すぐに着替えて来てくれるかな？」

吉井君が笑顔で三人に言う

「あれっ？ 亮は？」

「おっ！ 帰つてきたみたいだな」

窓の外から見えるのは迫り来る人の壁。

その先頭にいるのは亮と神崎さんと久遠君とその隣にいる木下さん。2-Fのプラカードを持って歩く姿は甲子園みたいです。

「二人とも、どうだった？」

「勝ちました！」

胸の前でVサインを作る瑞希。

これで次の吉井君達に当たるのは瑞希達ということですか。

「亮。これで大会に流れていたお客さんの分は大丈夫じゃ。もうホールに戻ってくれんか」

「分かったよ秀吉」

受付のほうは相変わらず混んでいますけど、ホールのほうはまだ少し空席がありますね。

先ほどまでいた長蛇の列も大会の方に流れてしまったみたいです。

「亮くと秀吉くんは少し休んできたらどうかな？」

二人とも朝からずっと働きっぱなしですし、なんだか申し訳ない気がしますしね。

瑞希と美波もいるから、花嫁の数もなんとかなると思いますし。

「それでは休むとするかの」

「そうですね。少し休みましょう」

秀吉君が言つと亮くんも頷きました。

「それじゃ、2人ともウエイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オツケー」

吉井くんが瑞希と美波に言つと二人は頷いてウエディングドレスの裾を翻して走っていきました。

「君。注文してもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

わたしは相手に失礼のないように注文票を構えました。

「紅茶と、チーズケーキを」

「かしこまりました。紅茶とチーズケーキですね？」

メモを取り、注文内容の確認の為にお客さんに顔を向けると教頭でした。

普通に見に来ただけですよね？

「ありがとうございます。後で後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

「はい。なんででしょうか」

決まり文句を言って厨房に向かおうとすると足を止めて振り向く。

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」

その言葉に不思議に思いながらわたしは答えます。

「吉井明久君ですか？すぐにお呼びしますね」

「ああ、頼むよ」

わたしは笑顔で言うと教頭は頷いて言った。
なにを考えているのでしょうか。

とりあえず、吉井君に近寄って教頭が吉井君に用があると伝えて厨房に向かいました。

「えっと、僕が吉井明久ですけど」

「ああ、そうかい。君が吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思えます」

「ああ。すまない。だが、私はどうしても教え子である君の事を吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室ではなんて呼ばれているんですか……？」

吉井君の気持ちもごもつともです。

「亮君、どこに行くんですか？」

「ちよつと在庫の確認してくるんですよ」

亮君が教室を出ようとしていたので声をかけると笑顔で答えてくれました

「そうですか、迷子にならないでくださいね」

「僕は方向音痴ではないですよ」

わたしは笑顔で言うと亮くんは苦笑いして教室から出ていきました。

恋 s i d e e n d

亮 s i d e

「おい」

「はい？」

空き教室で在庫の確認をしていると後から声がかかった。
声の主は明久ぐらい歳の男三人組ですか。

「あの、ここは部外者立ち入り禁止だから出て行ってもらえますか？」

チンピラどもだって事は分かっているけど、だからこそ冷静に対処しないと。」

「俺たちについてきてくれないか。悪いようにはしないからよ。」

「恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしててくれや!。」

ぬ、僕は女だと見られてないみたいですね？

「……僕は女ですよ?。」

「そんな胸のない女がいるか!。」

うわ、この人島田さんにぼこぼこに殴られそうなことを言いますね。

そんなことを考えてるとガラツと音をたてて扉が開いた。

「待て、チンピラ共、その人を放すんだ!。」

逆光でシルエットが黒く浮かび上がる。丸まった頭、風にたなびくマント。

そこにいたのは、変な赤い仮面を被った坊主頭へんたいの男でした。

「なにやってるんですか、夏川先輩。」

「お、俺の名前を知っていてくれてるなんて……感激だ!。」

胸の前で手を組み、天に召されるような格好をしている夏川先輩。とてつもなく奇妙な絵です。頭にちょこんとついている蒼い花が非

常に気持ち悪いですし。
センスも最悪ですよ。

「はっ！？ ち、違う！ 俺は夏川俊平という名ではない！」
誰も下の名前まで言ってませんって。

「やいやいやい、三人がかりでかよわい乙女を襲うなんて天が許しても、この俺が許さねえ
……って、どこに行った！」

「先輩の迫力に脅えて逃げていきましたよ」

「イタイ奴だ。関わるとうるくな目にあわなそうだぜ」
と言って逃げたのは、こんな変な格好をして助けに来てくれた先輩の名誉を護るために黙っておきますか。

「お怪我はありませんか？」

「いえ、僕は大丈夫です」

むしろあなたを精神科医に連れて行きたい。外傷のない怪我は見つけにくいですからね。

「それでは」

「あ、待ってください」

「はは、名乗る者ではありませんよ」

だから誰も聞いてないって。
ガラガラとドアを開け去っていく変態。とうとう病院に連れて行く
ことが出来ませんでした。

第32問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第33問

優羽 side

「明久、深紅。そろそろ四回戦だ」

「え？もうそんな時間なの？」

「ほな、いこか」

時計を見た光一くんがあつきと深紅ちゃんに声をかける。
午後二時過ぎ。喫茶店に夢中になっているうちに随分と時間が過ぎていたみたいだね。

「あれ？アキたちもそろそろなの？」

「そうなんですか？実は私たちもそろそろ出番なんですよー」

「緊張が解けない」

みなみんなが驚いて言うと瑞希ちゃんも驚いて言い、渚ちゃんは緊張してるみたい。

瑞希ちゃんとみなみんなが手に持ったトレイを置く。
アッキーが教室の外に出ようとすると、くいくいつとズボンの裾が引っ張られてた。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」

「葉月ちゃん。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だから大人しく待っていてくれるかい？」

雄ちゃんのはーちゃんの頭の上にぽふっつと手をのせる。

膝を折り曲げ目線をあわせるあたり、子どもの扱いに慣れていると思っね。

「その代わりに、良い子にしていたら……」

そんな彼女を元気づけるように、雄ちゃんは優しく微笑んで、

「バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」

「坂本君、何言ってるの！！」

「なんでだ、これの方が効果的だろ？」

「それでも、アキ君に被害が及ぶことはダメ！」

「は？被害って」

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

「ち、違うんだよ。葉月ちゃん！ 僕には君が期待するような財力はないんだ！

ねえ、聞いてる！？」

凄いい勢いで去っていく葉月に声をかけるが、もう厨房に消えていた。

「アキ、ちょっと校舎裏まで来て？」

「美波ちゃん、ちょっと待っててください！そんなことしたらダメです！」

「そつだよ、待ってよ！」

つぐみんと瑞希ちゃんがみなみに怒りながら言う。
どちらもあつきーが大事だもんね

「で、でも」

「美波ちゃんも吉井君が好きなら暴力はダメです！」

恋ちゃんが戸惑っているみなみに諭すように言う。

「雨宮……悪い」

「そつ思つなら、アキ君いじめるの止めて」

自分が爆弾発言したせいで不穏な空気になると謝る雄二につぐみは
まっすぐ見つめて返す。

瑞希ちゃんと恋ちゃんがいるかつぐみに負担はないみたいだね
そつ思つてるとつぐみんが時計を見て

「優羽ちゃん、恋ちゃん、あたし達も行こう？」

「了解」

「はい！」

そんな騒動があつた中でわたし達は召喚大会に向かった。

優羽side end

つぐみside

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』

マイクを持った審判の先生に呼ばれ、あたし達6人はステージへ上がる。

お客さんの席は満員状態となり、中には立ち見している人がいる。そんな大人気の中、僕らの四回戦は始まるつとした。

『えー、まず、皆さんにお知らせしたいことがあります』

壇上で挨拶をする先生が辺りをぐるつと見渡した。

『写真撮影はご遠慮ください』

さきほどからフラッシュの光が眩しく、シャッター音が絶え間なく聞こえている。

それもそうだよ、壇上にはドレス姿の瑞希ちゃんと美波ちゃんがいるんだし。

瑞希ちゃんのお父さんが『明日の決勝戦に来る』と言うことで、

ここに来る前に坂本君が半ば強引に着せたんだけど、ここまでの反響だとは思わなかったよ。

「これなら宣伝効果は抜群だね」

「そうですね、店の集客率はさらに上がると思います」

優羽ちゃんが笑顔で言うと恋ちゃんも頷いた。

「恥ずかしいけど、宣伝頑張ろうね？」

「は、はい……。恥ずかしいですけど……。頑張ります」

体をまるめて俯いている瑞希ちゃん。

耳まで真っ赤になってるし、これは相当恥ずかしいんだね。あたしも気持ちわかるよ。

でも、なんであたしのはミニドレスなのかな？

「と、遠月は恥ずかしくないわけ!？」

美波ちゃんも顔を真っ赤にしている。

優羽ちゃんは不思議そうにして小首をかしげる

「け、結婚式は身内だけでします」

「か、体のラインが出ないドレスを選ぶわ」

「恥ずかしすぎるよ〜」

三人とも恥ずかしいよね。

『6人とも、そろそろ良いですか?』

「あ、はい」

あたしがこくつと頷いた後、大きく息を吸い、片手を上にあげる。

「サモン試験召喚！」

あたし達6人の声が綺麗に揃い、それぞれの足元に幾何学模様の魔法陣が現れた。

本来は手を上げたり、声をそろえたりする必要はどこにもない。一種のパフォーマンスだ。

この様子だけで観客席から小さな歓声があがる。

この試合から見始めた人に見れば、これだけでも充分に物珍しい光景なのかな。

第33問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837q/>

ちっさい幼なじみIF過激と猫と歌姫

2011年11月20日09時35分発行